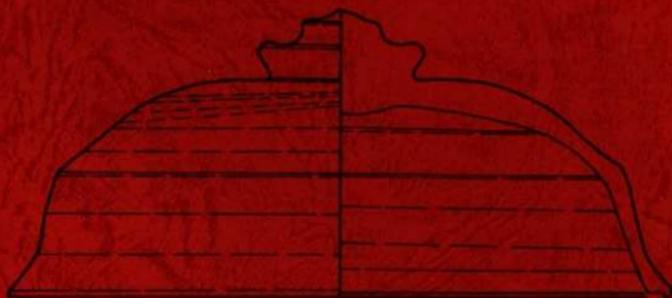


K-561

米沢市埋蔵文化財発掘報告書第 67 集

大 浦

大浦B遺跡発掘調査報告書



T Y 704 出土瓦葺敷瓦断面図

平成 12 年 3 月

2000

米 沢 市 教 育 委 員 会

大 浦

大浦B遺跡発掘調査報告書

平成12年3月

2000

米沢市教育委員会

序 文

本書は平成10年、平成11年の2か年にわたり米沢市教育委員会が国庫補助事業として発掘調査を実施した大浦B遺跡第Ⅵ次・Ⅶ次の成果をまとめたものです。調査は個人の宅地開発に伴う緊急発掘調査としておこなわれました。

大浦B遺跡は、大浦遺跡群の中心をなす場所にあり、市街地から北東2kmの中田町字大浦を中心に所在します。遺跡群は、最上川（松川）と羽黒川に掘立川が合流する位置にあたり、発達した河岸段丘上に立地しています。

大浦遺跡群の範囲は西の大浦Bと南の大浦Aと東の大浦Cの3遺跡からなり、大浦B遺跡の場所が最も標高が高い微高地となっています。大浦遺跡群の調査としては、昭和59年に第1次調査を最初として、今回まとめる大浦B遺跡第Ⅵ次調査は大浦遺跡群の調査としては第16次、大浦B遺跡第Ⅶ次は第17次となります。

これまでの調査によって、南に二脚門を有する一辺40m四方に巡らされた欄列と内部に掘立建物を主体とした遺構群が確認され、これらの遺構は土地所有者の協力もあり、埋め戻されて現状保存されています。

遺物としては漆紙文書や二面硯等があり、遺構と遺物から奈良・平安時代の官衛跡との見方が強まっている遺跡です。今回2か年にわたる調査においても、これらを裏づける遺構や遺物が出土していると聞いております。特に土製碁石の出土は注目されます。

今後も、この遺跡の全容解明に向け尽力する所存ですので、関係各位のなご一層のご理解とご指導をお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまでの数次にわたる調査に際し、ご指導賜りました文化庁、並びに県教育庁文化財課、そして多大なるご協力を賜りました土地所有者である柴田円右工門氏、駐車場を借用させていただきました遠藤庄四郎氏の両氏に心から御礼申し上げます。

平成12年3月

米沢市教育委員会

教育長 佐藤政一

例 言

1 本報告書は、米沢市教育委員会が個人の宅地開発に伴う緊急発掘調査として1998年(平成10年)と1999年(平成11年)に実施した第Ⅵ次調査、第Ⅶ次調査の2カ年にわたって国庫補助事業として実施した成果をまとめたものである。

2 遺跡の所在地は下記の通りである。

第Ⅵ次調査区 山形県米沢市中田町字大浦395外

第Ⅶ次調査区 山形県米沢市中田町字大浦400外

3 調査期間

平成10年度(1998) 平成10年5月11日～同年7月3日

平成11年度(1999) 平成11年4月19日～同年6月30日

4 調査体制

○平成10年度(1998)

調査主体 米沢市教育委員会
調査総括 小杉 基(文化課長)
調査担当 手塚 孝(文化課文化財係主任)
調査主任 菊地 政信
調査補助員 黒崎 勉 黒沢富雄 長澤由紀
調査参加者 浅井忠士 遠藤富男 大地良子
小浦文吉 近野慶子 今野周蔵
佐藤四郎 佐藤高義 鈴木ひろ美
高橋信子 高橋洋三 武田房次郎
田中みつ 西野勇二 新田弘二
松本三郎 渡部和三
事務局長 小林伸一(文化課長補佐)
事務局 山本 卯(文化課文化財係長)
平間洋子(文化課文化財係主査)
月山隆弘(文化課文化財係主任)
調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課
(財)日本葺院
調査協力 柴田円右エ門 遠藤庄四郎

○平成11年度(1999)

調査主体 米沢市教育委員会
調査総括 小杉 基(文化課長)
調査担当 手塚 孝(文化課文化財係主任)
調査主任 菊地 政信(文化課文化財係主任)
調査補助員 長澤由紀
調査参加者 石川八重子 伊藤博美 伊藤文二
遠藤庄四郎 遠藤富男 小浦文吉
近野慶子 今野周蔵 佐藤四郎
清水弘文 鈴木信雄 高橋信子
高橋洋三 戸田和子 西野勇二
新田弘二 星野 武
事務局長 小林伸一(文化課長補佐)
事務局 岡本善彦(文化課文化財係長)
渡辺麻子(文化課文化財係主査)
月山隆弘(文化課文化財係主任)
調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課
調査協力 柴田円右エ門 遠藤庄四郎

- 5 大浦遺跡群はA, B, C, Dの4地区からなるが、発掘回数を累計しているために大浦B遺跡での平成10年度の調査は第15次調査、平成11年度は第16次調査となる。本報告書においては大浦B遺跡としてまとめ、平成元年度を第1次調査、次に平成2年度を第2次調査、平成3年度を第3次調査、平成4年度を第4次調査、平成7年度を第5次調査、平成10年度を第6次調査、平成11年度を第7次調査とした。なお、大浦遺跡群はD地区を除き、官衙推定地として包括されるので大浦遺跡と呼んでいる。
- 6 挿図縮尺、遺物実測図についてはそれぞれスケールで示した。但し、遺構図面中の遺物については縮尺不同である。写真図版の完形復元土器は縮尺不同、他はスケールで示した。図示した遺物の番号は実測図、遺構出土遺物、写真図版と対応している。
- 7 文中、挿図中の記号は、G-グリット、BY-掘立柱建物跡、DY-土壇、KY-溝状遺構、PY-ピット、TY-柱穴、DN-井戸跡、ON-欄列、HY-竪穴住居跡、AN-焼土遺構、AZ-土器、DZ-鉄製品、F-覆土、S-礎を示す。
- 8 柱穴の平面図、土層断面図で使用したスクリーン-tonは、柱痕跡が明確なものに砂目を使用した。なお、掘立柱建物跡平面図のスクリーン-tonは、各図の中で、関連しない柱跡(掘り方も含む)や土壇、ピットについて使用した。
- 9 挿図中の方向は真北に合わせ、グリットの各マス目の番号は西北の数字で表す。掘立柱建物跡の真北に対しての角度については各挿図に示した。(例としてN-4°-Wは真北に対して西へ4度傾いていることを示す。)
- 10 土師器、須恵器に関する調整手法の分類基準は、米沢市埋蔵文化財報告書第36集「大浦」に掲載したものをを使用した。分類については同書に掲載したものを使用し、若干加筆し作成した。
- 11 本調査により出土した遺物については整理後復元し、米沢市埋蔵文化財資料室(米沢市万世町桑山269-3)に一括保管している。
- 12 本報告書の作成については、菊地政信が担当し、長澤由紀が補佐し、編集については菊地が行ったが、全体は手塚が総括した。責任校正は岡本善彦がその責務にあたった。
- 13 土製碁石については、(財)日本書院からご教示を賜った。記して感謝したい。
- 14 本書では、第Ⅵ・Ⅶ次調査を一括して報告する。遺構番号は第1次調査から一部を除き通し番号になっている。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ節 遺跡の概観と調査の経緯	1
1 遺跡の立地と環境	1
2 調査に至るまでの経過	1
3 調査の経過	5
・第Ⅵ次調査(平成10年度)[大浦遺跡第15次調査]	5
・第Ⅶ次調査(平成11年度)[大浦遺跡第16次調査]	5
第Ⅱ節 検出遺構	10
1 遺構の概要	10
2 I期の遺構	10
3 II期の遺構	12
4 III期の遺構	17
5 IV期の遺構	22
6 V期の遺構	32
第Ⅲ節 検出遺物	35
1 A群土器	35
2 B群土器	59
3 C群土器	59
4 D群土器	60
5 E群土器	60
6 F群土器	61
7 G群土器	61
8 土製品	61
9 墨書土器	62
10 へら書き土器	62
11 漆紙	61
12 鉄器	61
13 古銭	62
14 近世陶磁器	62
15 出土土器の年代	63
第Ⅳ節 総括	64
1 大浦遺跡の遺構	64

第 1 次調査 (大浦C遺跡第 I 次調査)	6
第 2 次調査 (大浦A遺跡第 I 次調査)	6
第 3 次調査 (大浦C遺跡第 II 次調査)	6
第 4 次調査 (大浦B遺跡第 I 次調査)	6
第 5 次調査 (大浦C遺跡第 III 次調査)	6
第 6 次調査 (大浦A遺跡第 II 次調査)	7
第 7 次調査 (大浦B遺跡第 II 次調査)	7
第 8 次調査 (大浦C遺跡第 IV 次調査)	7
第 9 次調査 (大浦B遺跡第 III 次調査)	7
第 10 次調査 (大浦B遺跡第 IV 次調査)	8
第 11 次調査 (大浦A遺跡第 III 次調査)	8
第 12 次調査 (大浦B遺跡第 V 次調査)	8
第 13 次調査 (大浦A遺跡第 IV 次調査)	8
第 14 次調査 (大浦C遺跡第 V 次調査)	8
第 15 次調査 (大浦B遺跡第 VI 次調査)	9
第 16 次調査 (大浦B遺跡第 VII 次調査)	82
2. 大浦遺跡の遺物	82
3. まとめ	83
参考文献	83
報告書抄録	84

挿 図 目 次

第 1 図 大浦B遺跡調査区位置図
第 2 図 大浦B遺跡グリット配図
第 3 図 大浦B遺跡群調査区全体図
第 4 図 大浦B遺跡第VII次調査 HY1030(I 期)平面図 (1)
第 5 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY42 平面図(II期) (1)
第 6 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY44,45 平面図(II期) (2)
第 7 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY43,46(II期),BY49(III期)平面図 (3)
第 8 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY21 平面図(III期) (4)
第 9 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY47,48 平面図(III期) (5)
第 10 図 大浦B遺跡第VII次調査 BY50(III期)平面図 (6)
第 11 図 大浦B遺跡第VI次調査 BY52 平面図(IV期) (7)
第 12 図 大浦B遺跡第VI・VII次調査 BY51,56 平面図(IV期) (8)

第 13 図	大浦 B 遺跡第 VII 次調査 BY53,54,55 平面図(IV期) (9)	25
第 14 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査土塙井戸跡平面図 (1)	28
第 15 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査土塙平面図 (2)	29
第 16 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査土塙平面図 (3)	30
第 17 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査土塙平面図 (4)	31
第 18 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (1)	40
第 19 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (2)	41
第 20 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (3)	42
第 21 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (4)	43
第 22 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (5)	44
第 23 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (6)	45
第 24 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (7)	46
第 25 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図 (8)	47
第 26 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器・土師器拓影図 (1)	48
第 27 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図 (2)	49
第 28 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図 (3)	50
第 29 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図 (4)	51
第 30 図	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図 (5)	52
第 31 図	大浦 B 遺跡遺構変容図	65
第 32 図	大浦 B 遺跡第 I 期遺構全体図 (1)	66
第 33 図	大浦 B 遺跡第 II 期遺構全体図 (2)	67
第 34 図	大浦 B 遺跡第 III 期遺構全体図 (3)	68
第 35 図	大浦 B 遺跡第 IV 期遺構全体図 (4)	69
第 36 図	大浦遺跡群遺構変容図 (II 期, III 期)	70

付 表 目 次

第 1 表	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査土塙分類表	27
第 2 表	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査遺構細類表	32
第 3 表	土器調整手法分類表	36
第 4 表	大浦 B 遺跡出土 A 群土器分類表 (1)	37
第 5 表	大浦 B 遺跡出土 B 群土器分類表 (2)	38
第 6 表	大浦 B 遺跡出土 C・D 郡土器分類表(3)	39
第 7 表	大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物計測表	53
第 8 表	大浦遺跡出土土師器編年表	55

第9表	大浦遺跡出土須恵器編年表	55
第10表	米沢盆地土師器編年表(8・9世紀)平成5年手塚作成	56
第11表	米沢盆地須恵器編年表(8・9世紀)平成10年手塚作成	57
第12表	大浦B遺跡AN5出土遺物一覧表	58
第13表	大浦遺跡Ⅱ期建物跡平面図(1)	71
第14表	大浦遺跡Ⅱ期建物跡平面図(2)	72
第15表	大浦遺跡Ⅱ期建物跡平面図(3)	73
第16表	大浦遺跡Ⅲ期建物跡平面図(4)	75
第17表	大浦遺跡Ⅲ期建物跡平面図(5)	76
第18表	大浦遺跡Ⅲ期建物跡平面図(6)	77
第19表	大浦遺跡Ⅳ期建物跡平面図(7)	78
第20表	大浦遺跡Ⅲ期建物跡平面図(8)	79
第21表	大浦遺跡Ⅲ期建物跡平面図(9)	80
第22表	大浦遺跡Ⅳ期建物跡平面図(10)	81

図版目次

巻頭図版1	第Ⅵ次・Ⅶ次調査区全景(空中写真)
巻頭図版2	第Ⅵ次調査出土遺物
図版1	第Ⅵ次調査区遺構全景
図版2	第Ⅶ次調査区遺構全景
図版3	第Ⅵ次・Ⅶ次調査区全景(空中写真)
図版4	第Ⅰ次・Ⅱ次・Ⅵ次調査区Ⅱ期遺構全体図(空中写真)
図版5	第Ⅰ次・Ⅱ次・Ⅵ次調査区Ⅲ期遺構全体図(空中写真)
図版6	第Ⅵ次調査発掘調査風景・ANプラン確認状況
図版7	第Ⅵ次調査発掘調査風景・AN5セクション状況(東西)・AN5セクション状況(南北)
図版8	第Ⅵ次調査AN5置物出土状況
図版9	第Ⅵ次調査DZ17出土状況、AZ23出土状況
図版10	第Ⅵ次調査DY767土師器出土状況KY855完掘状況
図版11	第Ⅵ次調査手前からBY44～49検出状況
図版12	第Ⅵ次調査BY42・43・21検出状況、BY42に伴うKY456セクション状況
図版13	第Ⅵ次調査TY643(Ⅲ期)、TY609(Ⅱ期)半裁状況、TY658(Ⅲ期)、TY627(Ⅱ期)の半裁状況

- 図版14 第Ⅵ次調査TY 615 A (Ⅲ期), TY 615 B (Ⅱ期) の共用する柱穴平面状況, TY 650 (Ⅲ期), TY 617 重複状況
- 図版15 第Ⅵ次調査TY 634 堀方状況, TY 638 (Ⅱ期) 半裁状況
- 図版16 第Ⅵ次調査TY 615 A (Ⅱ期), TY 615 B (Ⅲ期) の半裁状況、TY 605 (Ⅱ期), TY 641 (Ⅲ期) の半裁状況
- 図版17 第Ⅵ次調査BY 52 (Ⅳ期) 近景、BY 52 (人の立ってる箇所が柱穴)
- 図版18 第Ⅵ次調査ON 233 コーナー一部近景、ON 233 西側近景
- 図版19 第Ⅶ次調査BY 54 近景、BY 53 近景
- 図版20 第Ⅵ次・Ⅶ次調査 復元 土師器・杯・甕
- 図版21 第Ⅵ次・Ⅶ次調査 復元 須恵器・杯
- 図版22 第Ⅵ次・Ⅶ次調査 復元 土師器・須恵器蓋
- 図版23 第Ⅵ次・Ⅶ次調査 須恵器・壺・甕類
- 図版24 第Ⅵ次・Ⅶ次調査 その他の遺物

付 図 目 次

- 付図1 大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ遺構全体図
- 付図2 大浦遺跡Ⅱ・Ⅲ期遺構全体図

卷頭図版 1



▲第Ⅵ次調査区全景（空中写真）



▲第Ⅶ次調査区全景（空中写真）

卷頭図版 2



▲第VI次調査区出土遺物



▲第VI次調査区出土遺物

第1節 遺跡の概観と調査の経緯

1 遺跡の立地と環境 (第1図)

本遺跡は米沢市役所から北東約2kmの中田地区に位置する。遺跡の南西を掘立川、南東には吾妻山系を源とする最上川(松川)、東方を羽黒川が流れ、掘立川と最上川は遺跡の直下で合流し、さらに約600m地点の東方で羽黒川に合流する。

微高地となっている大浦B遺跡の北方にも西から東に流れる小規模な河川があり、現在は上堀と下堀に別れているが、両岸には小規模な河岸段丘が認められることから旧掘立川跡と考えられる。このように大小の河川に囲まれた状況を呈し、標高は234mを測る。河川との比高差は7mあり、1段目の河岸段丘は大半が水田として利用されている。

大浦遺跡群はA～D遺跡の4箇所からなるが、一連の調査から大浦D遺跡は中世が主体であることから除外、大浦A・B・Cの3遺跡を大浦遺跡と呼び、この範囲が郡衙推定域としてとらえることが相当と考えられている。

遺跡周辺は水田や畑が多い地区であったが、市街地からの道路が開通したことに伴い、米沢市街地への北側玄関口として、交通量が多く郊外型の店舗進出に伴い、年ごとに環境が変容してゆく地域である。それに伴って、発掘調査が実施された箇所もある。

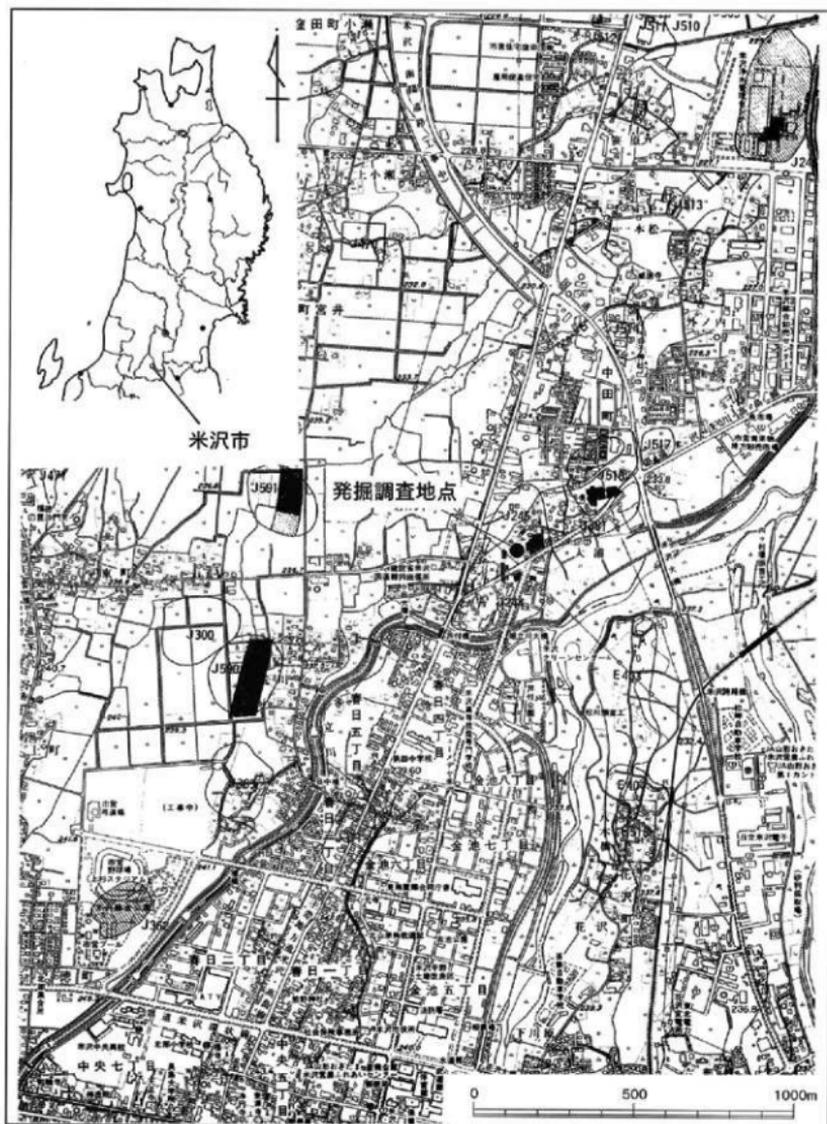
2 調査に至るまでの経過 (第2図)

大浦遺跡が初めて発見されたのは1984年(昭和59)6月である。大浦Cと命名された地点で駐車場造成工事が行われ、削平された面に土師器や須恵器、焼土が散乱した状況を呈していた。この場면을県道を走っていた車の窓から見た調査員は遺跡であることを直感したのである。同年6月15日～同年7月2日の期間で発掘調査を実施し、奈良期溝状遺構4基や布目瓦を発見した。この箇所の発掘を第1次調査と呼び、現在(平成11年)までに第16次を数えるに至っている。

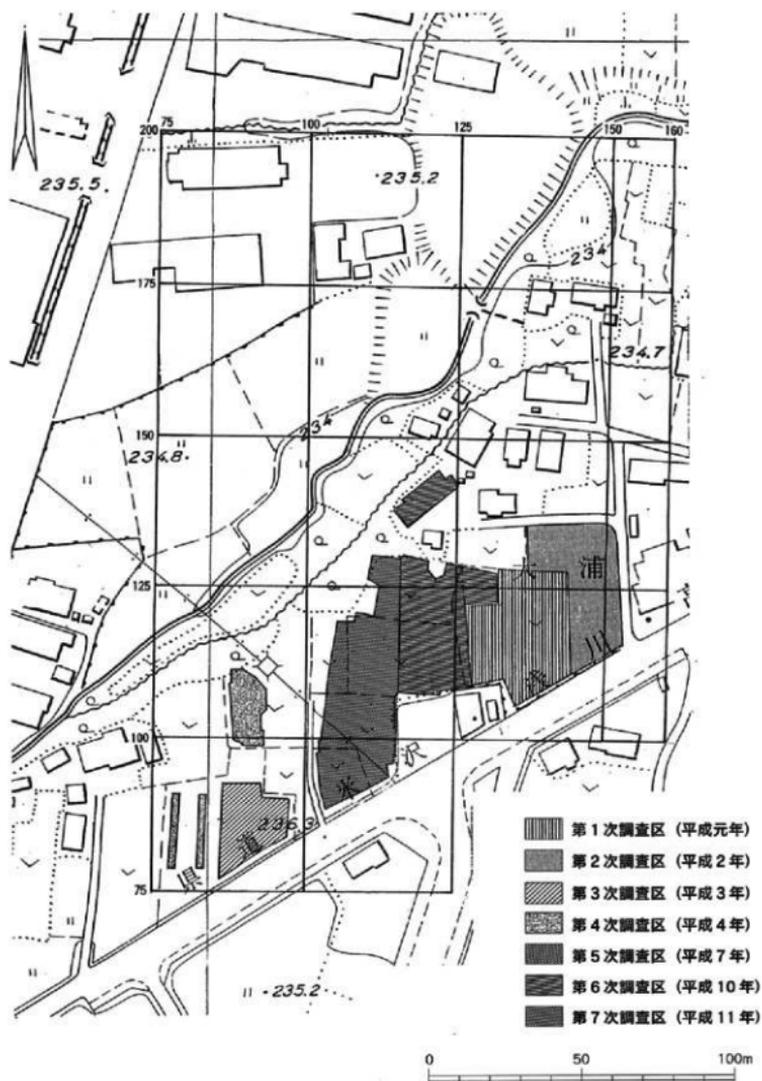
発見された溝跡は西方や南方に延びる事から、遺跡の範囲を想定でき、地形から判断してA・B・C・Dの4箇所に分けて米沢市の遺跡分布図に登録するとともに関係機関に連絡した。

その後も大浦A遺跡が金池第2土地区画事業に伴う緊急発掘調査として1985年(昭和60年)12月に第2次調査として実施している。1989年(平成元年)4月には第3次調査、そして今回報告書をまとめる大浦B遺跡の第1次調査(大浦遺跡第4次調査)を実施している。

1990年(平成2年)には大浦B遺跡第II次調査(大浦遺跡第7次調査)、大浦B遺跡第III次調査(大浦遺跡第9次調査)を1992年(平成4年)に、同年12月に大浦B遺跡第IV次調査(大浦遺跡第10次調査)、1995年(平成7年)には大浦B遺跡第V次調査(大浦遺跡第12次調査)そして、今回報告書をまとめる大浦B遺跡第VI次調査(大浦遺跡第15次調査)を1998年(平成10年)に実施した。1999年(平成11年)にも引き続き大浦B遺跡第VII次調査(大浦遺跡第16次調査)として実施した。一連の発掘調査によって大浦遺跡の約3分の1について、発掘調査を終了したことになる。

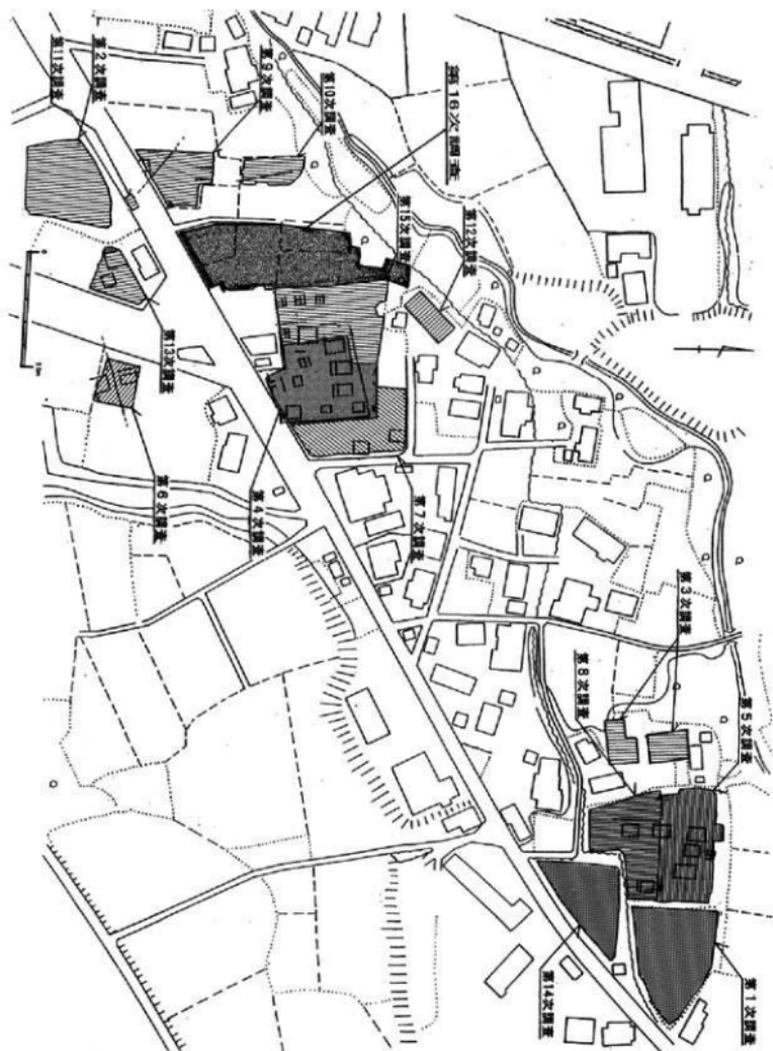


第1図 大浦B遺跡位置図



第2図 大浦B遺跡グリッド配図

第3图 大浦通防群調査区全体图



3 調査の経過

・第Ⅵ次調査（平成10年度 大浦遺跡第15次調査）

今回の調査は、個人の開発計画に伴う緊急調査として実施するものであり、調査対象面積となる約4,000㎡のうち1998年度（平成10年）は東半分の約2,000㎡を対象としている。調査区の東側は、既に平成元年と平成2年度に第4次、第7次の調査を実施している。詳細は第2図を参照願いたい。前述した調査区には柵列で区画された内部に大型の建物群が企画的に配置されていたことから官衛遺構として注目された。

しかし、西側の一部が未調整であったことや郡庁か正倉かの判断根拠が難しく、全体の規模や性格に関しては課題も残っていた。今回の調査区はまさにその西側を対象としたもので、大浦遺跡の解明に大きく前進するものと期待された。

調査は、5月11日から開始する。重機による表土剥離を5月13日までに行い、5月14日からは面整理に着手し、平行して遺構確認の精査を5月22日まで行った。調査区の中心部分が、やや攪乱を受けていたが地層が明瞭なことから遺構全体に関しては比較的良好に検出することができた。

調査区の南側を中心に、奈良時代と推測される掘立柱建物跡の掘方がまとまって確認されたが、東側は主に中、近世に属する遺構、北側は中世に属する溝跡や土壌が集中する傾向を示していた。5月25日からは、確認した遺構の掘り下げに入る。

遺物は、南側を中心に検出され、特に大型のAN5の焼土遺構からは灰釉陶器の蓋を始め一括土器がまとまって検出された。6月8日で遺構の掘り下げをほぼ終了し、6月9日から平面図の作成を開始する。同時に遺構全体の清掃も進め、終了後の6月12日に遺構全体の空中写真撮影を行った。6月25日で平面やレベリング、セクション図の一連の作業が終了する。

6月26日現地説明会の終了後、埋戻しを実施した。今回の調査面積は1,025㎡、調査期間は5月11日～6月30日の延べ50日間であった。

・第Ⅶ次調査（平成11年度 大浦遺跡第16次調査）

昨年にひきつづき実施したものであり、西側の残り箇所約2,000㎡を対象としている。調査は4月19日から開始した。現況は畑で占められたことから、耕作土を重機で剥離し、4月23日で終了した。面整理、遺構確認の精査を4月30日まで行った。5月1日～5月19日までは他の緊急調査が入ったため、一時中断しざるを得なかった。

奈良時代の土壌群は南東箇所を中心に検出され、柵列の南西部に土壌群が集中するものと推測される。西側は、平安に属する掘立柱建物を3棟確認した。5月20日から遺構の掘り下げに着手する。土壌群を中心に掘り下げた結果、遺物は小破片が多く認められた。6月9日までに遺構の掘り下げを終了し、6月10日に空中撮影を実施した。同日の午後から、柱穴群の半裁に着手する。6月14日から18日までに平板測量を実施する。6月21日の現地説明会終了後、埋戻しを行い6月30日にすべての作業を終了する。今回の調査面積は1,792㎡であり、調査期間は延べ53日間であった。

これまでの調査内容を簡単に列挙すれば次のようになる。

- 第1次調査 (大浦C第1次調査)
 - a 調査期間 1984 (昭和59年) 6月15日～同年7月2日
 - b 調査目的 個人駐車場建設に伴う緊急調査
 - c 調査面積 1,600㎡
 - d 検出遺構 奈良期溝状遺構4基同小ピット23基
 - e 検出遺物 土師器坏1点 須恵器坏1点 土師器・須恵器片950点 布目瓦2点 石器剥片1点 木筒1点 その他4点
- 第2次調査 (大浦A第1次調査)
 - a 調査期間 1984 (昭和59年) 12月2日～12月9日
 - b 調査目的 圃場整備に伴う緊急調査
 - c 調査面積 1,000㎡
 - d 検出遺構 奈良期溝状遺構10基 同柱穴5基 同土壌15基 同井戸跡1基 中世期小ピット44基 同池状遺構1基 不明遺構4基
 - e 検出遺物 復元一括土器20点 土師器・須恵器片985点 石鏃1点 石篋1点 磨製石斧1点 スクレーパー1点 剥片3点 近世陶磁器26点 鉄刀1点 木器5点
- 第3次調査 (大浦C遺跡第II次調査)
 - a 調査期間 1989 (平成元年) 4月3日～同年4月28日
 - b 調査目的 個人住宅建設に伴う緊急調査
 - c 調査面積 100㎡
 - d 検出遺構 中世期溝状遺構15基 同土壌2基 同柱穴161基 同小ピット46基 近世期流場跡3基
 - e 検出遺物 須恵器片5点 近世・中世陶磁器一括20点 同片600点 古銭13点 砥石31点
- 第4次調査 (大浦B遺跡第1次調査)
 - a 調査期間 1989 (平成元年) 11月6日～同年12月15日
 - b 調査目的 店舗建設に伴う緊急調査
 - c 調査面積 1,800㎡
 - d 検出遺構 (第7次調査で一括説明)
 - e 検出遺物 (第7次調査で一括説明)
- 第5次調査 (大浦C遺跡第III次調査)
 - a 調査期間 1990 (平成2年) 4月20日～同年5月30日 同年7月12日～同年9月14日
 - b 調査目的 個人の基盤整備に伴う緊急調査
 - c 調査面積 1,200㎡
 - d 検出遺構 奈良期掘立建物跡9棟 同土壌8基 同池状遺構10基
 - e 検出遺物 (第5次調査で一括説明)

- 第6次調査 (大浦A遺跡第Ⅱ次調査)
- a 調査期間 1990 (平成2年) 6月28日～同年7月19日
- b 調査目的 店舗用駐車場に伴う緊急調査
- c 調査面積 340 m²
- d 検出遺構 奈良期竪穴住居跡1棟 同掘立建物跡3棟 同井戸跡2基 同柵列3条中世期小ピット64基
- e 検出遺物 復元一括土器5点 土師器・須恵器片262点 剥片8点
- 第7次調査 (大浦B第Ⅱ次調査)
- a 調査期間 1990 (平成2年) 4月12日～同年4月20日 同年7月18日～同年7月23日 同年9月4日～同年10月31日
- b 調査目的 学術調査 (遺跡範囲確認調査)
- c 調査面積 520 m²
- d 検出遺構 奈良期竪穴住居跡4棟 奈良～平安期掘立建物跡29棟 同井戸跡3基同土壇30基 同溝状遺構4基 同柵列1条 中世掘立建物跡1棟 同溝状遺構3基 同柱穴群35基
- e 検出遺物 土師器蓋18点 土師器坏5点 土師器高台坏21点 須恵器坏36点 須恵器蓋8点 漆紙文書1点 土師器・須恵器片1,156点 鉄製品1点 鉄鏝1点 刀子1点
- 第8次調査 (大浦C遺跡第Ⅳ次調査)
- a 調査期間 1991年 (平成3年) 4月22日～同年7月26日
- b 調査目的 個人の基盤整備に伴う緊急調査
- c 調査面積 1,100 m²
- d 検出遺構 奈良期掘立建物跡11棟 同土壇14基 同池状遺構3基 同柵列1条 同溝状遺構3基 中世期掘立建物跡1棟 同柱穴548基 同溝状遺構4基 近世溝状遺構15基 同墓壇4基 土壇1基
- e 検出遺物 土師器・須恵器一括土器19点 同破片4,728点 布目瓦3点 中近世陶磁器6点 同破片413点 同木製品56点 石篋1点 石匙1点 その他10点 古銭7点
- 第9次調査 (大浦B遺跡第Ⅲ次調査)
- a 調査期間 1992 (平成4年) 3月10日～同年3月30日
- b 調査目的 学術調査 (遺跡範囲確認調査)
- c 調査面積 600 m²
- d 検出遺構 奈良期掘立建物跡4棟 同土壇10基 同溝状遺構2基 中世期柱穴46基
- e 検出遺物 土師器・須恵器一括土器5点 土師器・須恵器片679点 二面硯1点
- 第10次調査 (大浦B遺跡第Ⅳ次調査)
- a 調査期間 1992 (平成4年) 12月8日～同年12月25日

- b 調査目的 学術調査（遺跡範囲確認調査）
- c 調査面積 588 m²
- d 検出遺構 奈良期柱穴1基 同土壇4基 同柵列1条 中世期柱穴16基
- e 検出遺物 土師器・須恵器片50点 尖頭状石器1点 剥片4点
- 第11次調査（大浦A遺跡第Ⅲ次調査）
- a 調査期間 1992（平成4年）11月19・20日
- b 調査目的 下水道埋設工事に伴う緊急調査
- c 調査面積 20 m²
- d 検出遺構 奈良期柱穴8基
- e 検出遺物 土師器・須恵器片5点
- 第12次調査（大浦B遺跡第Ⅴ次調査）
- a 調査期間 1995（平成7年5月23日～同年6月5日）
- b 調査目的 個人住宅建設に伴う緊急調査
- c 調査面積 128 m²
- d 検出遺構 中世期柱穴47基 同土壇4基 同溝状遺構1基 近世井戸跡1基
- e 検出遺物 土師器・須恵器片35点 近世陶磁器54点
- 第13次調査（大浦A遺跡第Ⅳ次調査）
- a 調査期間 1996（平成8年）8月19日～同年9月10日
- b 調査目的 店舗建設に伴う緊急調査
- c 調査面積 400 m²
- d 検出遺構 奈良期竪穴住居跡1棟 同掘立建物跡3棟 同土壇5基 中世柱穴跡42基
- e 検出遺物 土師器・須恵器一括土器10点 土師器・須恵器片780点
- 第14次調査（大浦C遺跡第Ⅴ次調査）
- a 調査期間 1997（平成9年）12月8日～同年12月16日
- b 調査目的 集合住宅開発に伴う緊急調査
- c 調査面積 216 m²
- d 検出遺構 中世溝状遺構2基 同土壇1基 同柱穴跡8基
- e 検出遺物 土師器・須恵器片46点 瓦器1点 近世陶磁器9点
- 第15次調査（大浦B遺跡第Ⅵ次調査）
- a 調査期間 1998（平成10年）5月11日～同年6月30日
- b 調査目的 個人宅地開発に伴う緊急調査
- c 調査面積 1,025 m²
- d 検出遺構 縄文時代Tピット2基 奈良期土壇5基 竪穴状遺構2基 奈良～平安期掘立建物10棟 同溝状遺構1基 同柵列1条 平安期土壇22基 焼土遺構1基 中世期ピット41基 同溝状遺構12基 墓壇4基
- e 検出遺物 須恵器坏22点 須恵器蓋21点 須恵器椀9点 土師器阿黒3点 土師器内黒坏4点 土師器片3,746点 須恵器片801点 土製碁石1点 刀子1点

青銅釣針1点 古銭2枚

○第16次調査 (大浦B遺跡第Ⅶ次調査)

- a 調査期間 1999 (平成11年) 4月19日～6月30日
- b 調査目的 個人宅地開発に伴う緊急調査
- c 調査面積 1,792㎡
- d 検出遺構 奈良期竪穴住居跡1棟 同井戸跡1基 平安期掘立建物4棟 同土壇58基
同柱穴8基 同井戸跡1基 中世期溝状遺構9基 同ビツ群168基 井戸跡2基
- e 検出遺物 須恵器坏1点 須恵器稜塊1点 土師器内黒塊1点 土師器内黒坏1点 土師器高台坏1点 土製碁石1点 須恵器片936点 土師器片1,838点

以上が今回報告する第15・16次を含めた概要である。年代別の遺構としては奈良～平安期が中心をなす。遺物の出土量も比例する。縄文時代に関しては、第15次調査区の北方位置から2基のTピットが確認されたのが最初である。同時期に関しては土器が出土しておらず、時期は特定できない。石器は石鏃や石鎧等が数点出土しているにすぎない。

弥生時代や古墳時代の遺物は皆無であり、本遺跡の空白時代と言わざるを得ない。戸塚山古墳群の周辺に位置しながら痕跡が認められないのは、いかなる理由であろうか。今後の課題としておく。

竪穴住居跡は大浦B遺跡を中心に6棟確認されている。これらの遺構はすべて人工的に埋められた状況を呈する。遺跡の中心をなす奈良～平安期は掘立建物跡を中心に65棟を数える。柵列を中心に構築されⅡ期からⅤ期に分けられる。これらの中でⅡ期・Ⅴ期が最も多くの建物が存在したと考えられる。

遺物は大半が竪穴状の土壇から出土する。それらの中でも焼土を多く含む覆土からであり、これらの土壇にはANと略号をつけその数はAN1～AN5までの5基を確認している。土壇群は大浦B遺跡調査区のほぼ中央に集中しており、漆紙文書もこの形態の土壇出土である。

Ⅳ期、Ⅴ期になると柵列で区画した地区に建物が少なくなる。この段階で柵列はなくなると考えるのが妥当であろう。第16次調査区の建物は方向性から吟味すればⅤ期に分類されると考えられ、奈良時代末葉から続いた最後の遺構と考えたい。それ以後中世期まで若干の空白が生じるものと推測される。

中世期の中心は大浦Cから確認されている。屋敷を区画する大型の溝跡が発見され、字名も「館」である。この時期を代表する遺物として内耳取手土壺が上げられる。溝跡底面から出土しており、本市においては唯一の完形品でもある。中世期の建物としては掘立柱1棟ときわめて少ない。ただし、ピット群は数多く認められている。中世期のピット群は関連性を見いだすのが困難なものが多く、掘立建物跡と認識できないのが特徴である。

土壇について若干述べておきたい。柵列で区画された箇所は微砂質とシルト層で水はけも良好であるが、中世の中心をなす大浦C一帯は粘質土壇で水もちが良い。前者は畑作地帯、後者は水田地帯であった。

第II節 検出遺構

大浦B遺跡第Ⅵ次・Ⅶ次調査区の合計2,817㎡からは総計374基の遺構が確認された。遺構の番号は掘立建物跡（BY）、焼土遺構（AN）を除き第Ⅰ次から第Ⅶ次まで通し番号を使用している。これらの遺構の大半は掘立柱建物跡を構成する柱穴跡で占められるのが特徴である。遺構に記入した通し番号は確認した順にすべて柱穴跡にもつけたものであり、明確に掘立建物跡を構成する柱穴群を差し引いた数を記す。掘り方が小規模な柱穴跡はピットと称した。確認した遺構は、第Ⅵ次・Ⅶ次を総括して述べる。

1 遺構の概要【付図参照】

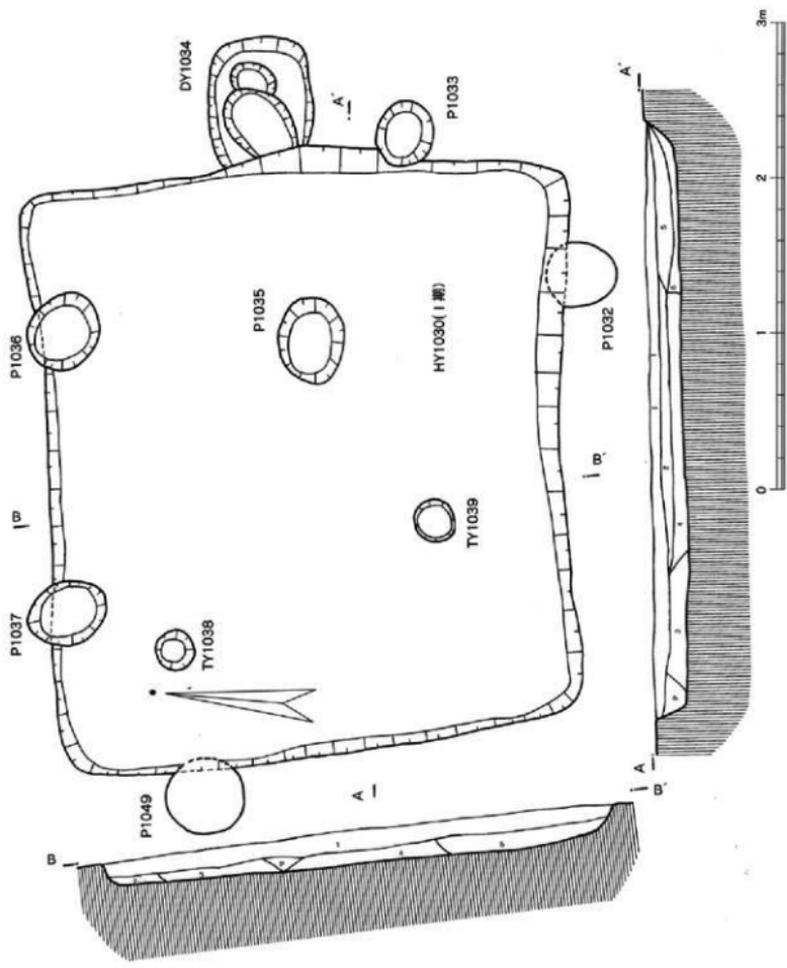
平成元年・2年に調査を実施した調査区からは、柱穴（TY）27基、ピット（PY）203基、土壇（DY）62基、溝状遺構（KY）8基、竪穴住居跡（HY）5棟、焼土遺構（AN）4基、柵列（ON）7基、土器焼成遺構（CN）2基、掘立柱建物跡（BY）34棟であった。

今回の調査区からはTピット2基、竪穴住居跡1棟、竪穴状土壇2基、土壇84基、溝状遺構21基、掘立柱建物跡16棟（1棟は平成元年に一部を確認しているため数の上では15棟となる）柵列についても同様で、西北コーナ部及び西側を確認した。他に柵列3基も新たに確認された。他に井戸跡3基、ピット209基、墓墳4基であった。これらの遺構群は重複関係や出土遺物から概ね5時期に分けられ、年代順にⅠ期～Ⅴ期に区分される。Ⅰ期は8世紀中葉以前、Ⅱ期8世紀中葉、Ⅲ期は8世紀後半、Ⅳ期は9世紀初頭、Ⅴ期は13世紀以降となる。官衛が存続したのはⅡ・Ⅲ期の遺構群と考えられる。各時期に分けて説明を加えたい。

2 Ⅰ期の遺構【第4図・14図・15図】

竪穴住居跡（HY1030）1棟、竪穴状遺構（FY746, DY755）2基、土壇（DY754・756・757・758・759）5基、井戸跡（DN1042）1基を確認した。竪穴住居跡は次調査区の西方に位置し、東西3.8m、南北3.2mの方形を呈し、深さは20cmを測る。壁は西方はほぼ直角に、東方はややゆるやかに立上る。床は平坦でTY1038・1039の2基が伴う。他の隣接するピット群は埋土から判断して関連しないものと推測した。竈は認められなかった。遺物はすべて破片で占められ図示するまでにはいたらなかったが総計48点出土している。内訳は須恵器甕片2点、須恵器蓋片2点、内黒土師器坏片7点、土師器甕片37点であった。

竪穴住居群は官衛施設の建物に伴って移転した可能性が強く、従って覆土も人工堆積を示す。今回の竪穴住居跡も同様の堆積状況である。竪穴状遺構は第Ⅵ次調査区の北東地区に位置し当初竪穴住居跡と考えられたが、掘り下げの結果、竪穴状遺構と判明した。FY746は東西3.5m、南北2.0mの不整形を呈し、深さは15cmを測る。遺物としては土師器甕片2点が出土している。DY755は長円形を呈し、南北4.5m、東西3.1mを測る。深さ30cmあり、覆土からは、須恵器蓋片1点、土師器坏片1点、内黒土師器坏片3点、土師器甕片4点が出土しているが、いずれも少破片である。覆土は人工堆積状況を呈し固い。



109
102

第4図 大浦B遺跡第VII次調査HY1030(I期)平面図(1)

I期の土壌群としては、DY755と重複して認められた。円形や方形の平面形状と呈し、深さは20cm～50cmを測る。DY756からは小型の土師器甕が出土している。覆土からは焼土が認められ、ゴミ捨て場の要素を持つ土壌であろう。

井戸跡は4基確認されている中で覆土の吟味からI期にはDN1042が担当する。第14図に図示した形態であり、平面形状は円形を呈し、直径は1.2mを測る。深さは1.1mある。表土のシルト層を掘り込んで、基盤層の砂利層に達している。現在は水は出ないが、当時はこの深さで出水したものと推測される。底面に施設が認められることから掘抜きの井戸であろう。遺物は出土しなかった。なお、第II次調査区からも井戸跡が発見されているが、いずれも遺物は少量であった。

DY767は第VI次調査区の北東に位置する。平面形状が楕円形状を呈し、長径90cm、短径75cmを有する。深さは20cm、ボール状に掘り込んだ形態で中央に土師器内黒を埋納した土壌である。覆土は人工堆積状況を呈し、黒色の炭化物を多量に含む土質である。この様相と類似するものとして、本市の上新田遺跡からも発見されている。祭祀的要素を有する遺構と推測したい。

以上、述べた遺構群から出土した遺物はI期に編年されるものが主体をなし、堅穴住居跡は8世紀中葉以前から存在し、8世紀中葉をもって廃絶し、同時位にII期の掘立柱建物群が建立されたと考えられる。

3 II期の遺構【第5図～第7図】

第VI次調査区を中心に認められた。遺構別に列挙すると掘立柱建物跡（以下建物跡という）7棟、溝状遺構2基、柵列2基となる。

南に南門を置き、東西41.5m、南北38.4mの柵列で区画された範囲には3棟、柵列外に4棟の配置であった。これらの遺構の中でON233の柵列は第VI次調査区の北東及び東方地区に位置し、東西16m、南北27mについて確認することができた。特に今回は西北コーナ部を確認したことによって、東西の範囲が明確になった。前述した数字であり、未確認場所は南西部一箇所だけとなる。またKY456も第I次調査によって東方部が確認されていた。なお、間尺については柱痕の中心から中心を測定値とし、柱痕が確認できなかった柱穴間の間尺については(・)印で示す。(m)単位で記した。以下各遺構群を説明したい。

○BY42建物跡（第5図）

柵列内の西方部中央に位置し、KY456が付随する。桁行南北3間(2.30m×2.30m×2.30m) 梁行東西3間(1.65m×1.65m×1.60m)の規模である。BY21と重複する。付随するKY456は東西4.2m、南北5.4mの範囲が今回の調査によって確認された。全容は東西7.1m、南北が東方で5.6m、西方が5.4mを測り、北方を中心に「コ」の字形に配置された排水路と考えられる。幅は30～50cmあり、深さは最深が10cmと浅く、断面形態はボール状を呈する。柱穴の掘り方60cm前後の隅丸方形形状を主体としている。深さは60cmあり、柱根跡が明瞭に残っていた。柱根跡は幅が22cmを測る。覆土は3層からなり、1層は黒褐色に黄褐色(地山の土)が霜降り状に混合している層である。2層は黒褐色に黄褐色がブロックに混入した層であった。

3層は黒褐色で覆われる。Ⅱ期の建物跡を構成する柱穴跡の覆土には焼土を含まないのか特徴である。ちなみに、Ⅲ期の柱穴跡の覆土には多量の焼土が混入している状況を呈していた。BY42を構成するTY628の覆土上面から第25図75の土製碁石が出土している。出土状況から建物跡から機能していた時期に偶然落下したものと推測するのが自然と考えたい。

○BY43 (第7図)

第Ⅵ次調査区の南西部に位置する。周囲の状況から全容を発掘することはできなかったが、3間×3間の総柱建物と推測したい。桁行南北2間(1.7m×1.7m)、梁行東西(1.7m×1.7m)ある。掘り方に重複した痕跡は認められなかった。掘り方の規模は隅丸方形を基本とし、65～80cmを測る。TY638を半裁したが、柱痕跡は認められなかったが、底面で痕跡を確認したので破線で記した。

○BY44 (第6図)

第Ⅵ次調査区の中央部やや南方部に位置し、BY47と重複する。桁行南北(1.6m×1.6m)、梁行東西(1.72m×1.72m)の総柱建物である。柵外にあり、BY44・45・46の3棟が南北に並んで確認された。TY605・641を半裁したので、図示した。TY605の1層は黄色で砂を含む。2層は黒褐色、3層は黄色と黒褐色の混合層である。明確に重複関係が判断できるセクション状況であった。ちなみにTY641は炭化物で覆われている。

○BY45 (第6図)

3棟の中央部に位置する。桁行南北2間(2.1m×2.1m)、梁行東西2間(2.4m×2.4m)の総柱の建物で、BY48と重複する。平面形状が隅丸方形を呈する掘り方であり、今回確認された建物でも最も規模の大きい掘り方を有する総柱建物である。TY615BがBY45に伴う柱穴である。半裁した結果、底面で重複関係を確認したので破線で示した。深さは80cmを測る。

○BY46 (第7図)

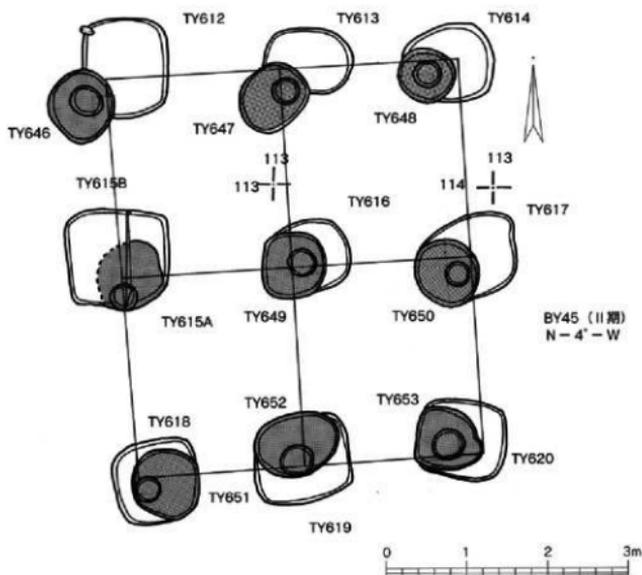
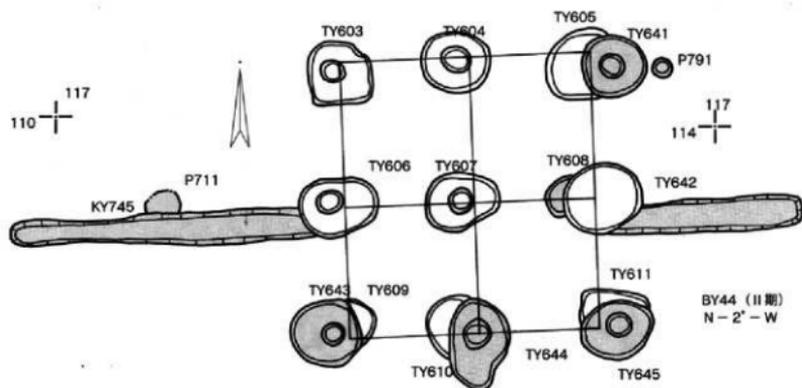
三棟の南方箇所に位置し、全体の3分2を確認したと推測される。前述したBY44・45と同時に構築された総柱の建物で倉庫と思われる。桁行南北(1.68m×1.68m)、梁行東西2間(1.86m×1.86m)である。BY49と重複する。N-O°-Wと真北方向に桁行が配置されている。

○ON1108 (付図1)

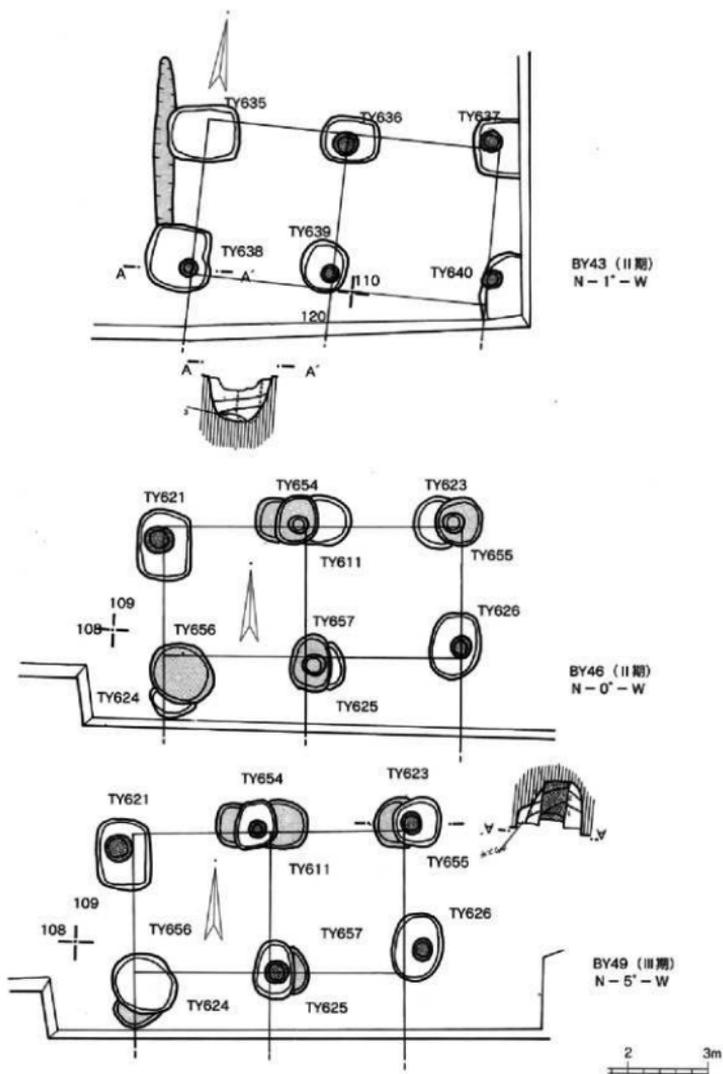
柵列の北西コーナ部内側に位置する。第Ⅰ次調査によって確認された大型建物BY1,8の西側であり、4基の柱穴から構成され南北に延びる。間尺は(1.5m×1.8m×1.75m)である。柱根跡を明確に残す。主要遺構を区画するON233柵列跡に関連する施設と考えたい。

○ON233 (付図1)

平成元年調査区の北方部に配置された柵列で今回の調査区で曲がることは予想されていた柵列跡であり、予想通り南に曲がった。丁度この箇所に梨の木があったので地権者をお願いして伐採した。Ⅱ・Ⅲ期に亘って存在したと想定され、幅が平均約30cmに掘り込んだ溝内に密に柱を配する形態を有する。BY42・21西方から2列発見されている。これはBY42・21の建替えに伴う柵列の移動が考えられる。またBY42・21とBY43の西方周辺には柵列の溝跡に重複し



第6図 大浦B遺跡第VI次調査BY44・45平面図(II期)(2)



第7図 大浦B遺跡第VI次調査BY43・46(II期) BY49(III期)平面図(3)

て柱穴が確認されており、これらの柱穴は槽跡や門跡の可能性あることをつけ加えておきたい。

一部削平によって溝跡がなくなっている箇所もある。柵列跡は北方東西で41.5mと判明した。これにより、主要遺構を区画した範囲は1593.6㎡(482.9坪)であり、残された未調査区を考慮すればあと2棟の建物が付随するものと考えられる。

従って、柵列内部には13～14棟の建物が構築されていたことになる。その中で総柱の倉庫は5～6棟の規模となる。ちなみに第Ⅵ・Ⅶ次の調査区からは柵列内部の大型建物を上回る規模の建物は確認されなかった。

○KY741 (付図1)

第Ⅵ・Ⅶ次調査区の北方に位置し、東西に延びる溝状遺構である。幅は平均50cmを有し深さ20cm～30cmある。断面形態は箱型で自然堆積状況を呈する。覆土からは須恵器坏片2点をはじめ、土師器坏片8点、土師器内黒坏片17点、土師器甕片25点が第Ⅵ次調査の範囲から出土している。第Ⅶ次調査区からは須恵器甕片2点が出土した。

地形的に見ると東から西へゆるやかに傾斜しており、溝跡は最終的に旧掘立川に通じていると推測されることから排水を目的とした施設と考えられる。第Ⅶ次調査区の溝状遺構のある位置には他の遺構は皆無であり、北側の唯一の遺構である。第12次調査区からは、奈良・平安期の遺構は認められなかった。これらの事項を加味すれば柵列で区画された西北地域は一連の施設の範囲外と想定される。ただし、中世期・近世期の遺構は認められる。

4 Ⅲ期の遺構

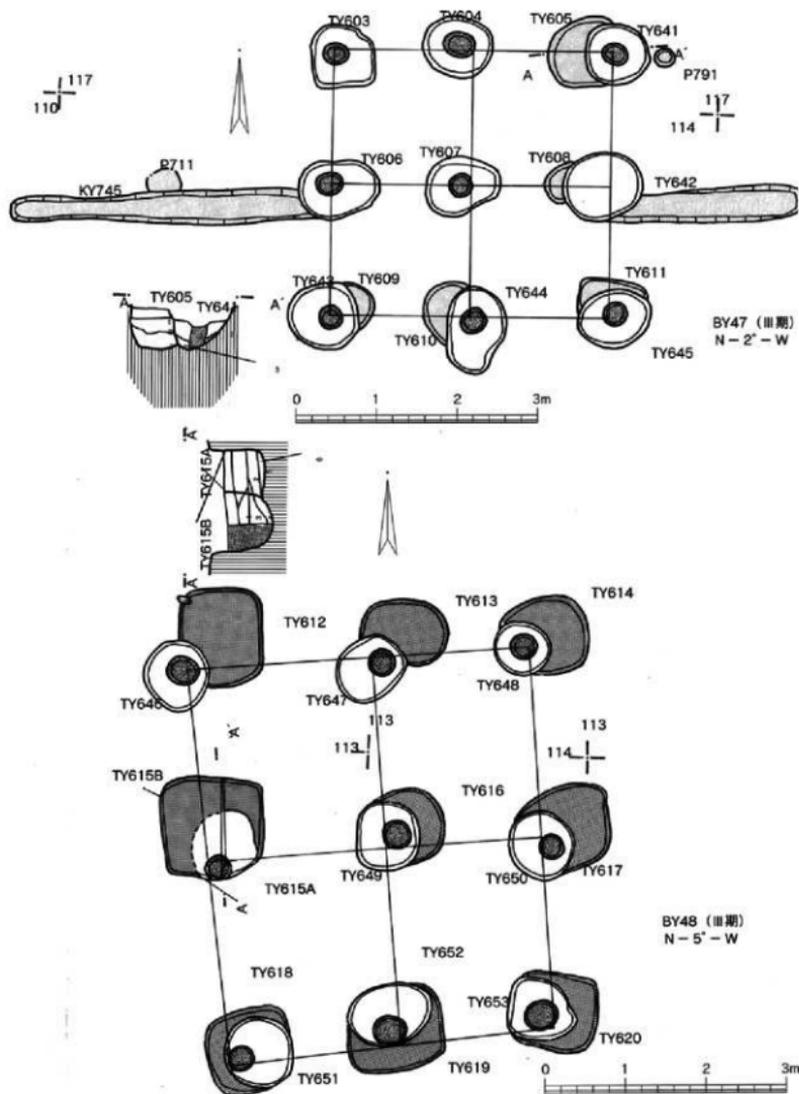
第6次調査区を中心に5棟の建物跡、柵列2基に遺構群が今回の調査から検出した。柵列内には1棟、他は柵列外である。全体的に見てみると17棟認められる。ON233の柵列に伴うと考えている。Ⅲ期の建物跡を構成する柱穴覆土には多量に焼土を含むのが特徴である。Ⅲ期は平安時代初頭に位置する。以下に説明したい。

○BY21 (第8図)

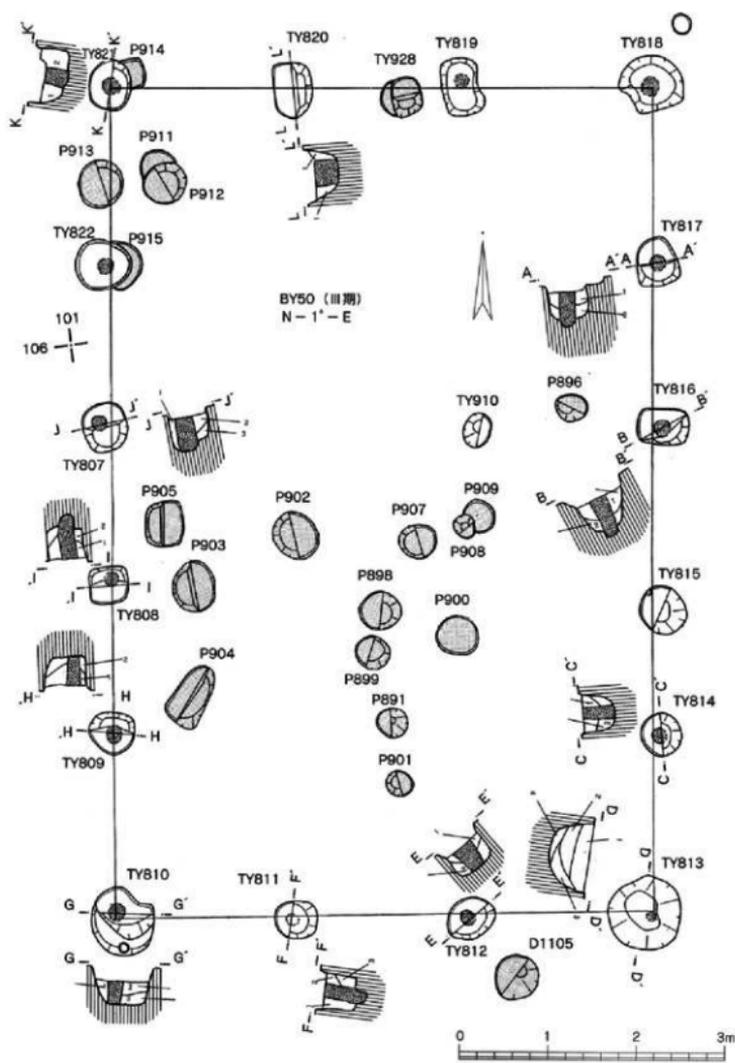
TY50・51・60・72・69の5基は第1次調査区からすでに確認されていた。その当時はKY456を伴うものと考えられていたが、今回の調査によって、BY21の柱穴がKY456を掘り込んで構築しており、KY456はⅡ期のBY42に伴う溝状遺構であると判明した。ここに訂正して報告する。第8図に示すように残りの箇所から9基の柱穴を検出し、当初につけられた番号を採用し、BY21とした。DY769・970は覆土の吟味からⅣ期に属する土壌である。また、柱穴の重複関係からBY42を建替えたのがBY21である。

桁行南北4間(2.0m×1.8m×2.0m×2.1m)、梁行東西3間(1.8m×1.65m×1.6m)の規模である。柱穴の掘方は、円形状を基本とし70cm前後を有する。柱根は25cm位の太さですべての柱穴から柱根跡が確認された。N-3°-Wに構築されており、Ⅲ期の大型建物跡であるBY19と類似する方向性を示す。BY42と共用する柱穴として、TY628・629・69・72・60の5基がある。柱穴は保存を前提にしていることから、代表的なものを選抜して実施した。

共用している柱穴も完掘すれば底面に痕跡が認められるものがあり、上面で重複関係を判断



第9図 大浦B遺跡第VI次調査BY47・48平面図(III期) (5)



第10図 大浦B遺跡第七次調査BY50(III期) 平面図(6)

する場合は慎重を期した方がよい。BY21・42・43の3棟が柵列内の建物跡である。BY42からBY21に建替える際に西側に80cm移動して柱穴を構築している。このため柵列が西側に移動したと推測される。

○BY47 (第9図)

第Ⅵ次調査区に位置し、北方からBY47・48・49の3棟が南北に並ぶ構成である。これら3棟は、Ⅱ期のBY44・45・46の3棟と重複する。BY47はBY44と重複し、桁行南北2間(1.6m×1.6m)、梁行東西(1.7m×1.7m)の総柱である。柱穴の平面形状は円形状を呈し、BY44の後に構築された建物跡である。TY605・641を半裁した。セクション図で示すようにTY605を削平して、TY641を構築した様相を明確に示している。TY641は確認のため上面を掘り込んでから半裁した。そのため1層がなくなっている状況を呈する。1層は黄色の色調で炭化物を含みやわらかい。2層は茶色の色調で炭化物を含む。3層は黒褐色と黄色の混合層でこれにも炭化物を含む。柱痕跡は「ザラ目」のスクリントーンで示した。この箇所は黒褐色に炭化物が認められ非常にやわらかい土質である。

柱痕跡はTY642を除き認められ、同様な太さを有する。N-2°-Wで、BY21・19の主要建物跡と類似する。建物跡中央に位置し、東西に延びるKY745は図面の上での重複関係では柱穴のほうが新しく図示してあるが、これは柱穴が深いための結果であり、KY745がBY47の上面を横断する状況を呈する。

遺物としては柱穴を掘り込んでいる面から土師器甕片2点、土師器坏片1点が出土している。

○BY48 (第9図)

3棟ある総柱建物跡の中央に位置する。桁行南北2間(2.3m×2.3m)、梁行東西(2.2m×1.9m)で南北が長い方形を呈する。Ⅱ期のBY45と重複し、建物跡を構成する柱穴の規模はⅡ期のほうが大きい。9基の柱穴すべてに重複関係が認められ、「ドット」のスクリントーンで示した。スクリントーンの貼っていない箇所がⅢ期のために掘られた柱穴であり、円形状の平面形態である。

半裁したTY615Aの深さは70cmを測る。Ⅱ期のTY615Bの底面をさらに掘り込んで構築している。N-5°-Wであり、やや西方よりとなる。

○BY49 (第7図)

最も南方に位置し、BY46と重複する。桁行南北2間(1.7m×1.7m)、梁行東西(1.5m×1.7m)と想定される総柱の建物跡である。N-5°-Wと3棟の中で最も西よりに構築されている。TY655を半裁し、図示した。1層は黄褐色層を有す地山の土をブロックを含む。2層は黒褐色に地山の土及び炭化物を含む。黄色(地山の土)に少量の黒褐色が混ざる。

いずれの覆土も固い。柱痕の箇所は複雑に土質が入り込んでいる様相を呈する。最下層に柱痕跡を確認した。

○BY50 (第10図)

第Ⅶ次調査区に位置し、桁行南北5間(2.0m×1.8m×1.8m×2.0m)、梁行東西3間を有し2.0m×2.0m×2.0mである。N-1°-Eで柱痕跡を残す柱穴が多い。

5 N期の遺構

官衛としての機能を失った直後に構築された遺構群であり、6棟の建物跡、土壇41基、柱穴8基、井戸跡1基が確認された。今回の調査区においては、すべて柵列外の検出であり、特にⅦ次調査区西南に集中する。また、土壇も多く検出され、遺物の大半は土壇覆土からであった。また建物跡の柱穴も小規模になる。土壇に関しては第7表に分類表、第1表に細類表を作成したので参照願いたい。列挙順に説明したい。

○BY51 (第12図)

ON233の中央部に柵列をまたぐように構築され、桁行南北2間(2.0m×2.0m)梁行東西(1.8m×1.8m)である。同時期と考えられる大型竪穴焼土遺構のAN5が隣接することから、存続時間が短い建物と推測される。

○BY52 (第11図)

N期の中で最も大型な建物跡である。桁行南北5間(2.0m×2.4m×2.1m×2.1m×2.4m)、梁行東西は北側が3間(2.8m×2.1m×2.4m)で、南側は4間(2.7×1.6m×1.2m×1.8m)である。内部にはI期の大型土壇DY755が位置する。柱穴の掘り方は円形状を呈し、深さは30～50cmを測る。DY753は中世の土壇である。

○BY53 (第13図)

第Ⅶ次調査区の南方に位置する。西から東に延び、南方に曲がるKY1101に東側を削平されている。溝状遺構のKY1101は中世期に構築された遺構である。桁行南北3間(1.75m×1.6m×1.55m)、梁行東西2間(1.55m×1.65m)である。N-14°-Wで、西方よりの建物跡である。後述するBY54・56と方向性が類似している。

○BY54 (第13図)

前述したBY53の北方13m地点に位置し、BY56と並列して構築された建物跡である。桁行南北3間(2.0m×1.85m×1.95m)、梁行東西2間(1.9m×2.05m)を有する。円形状に掘り込んだ柱穴の深さは50～60cmを測り、覆土は黒褐色を有する土色が主体をなす。建物跡南方に位置するDY950は中世期の土壇で関連しない。

○BY55 (第13図)

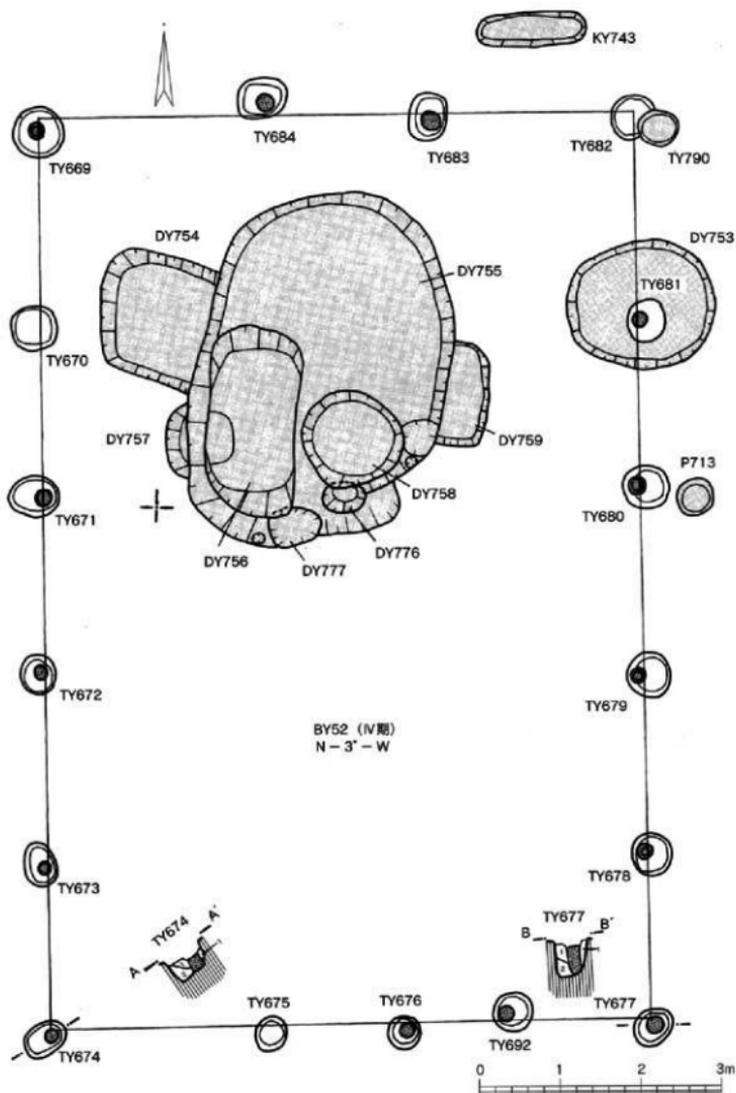
第Ⅶ次調査区の西方に位置し、桁行東西3間(1.8m×1.45m×1.8m)、梁行南北(2.1m×2.1m)である。西北部に農道があり、全容は発掘できなかったが、図で示す形態になるものと推測され図示した。内部に位置するDN1042は井戸跡でI期に担当する。重複したピットが認められるが、建替えの痕跡は確認されなかった。

○BY56 (第12図)

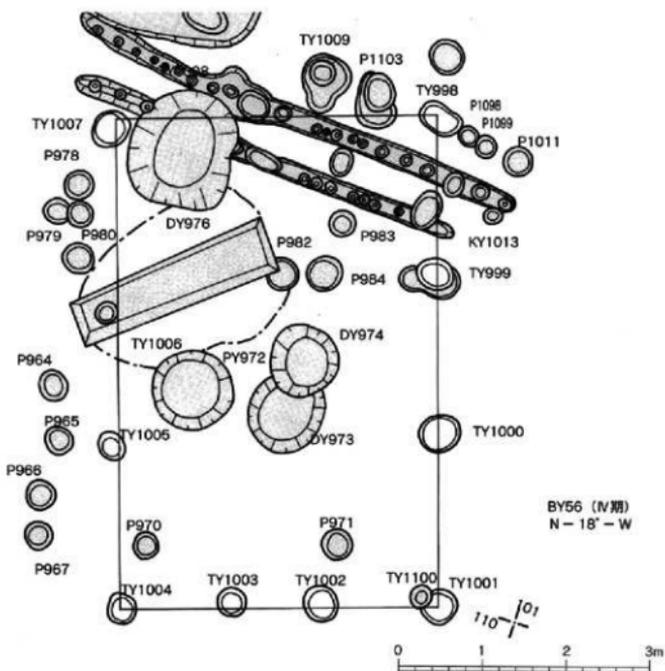
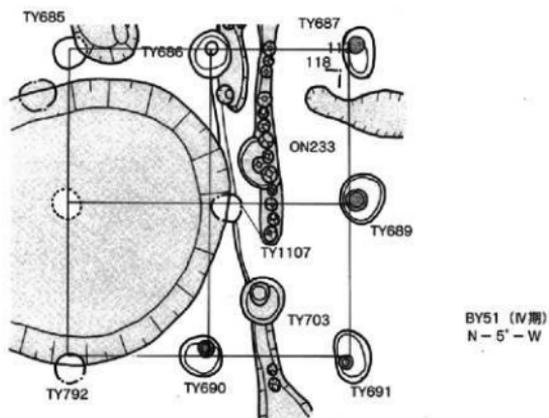
前述したBY54と並列して構築された建物跡である。桁行南北3間(2.1m×1.9m×2.3m)梁行東西(1.35m×1.48m)を有する規模である。

○BY14 (第53図)

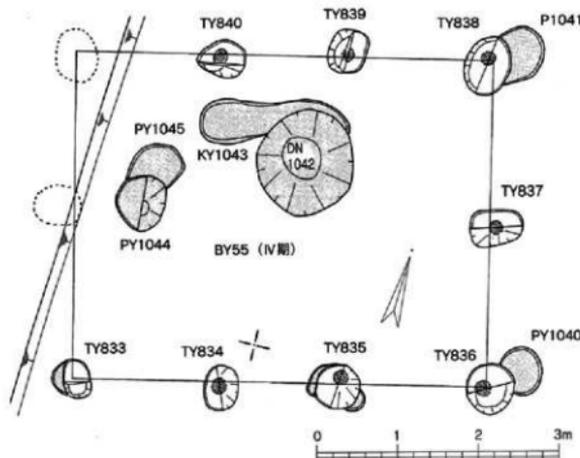
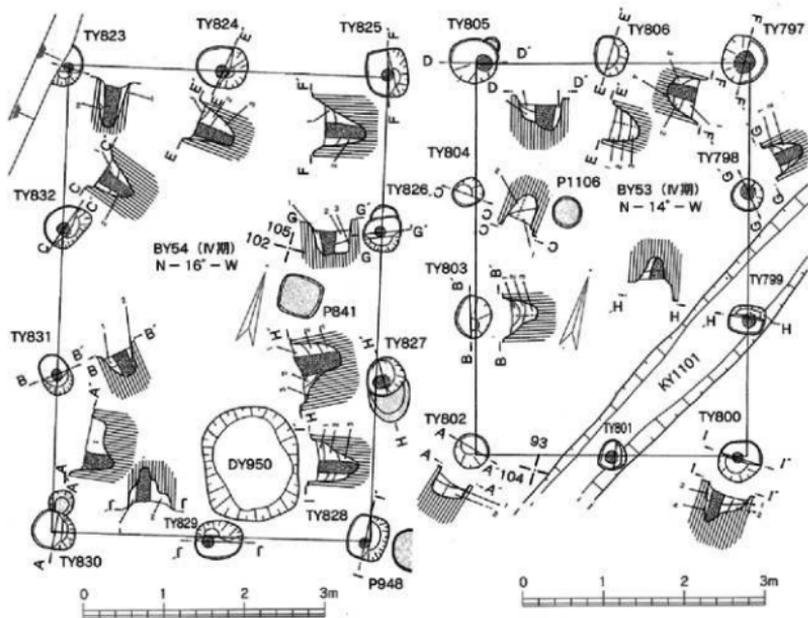
以前報告した米沢市埋蔵文化財報告書第36集20項でⅡ期としたが、吟味の結果Ⅲ期と訂正したい。ただし調査区が境線にあたり、西側は明確にすることができなかった。



第 11 図 大浦 B 遺跡第 VI 次調査 BY52 平面図 (IV 期) (7)



第 12 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査 BY51.56 平面図 (IV 期) (B)



第 13 図 大浦 B 遺跡第 VII 次調査 BY53・54・55 平面図 (IV 期) (9)

○IV期の土壌（第15～17図 付図1）

総数90基の土壌が今回の調査区から検出され、そのうち遺物や覆土、重複関係から41基がIV期に構築されたと考えられる。これらの土壌群は建物跡の周辺に分布する。第1表に示す様にA類～i類の9形態に細類される。

A類は大型で堅穴状に掘り込んだ形態で平面形状で円形状及び方形を呈する。本類としてはAN5が上げられる。遺物を多量に含むのが特徴で、第VI次調査の置物出土数の3分の1がこの遺構出土であった。

B類は円形や方形を呈する平面形状で深く掘り込んでいるのが特徴である。井戸跡と推測される遺構も含まれる。IV期に位置するこの形態は認められなかった。

C類は大型で浅い形態を有する土壌で第VII次調査区を中心に、6基確認された。いずれも遺物の出土量は少ない。

D類は円形を有し、B類よりは浅い形態を本類とした。最も多く認められる形態で15基を数える。遺物は含まない土壌のほうが多く認められた。

E類は方形に掘り込んだ形態で深さはB類と同様あまり深くない土壌群である。7期確認した。この形態は少量の焼土を含む覆土で遺物を含む覆土が多い。

F類は浅く掘り込んだ土壌であり、2基検出されている。いずれも遺物は少量である。

G類は円形で浅い土壌群を本類とした。6基認められ、遺物を含む土壌と含まない土壌がある。覆土は1層や2層で自然堆積状況を呈する。

H類は平面形状が長円形を呈し、浅い形態の土壌である。1基だけ認められた。

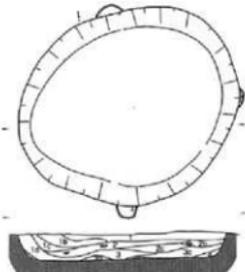
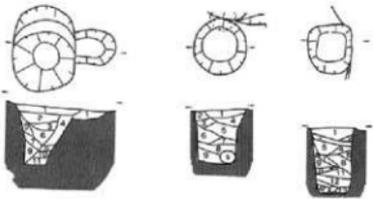
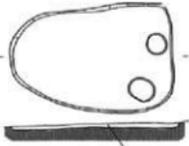
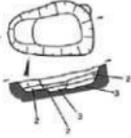
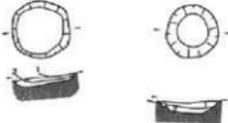
i類はG類と同様な平面形状であるが、i類は深く掘り込んでいる形態を本類とした。IV期に位置する本類の土壌は認められなかった。なお、詳細については観察表を第7表に示したので参照願いたい。

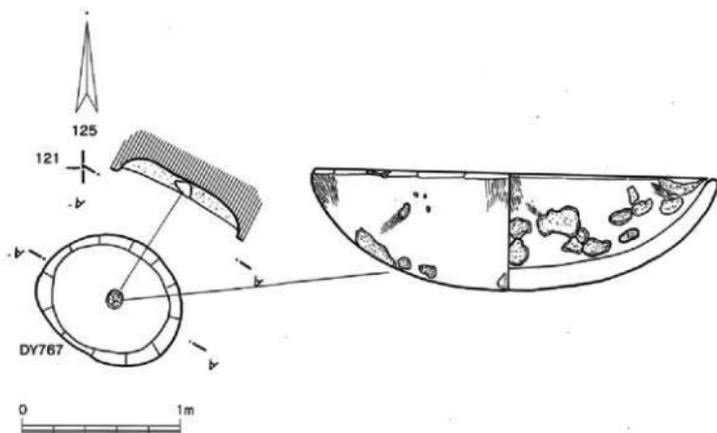
第35図にIV期に遺構を示した。土壌が集中することは第VII次調査区南方地区であり、III期のBY50の東西に構築された状況を呈する。東方の土壌群に関しては約半分を完掘した状態で、覆土からは第VII次調査区において最も遺物出土量が多い。これに対して西側の土壌群からの遺物出土量は少量であった。これらの状況を総合すると、建物群に隣接する土壌群は建物が廃絶した時点で不用となった物を捨てるために構築されたと考えられ、当然その中には今日まで残る物と腐食してしまう両者があり、残る物として土器類があった。遺物が出る、出ないは捨てる際に分別して廃棄したことがうかがえる。

土壌群の中にはII・III期に構築されたものもあると考えられるが、廃絶する時期はIV期が相当であろう。

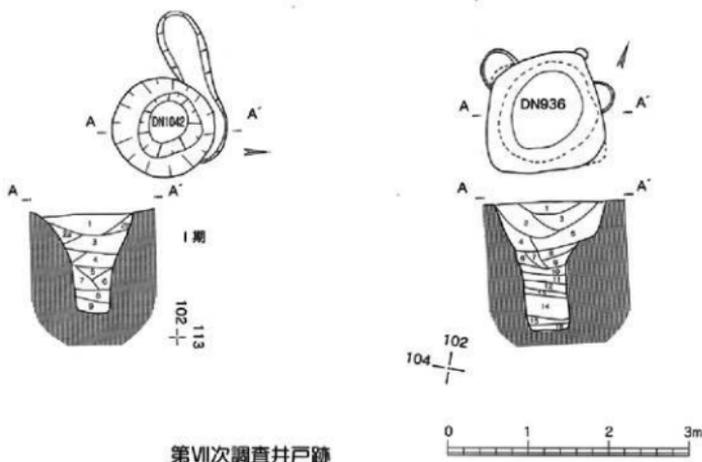
DY168・147は平成元年の第1次調査によって、半分が調査された。残り半分を今回の第VI次調査で完掘することができた。E類に分類されるこれらの土壌群は欄列に並列して整然と構築された状況を呈する。このような配置を見ると、すでにII・III期の段階に構築されていた可能性が高い。平面形状や配置を観察した場合E類はIII・IV期に、それ以外はIV期にと別できそうである。

第1表 大浦B遺跡第VI・VII次調査土壘分類表

			
<p>A類 大型で堅穴状を呈する。</p>	<p>B類 方形や円形を呈し、深い形態を本類とする。</p>		
			
<p>C類 大型の浅い形態を本類とする。</p>	<p>D類 上記のB類と同様な平面形状で深くない形態を本類とする。</p>	<p>E類 方形状に掘り込んだ形態を本類とする。</p>	<p>F類 レンズ状に掘り込んでいる。</p>
			
<p>G類 円形で浅い形態を本類とする。</p>		<p>H類 長円形を呈す浅い形態を本類とする。</p>	<p>I類 G類と同様な平面形状であり、深く彫り込んでいる形態を本類とする。</p>

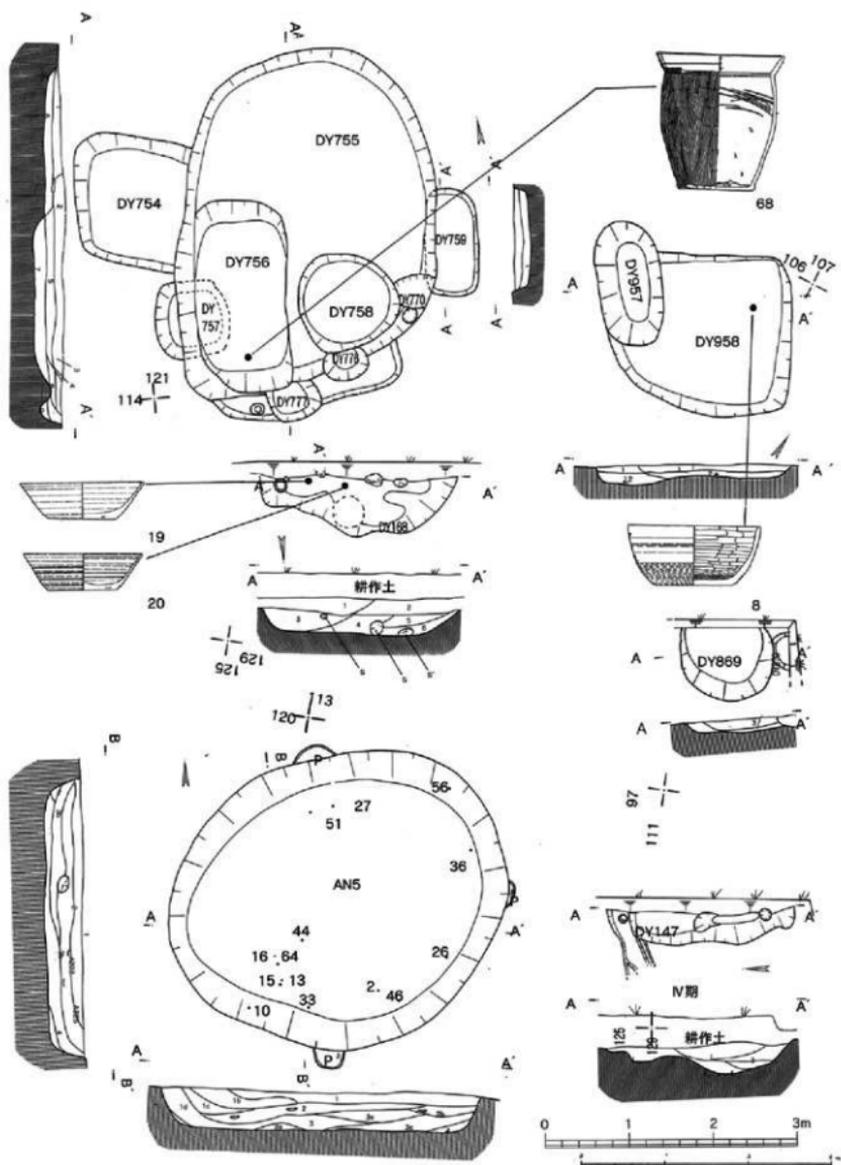


第VI次調査土師器埋納墳

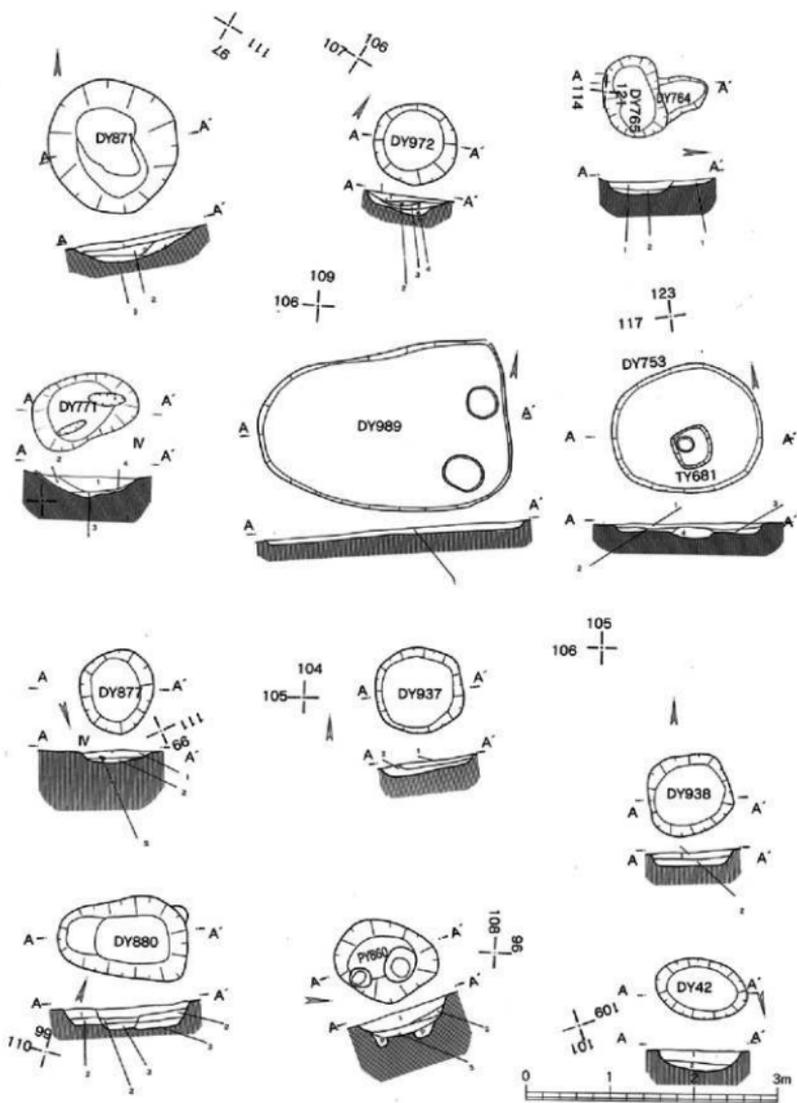


第VII次調査井戸跡

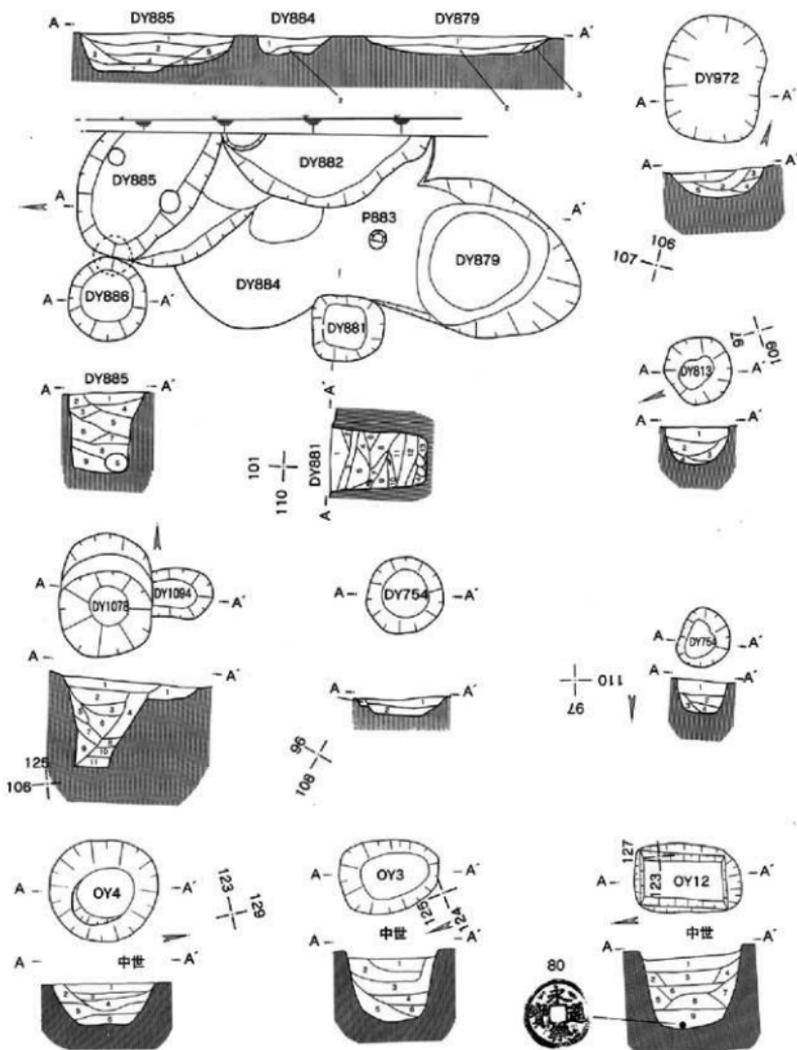
第14図 大浦B遺跡第VI・VII次調査土壇・井戸跡平面図(1)



第15圖 大浦B遺跡第VI・VII次調査土坑平面図(2)



第 16 圖 大浦 B 遺跡 VI・VII 次調査土坑平面図(3)



第 17 图 大浦B遺跡第VI・VII次調査土坑平面図(4)

6 V期の遺構

第Ⅶ次調査区を中心に土壌46基、墓墳4基、井戸跡2基、溝状遺構9基、ピット168基を確認した。ピットは柱穴と考えられるが建物跡として認識するまでには至らなかった。列挙に順に説明を加えたい。

○土壌 (第15～17図 付図1)

第Ⅵ次調査区の北方や、第Ⅶ次調査の南方に構築された土壌群である。細類は第1表に示したので参照願いたい。また詳細については第7表で示した。形態別で多いのはE類の13基、次いでD類の8基、F類の6基が主体をなす。

○墓墳 (第17図)

第Ⅵ次調査区北方から検出され、OY2の底面から六文銭としての「永樂通寶」が2枚出土している。方形の掘り方を呈し、深さは1.1mを測る。箱型の痕跡が認められた。他の3基も同様に形態を有する。OY4は平面形状が円形状を呈しているが、地盤が砂地であるため崩れてしまったので円形状であったが、本来は方形の掘り方である。近くに中世期の屋敷があったことをうかがわせる遺構である。

○井戸跡 (第17図)

DY886・881が認められた。両者ともやわらかい覆土であり、I期やIV期の井戸跡との違いは明確である。底面に礫が散乱していた。深さは1.2m前後を測る。

○溝状遺構 (付図1)

第Ⅵ次調査の北方地区、第Ⅶ次調査区の北方及び南方地区に位置する。第6次調査区の溝状遺構はいずれも短く幅もせまい。遺物もほとんど含まない。

第Ⅶ次調査区の溝状遺構はいずれも長く伸びる形態を有する。調査区南方に位置するKY1101は西から東へ延び、南方に曲がる形態を呈する。幅は70～90cmを測り、深さは最深で30cm、浅いところで20cmある。溝内には小ピットが認められたが、建物跡は認められなかった。覆土からは、土師器片が出土しているが、混入したと考えられる。

○ピット群 (付図1)

第Ⅶ次調査区南方地区を中心に検出された。前述したように建物跡として把握できなかった。

第2表 大浦B遺跡第Ⅵ・Ⅶ次調査 遺溝細類表

遺跡番号	細類	出土地区	埋土状況	長径×短径	深さ	須 恵 器					土 師 器					備 考				
						環	高台環	甕	壺	蓋	壺	内黒環	高台環	蓋	甕					
AN5	A類	G114-113	人工	4.20×3.10		175	21	3	11	86								IV期	Ⅵ次	
DY755	A類	G114-125	人工	4.64×3.08						1	1		3	1	4			I期	Ⅵ次	
DY751	B類	G110-129	自然	2.24×1.60														縄文	Ⅵ次	
DY750	B類	G110-129	自然	(1.00)×0.82														縄文	Ⅵ次	
DY779	C類	G114-113	人工	2.60×1.96															IV期	Ⅵ次
DY758	D類	G114-125	人工	1.28×1.22															I期	Ⅵ次
DY769	D類	G122-117	自然	1.40×1.22															中世	Ⅵ次
DY770	D類	G118-117	自然	1.06×1.02															中世	Ⅵ次
DY747	E類	G106-133	自然	1.50×0.84															中世	Ⅵ次

遺跡番号	細目	出土地区	埋土 状況	長径×短径	深さ	須 惠 器				土 師 器				備 考		
						坏	高 台 坏	甗	壶	甗	坏	陶 黑 坏	内 黑 坏		高 台 坏	甗
DY749	E類	G114-129	自然	(0.90)×0.94											中世	Ⅳ次
DY748	E類	G114-129	自然	1.90×1.20											中世	Ⅳ次
DY754	E類	G114-125	人工	(1.40)×1.52						2				4	I期	Ⅳ次
DY756	E類	G114-125	人工	2.38×1.10						1	5	1		6	I期	Ⅳ次
DY147	E類	G114-125	人工	1.98×(0.42)											Ⅳ期	Ⅳ次
DY168	E類	G130-125	人工	2.42×(0.68)											Ⅳ期	Ⅳ次
DY757	E類	G114-125	人工	—×0.94											I期	Ⅳ次
DY759	E類	G114-125	人工	1.30×(1.02)											I期	Ⅳ次
DY761	F類	G114-133	自然	(0.98)×—											中世	Ⅳ次
DY760	F類	G106-133	自然	(1.04)×1.04											中世	Ⅳ次
DY752	F類	G114-125	人工	2.40×(1.50)											Ⅳ期	Ⅳ次
DY753	F類	G118-125	人工	1.84×1.64						7	1		1		中世	Ⅳ次
DY762	F類	G118-133	人工	(0.53)×1.08											中世	Ⅳ次
DY765	F類	G126-129	自然	1.04×0.68											中世	Ⅳ次
DY764	F類	G126-129	自然	(0.54)×0.52											中世	Ⅳ次
DY780	F類	G114-117	人工	1.30×1.06											Ⅳ期	Ⅳ次
DY767	G類	G118-125	人工	0.94×0.76											I期	Ⅳ次
DY766	G類	G118-125	人工	0.92×0.88											Ⅳ期	Ⅳ次
DY768	G類	G118-125	人工	0.92×0.80											Ⅳ期	Ⅳ次
DY771	H類	G118-113	人工	1.30×0.82								16			Ⅳ期	Ⅳ次
DY772	H類	G114-117	人工	0.94×0.80				1							中世	Ⅳ次
DY763	H類	G122-129	人工	0.94×0.68											中世	Ⅳ次
DY773	H類	G114-117	自然	0.62×0.48											中世	Ⅳ次
OY1	墓竈	G118-129	人工	1.40×1.00											中世	Ⅳ次
OY2	墓竈	G118-129	人工	1.32×0.84											中世	Ⅳ次
OY3	墓竈	G118-129	人工	1.26×0.96											中世	Ⅳ次
OY4	墓竈	G118-129	人工	1.32×1.24											中世	Ⅳ次
DY881	B類	G110-101	自然	88×84	114						1			7	中世	Ⅳ次
DY886	B類	G106-105	自然	104×100	102									8	中世	Ⅳ次
DY887	B類	G106-105	自然	79×68	98	2					2			15	中世	Ⅳ次
DY888	B類	G106-105	自然	74×72	132				1	1	1			8	中世	Ⅳ次
DY1078	B類	G106-129	自然	154×118	111										中世	Ⅳ次
DY929	C類	G102-101	人工	—×314	10				3					38	Ⅳ期	Ⅳ次
DY930	C類	G102-105	人工	346×—	10					1	8			39	Ⅳ期	Ⅳ次
DY956	C類	G102-109	人工	224×110	7										Ⅳ期	Ⅳ次
DY958	C類	G102-109	人工	214×186	9	8		3	1		11	18		83	Ⅳ期	Ⅳ次
DY989	C類	G102-109	人工	326×190	10					1	2			6	Ⅳ期	Ⅳ次
DY1088	C類	G102-117	自然	—×75	1										中世	Ⅳ次
DY1089	C類	G102-117	自然	106×76	4										中世	Ⅳ次
DY860	D類	G106-97	自然	126×100	50										中世	Ⅳ次
DY862	D類	G106-97	人工	96×96	20					1	1			11	Ⅳ期	Ⅳ次
DY869	D類	G110-97	人工	112×—	18	1				1	2			31	Ⅳ期	Ⅳ次
DY871	D類	G110-101	人工	154×156	28			1		1	7			53	Ⅳ期	Ⅳ次
DY877	D類	G110-101	自然	102×88	13									1	中世	Ⅳ次

遺跡番号	種類	出土地区	埋土 状況	長径×短径	深さ	須 惠 器					土 師 器					備 考		
						坏	高 台 坏	甕	壺	蓋	埴 埴	坏	内 黑 坏	高 台 坏	蓋		甕	
DY879	D類	G110-101	人工	174 × 138	23	1				1	2	2				53	IV期	Ⅴ次
DY882	D類	G110-105	人工	260 × —	36						1		3			63	IV期	Ⅴ次
DY916	D類	G106-97	人工	74 × 64	36								1			1	IV期	Ⅴ次
DY931	D類	G102-105	人工	166 × 138	35					17	1		23			131	IV期	Ⅴ次
DY937	D類	G102-105	人工	108 × 108	17											1	IV期	Ⅴ次
DY938	D類	G102-105	人工	102 × 102	18												IV期	Ⅴ次
DY953	D類	G102-109	人工	452 × 278	19						1		2			15	IV期	Ⅴ次
DY959	D類	G102-109	人工	96 × 88	19	2						1				13	IV期	Ⅴ次
DY972	D類	G106-109	人工	100 × 100	19												IV期	Ⅴ次
DY973	D類	G106-109	人工	— × 92	15												IV期	Ⅴ次
DY974	D類	G106-109	人工	92 × 86	16												IV期	Ⅴ次
DY1050	D類	G102-117	自然	104 × 92	31											2	近世	Ⅴ次
DY1051	D類	G102-117	自然	76 × 74	19												近世	Ⅴ次
DY1068	D類	G110-113	自然	66 × 50	45								1	1		1	中世	Ⅴ次
DY1077	D類	G102-121	自然	156 × 128	24												中世	Ⅴ次
DY1093	D類	G102-121	自然	82 × —	21												中世	Ⅴ次
DY1096	D類	G106-109	自然	— × 92	36												中世	Ⅴ次
DY1102	D類	G110-109	人工	96 × 94	23												IV期	Ⅴ次
DY796	E類	G102-101	人工	374 × 236	20						1		1			8	IV期	Ⅴ次
DY872	E類	G110-101	自然	— × 118	12						2					19	IV期	Ⅴ次
DY880	E類	G106-101	自然	158 × 78	38								1			5	中世	Ⅴ次
DY885	E類	G110-105	人工	— × 140	39	4		4		3			8			126	IV期	Ⅴ次
DY889	E類	G110-105	人工	— × 146	34						1		2			23	IV期	Ⅴ次
DY895	E類	G106-101	人工	130 × 94	29												中世	Ⅴ次
DY950	E類	G102-105	自然	142 × 114	11					1						1	中世	Ⅴ次
DY957	E類	G102-109	人工	148 × 78	22	1						1					IV期	Ⅴ次
DY976	E類	G106-109	人工	152 × 128	46	2			1				5	1		24	IV期	Ⅴ次
DY1052	E類	G102-117	自然	98 × 72	31												中世	Ⅴ次
DY1053	E類	G106-113	自然	106 × 68	25						1					1	中世	Ⅴ次
DY1071	E類	G106-117	自然	122 × 80	54												近世	Ⅴ次
DY1072	E類	G110-117	自然	136 × 72	38												中世	Ⅴ次
DY1074	E類	G102-121	人工	164 × —	16								1			5	IV期	Ⅴ次
DY1094	E類	G106-129	自然	— × 58	28												中世	Ⅴ次
DY1095	E類	G106-113	自然	110 × —	29												中世	Ⅴ次
DY884	F類	G110-101	人工	350 × —	8				1				6			3	IV期	Ⅴ次
DY861	G類	G106-97	自然	122 × 104	10												中世	Ⅴ次
DY939	G類	G106-105	人工	114 × 79	3	1							1			2	IV期	Ⅴ次
DY940	G類	G106-105	人工	102 × 94	9												IV期	Ⅴ次
DY941	G類	G106-105	人工	— × 146	6	3		1			3					71	IV期	Ⅴ次
DY989	G類	G102-109	人工	316 × 186	5	1											IV期	Ⅴ次
DY1069	G類	G110-113	自然	— × 52	6												中世	Ⅴ次
DY1091	G類	G102-113	自然	86 × 68	11												中世	Ⅴ次
DY919	H類	G104-97	自然	140 × 100	3												中世	Ⅴ次
DY920	H類	G104-101	自然	180 × 120	8												中世	Ⅴ次
DY923	H類	G106-101	自然	114 × 70	14								1			3	中世	Ⅴ次
DY924	H類	G106-101	自然	92 × 76	6												中世	Ⅴ次
FY975	—	G102-109	自然	276 × 190													風倒木蹟	Ⅴ次

第Ⅲ節 検出された遺物

第Ⅵ次調査・第Ⅶ次調査で検出された遺物は6,750点である。このうち、石器等の縄文時代に属する遺物は認められなかった。中世から近世にかけて遺物は123点、他は奈良・平安期に係わる遺物で占められる。これらの遺物について器種別に概要を記すと以下の様になる。遺物の総数としては第Ⅵ次調査の方が圧倒的に多い。

土師器内黒環類	712点	土師器内黒蓋類	143点	土師器両黒環類	22点
土師器両黒蓋類	1点	土師器環類	581点	土師器甕形土器類	3,954点
須恵器環類	416点	須恵器蓋類	183点	須恵器甕形土器類	300点
須恵器壺形土器類	27点	須恵器土器	3点	陶磁器類	120点
鉄製品	3点	漆紙	2点	土器碁石	2点

このうち、完形・復元可能土器の実測図と拓影図作成を行ったものが111点である。ここでは図化した遺物を基に述べてみたい。なお、分類に関しては米沢市埋蔵文化財報告書第36集で報告した分類を基準としている。

1 出土土器の分類

土師器と須恵器に大別し、さらに器種ごとに細分した。土器の調整手法の分類は第3表、図化した遺物計測表は第6表、土器分類表は第4～6表、土器の年代は第7～10表に分類している。

A群土器〔1～15〕

土師器の環類を一括した。器形の分類はこれまでの一連の調査によって出土した器形を含めて分類しているため、本群は第4表に示すように20形態に細別される。細類に関しては器形の特徴と調整手法を基準とした。今回の調査区からは図化可能な土器で分類すると8形態が出土している。

○A群1類(1)

底辺付近に稜線の段を有するもので、内面をミガキa⁷で調整したと想定されるが磨滅が著しく図化できなかった。底部をケズリで仕上げている。国分寺下層式に併行すると考えられ、I期に加えた。

○A群3b類(2～5, 12)

底部が丸底を呈する器形で、いずれもミガキを有する。口縁部立ち上がりか内曲気味の形土器の一群である。12は両黒であるが磨滅が著しく、ハジケ面も有する。I期前半とする。

○A群4b類(7～9)

高径高のやや内反するで、9は内外とも鄭重なミガキと呈する。8はロクロ成形によりもので底部切離はBである。I期の土器群と考えられる。

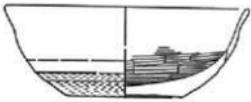
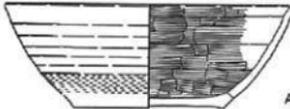
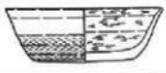
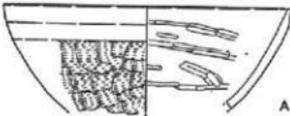
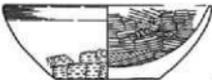
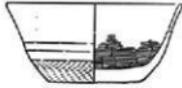
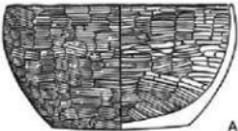
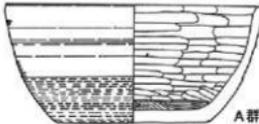
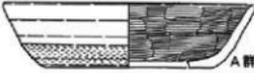
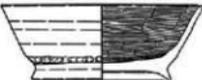
○A群5類(10)

底部が大きく、器形が低いのを特徴としている。内面は横位のミガキ、外面は底辺部を回転へ

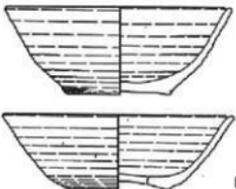
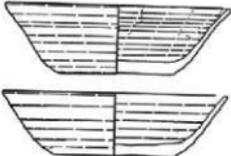
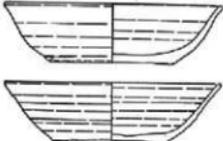
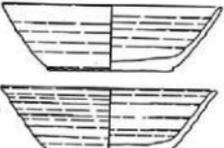
第3表 土器調整手法分類表

a' 縦のミガキ	a' 横のミガキ	a' 斜のミガキ	a' 扇状のミガキ	a' 格子状のミガキ	a' 貝状のミガキ	a' 糸のミガキ
a' 連続縦のミガキ	a' 連続横のミガキ	a' 連続斜のミガキ	g 回転ヘラズリ	h カキメ	i 回転ヘタナダ	
b' 縦のヘラナダ	b' 横のヘラナダ	b' 斜のヘラナダ	c' 縦のヘラ調整	c' 横のヘラ調整	c' 斜のヘラ調整	j 指オサエ
d' 縦のハケメ	d' 横のハケメ	d' 斜のハケメ	e' 縦のケズリ	e' 横のケズリ	e' 斜のケズリ	k 指ナダ
			3) 底部切り置しの分類			
f' 縦のミガキ	f' 横のミガキ	f' 斜のミガキ				
			回転ヘラ切り無調整 A	回転ヘラ切り同ヘラズリ調整 B	回転ヘラ切り手持ちヘラズリ調整 C	
			a' 縦のミガキ	a' 横のミガキ	a' 縦のミガキ	
2) ロクロ成形の分類						
			ロクロ a	ロクロ b	ロクロ c	ロクロ d
			ロクロ a 水引ロクロの残線が 1.5 m 未満	ロクロ b 水引ロクロの残線が 1.5 m 以上	ロクロ c 水引ロクロの凹線が 1.5 m 未満	ロクロ d 水引ロクロの凹線が 1.5 m 以上
4) 叩き目・押え目の分類						
			縦 3mm 以上の浅い板目状叩き目 B	縦 3mm 以上の深い板目状叩き目 B	縦糸状の叩き目 B	縦縞状の叩き目 B
			縦 3mm 未満の浅い板目状叩き目 B	縦 3mm 未満の深い板目状叩き目 B	縦糸状の叩き目 B	縦格子状の叩き目 B
			縦半同心円の押え目 A	縦括弧状の押え目 A	縦多状帯の押え目 A	縦不整方向の押え目 A
			縦板目状の押え目 A	縦小円環状の押え目 A	縦青濁状の押え目 A	縦青濁状の押え目 A
			縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A
			縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A	縦板目状の押え目 A

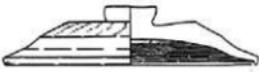
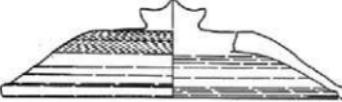
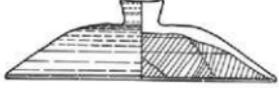
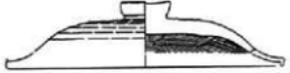
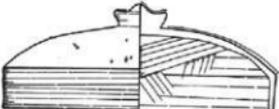
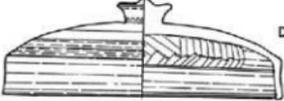
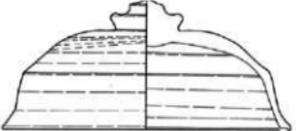
第4表 大浦B遺跡出土A群土器分類表(1)

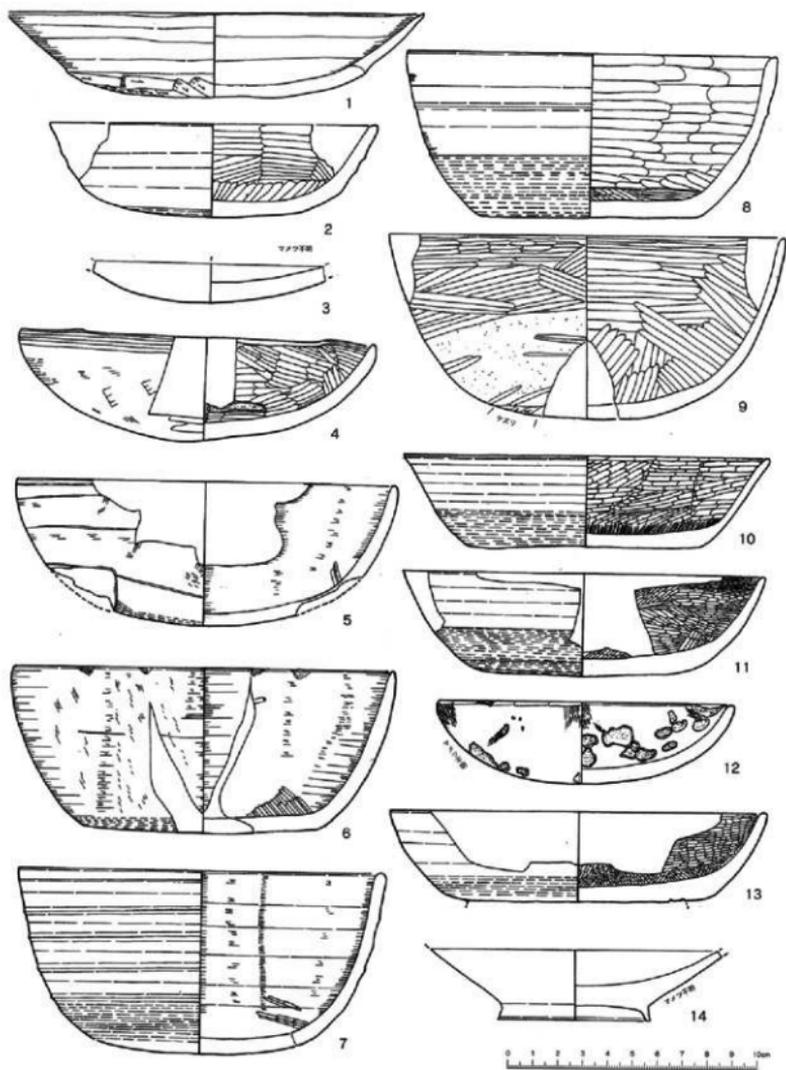
	A群1類		A群7a類
	A群2a類		A群7b類
	A群2b類		A群7c類
	A群3c類		A群8類
	A群3b類		A群9類
	A群4a類		A群10類
	A群4b類		A群11類
	A群5a類		A群11類
	A群5b類		A群12類
	A群6類		

第5表 大浦B遺跡出土B群土器分類表(2)

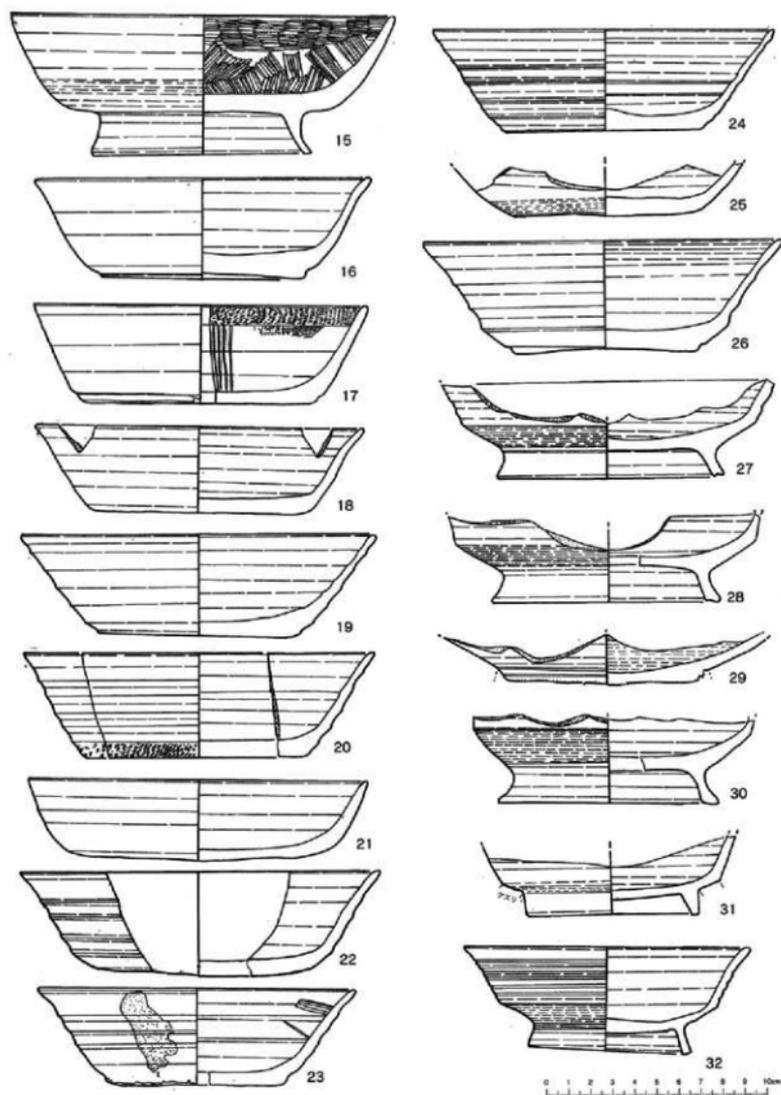
 <p>B群1類</p>	 <p>B群8類</p>
 <p>B群2類</p>	 <p>B群9類</p>
 <p>B群3類</p>	 <p>B群10a類</p>
 <p>B群4類</p>	 <p>B群10b類</p>
 <p>B群5類</p>	 <p>B群11類</p>
 <p>B群6類</p>	 <p>B群12類</p>
 <p>B群7類</p>	 <p>B群14類</p>

第6表 大浦B遺跡出土C・D群土器分類表(3)

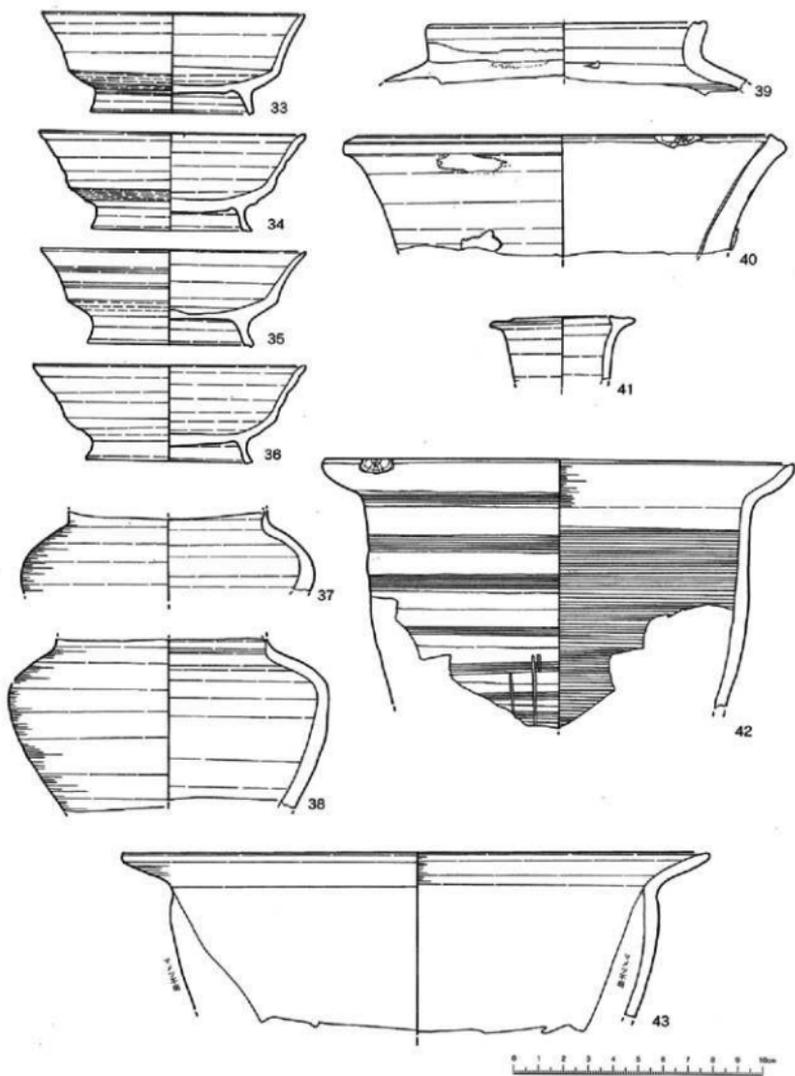
 <p>C群1類</p>	 <p>D群1類</p>
	 <p>D群2類</p>
 <p>C群2類</p>	
 <p>C群3類</p>	 <p>D群3類</p>
 <p>C群4類</p>	 <p>D群4a類</p>
	
	
	 <p>D群4b類</p>
	 <p>D群5類</p>



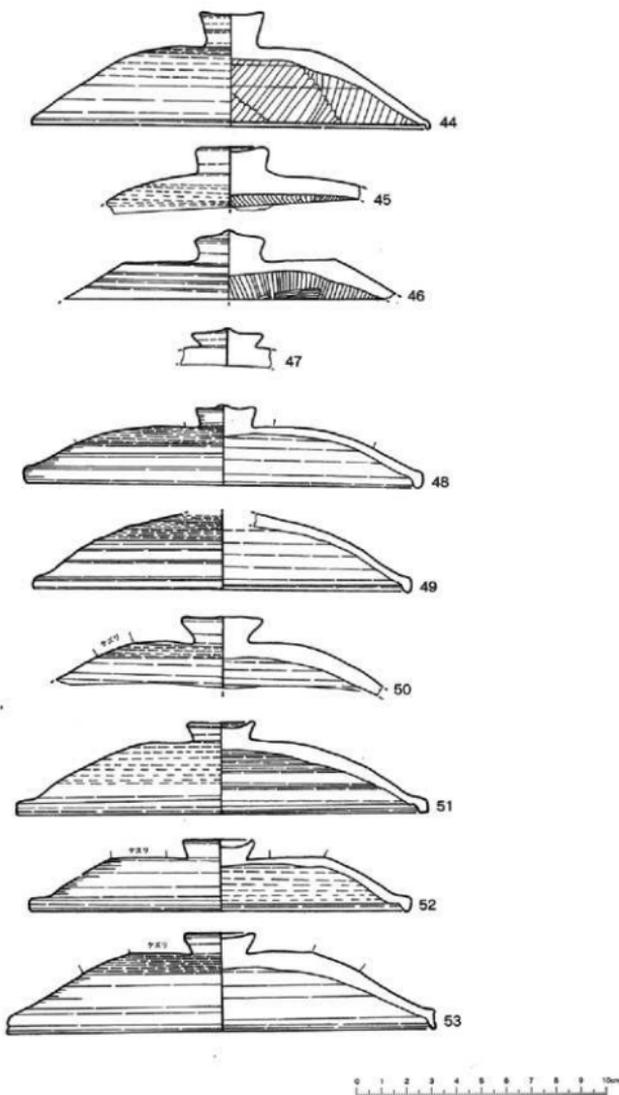
第18図 大浦B遺跡第VI・VII次調査出土遺物実測図(1)



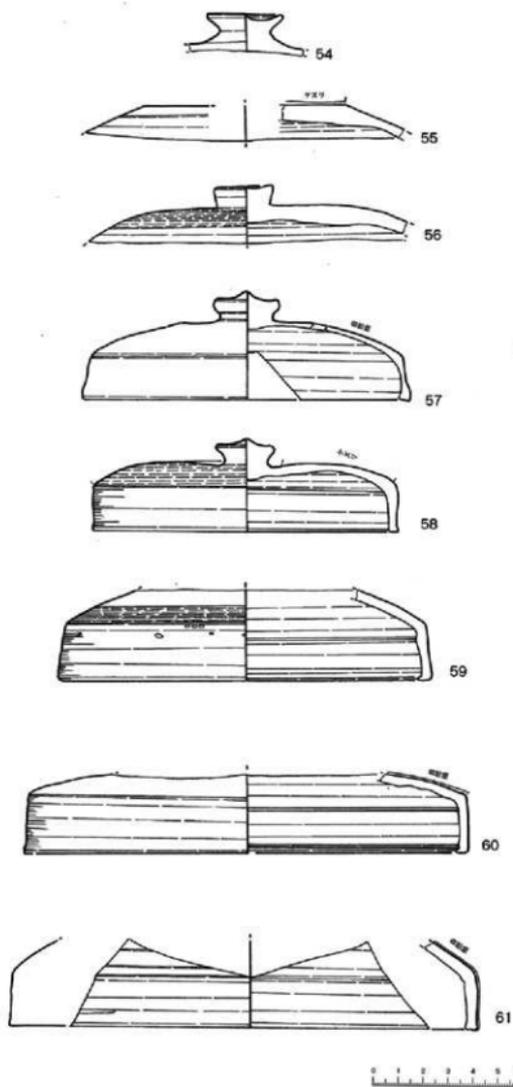
第19図 大浦B遺跡第VI・VII次調査出土遺物実測図(2)



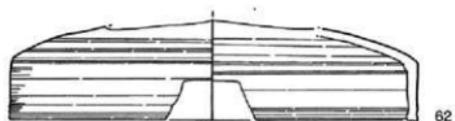
第 20 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図(3)



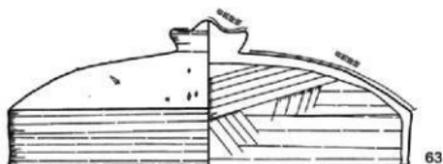
第 21 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図(4)



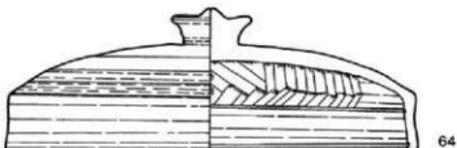
第 22 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図(5)



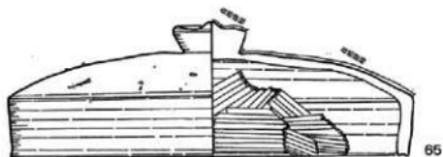
62



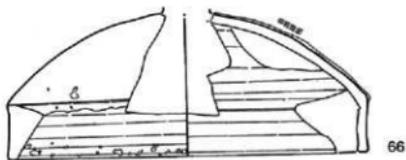
63



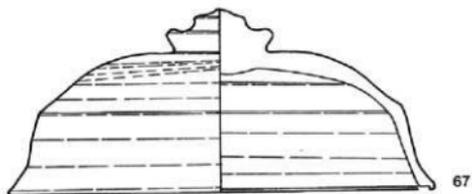
64



65



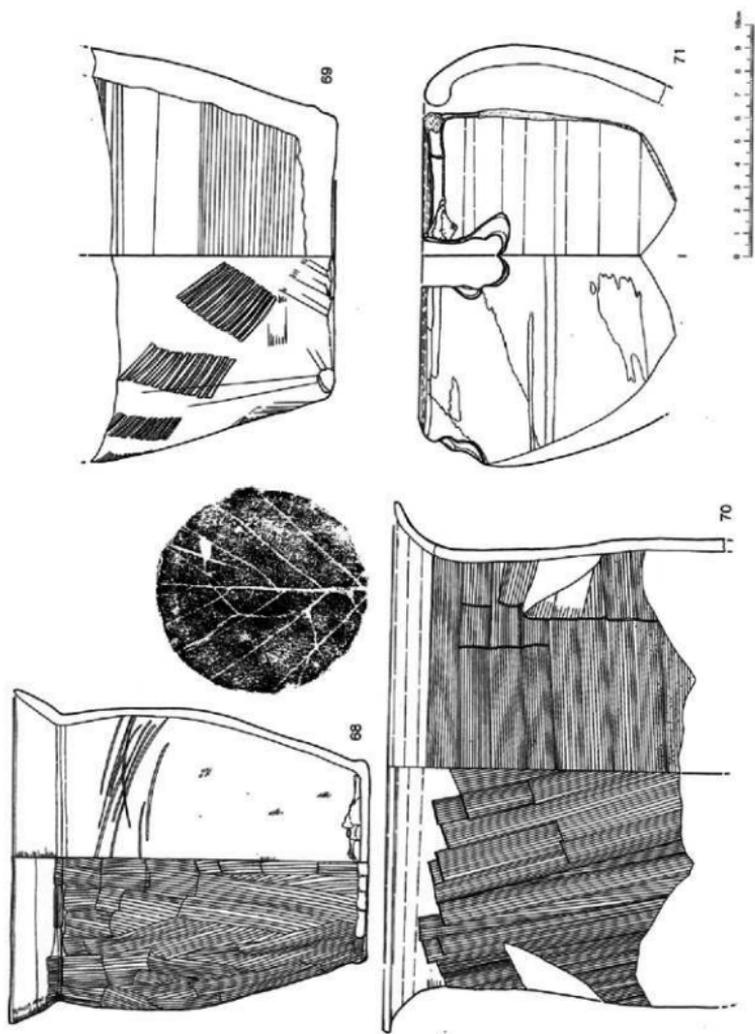
66



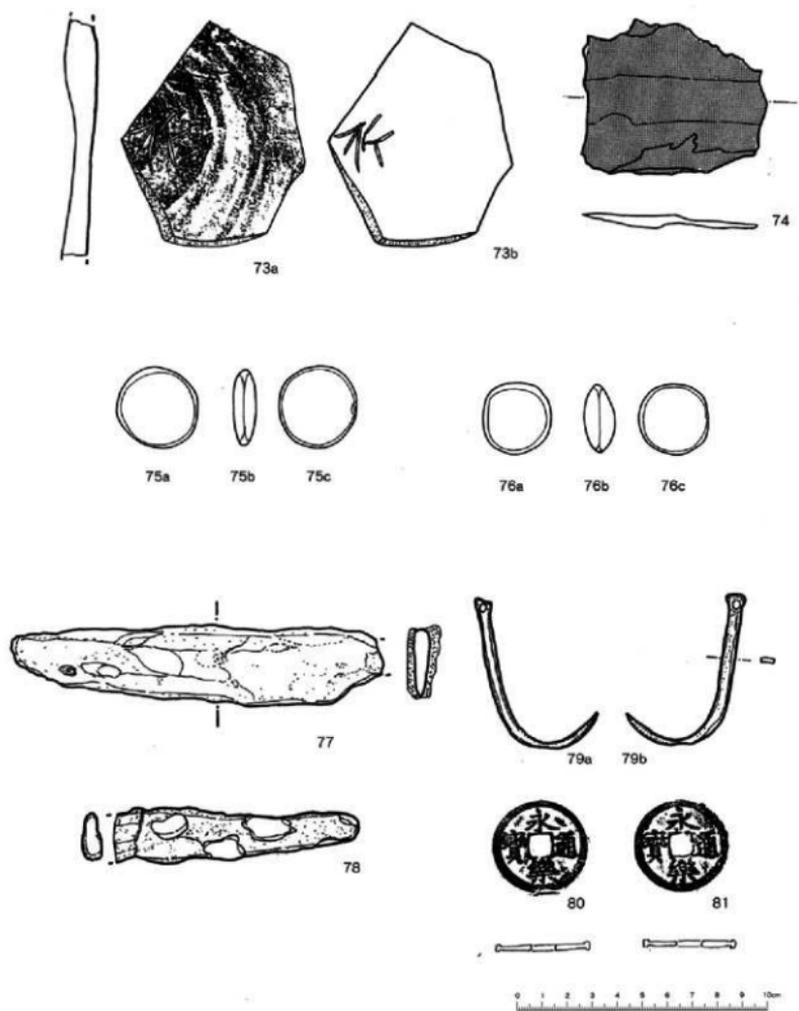
67



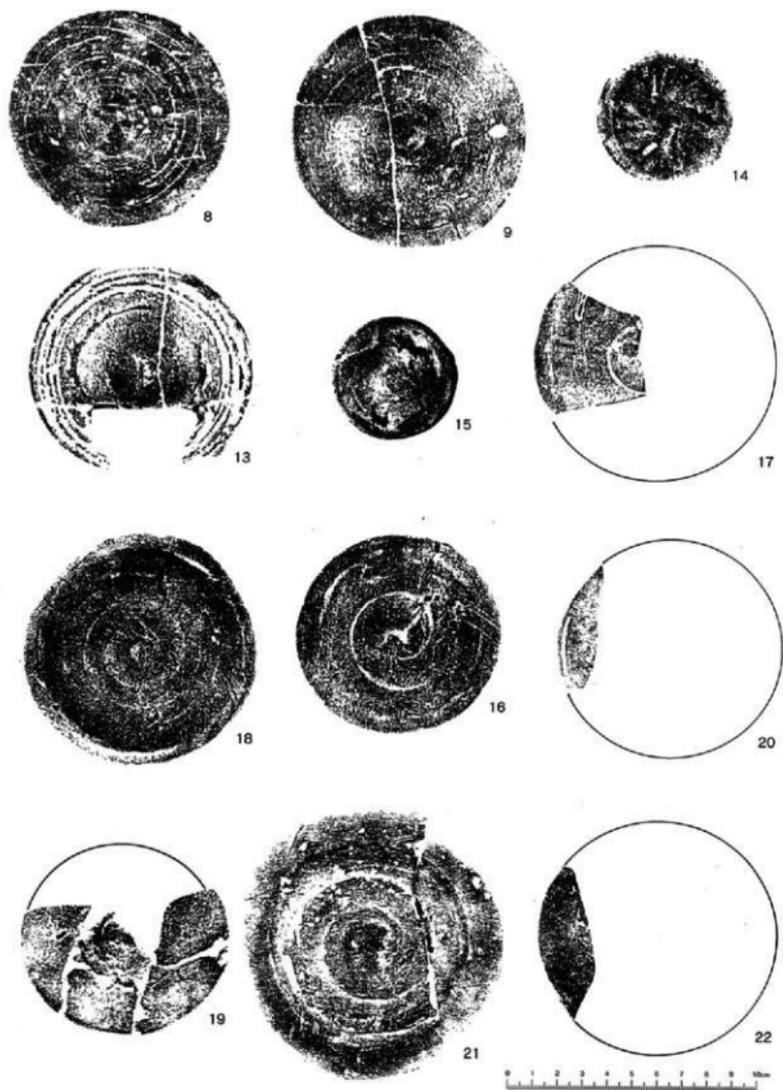
第 23 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図(6)



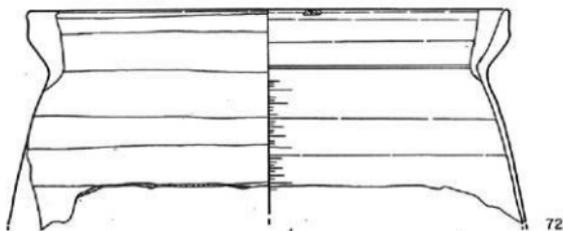
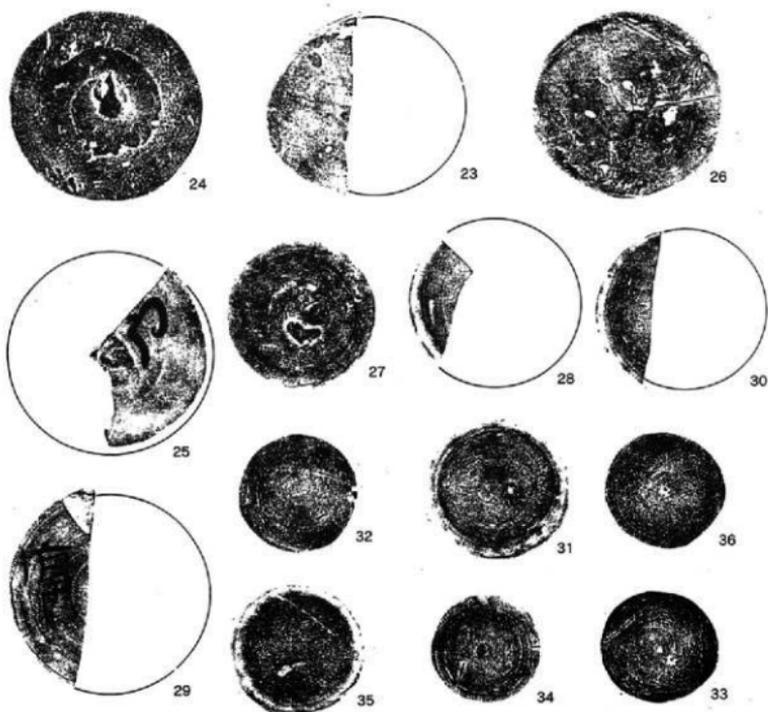
第24図 大浦B遺跡第VI・VII次調査出土遺物実測図(7)



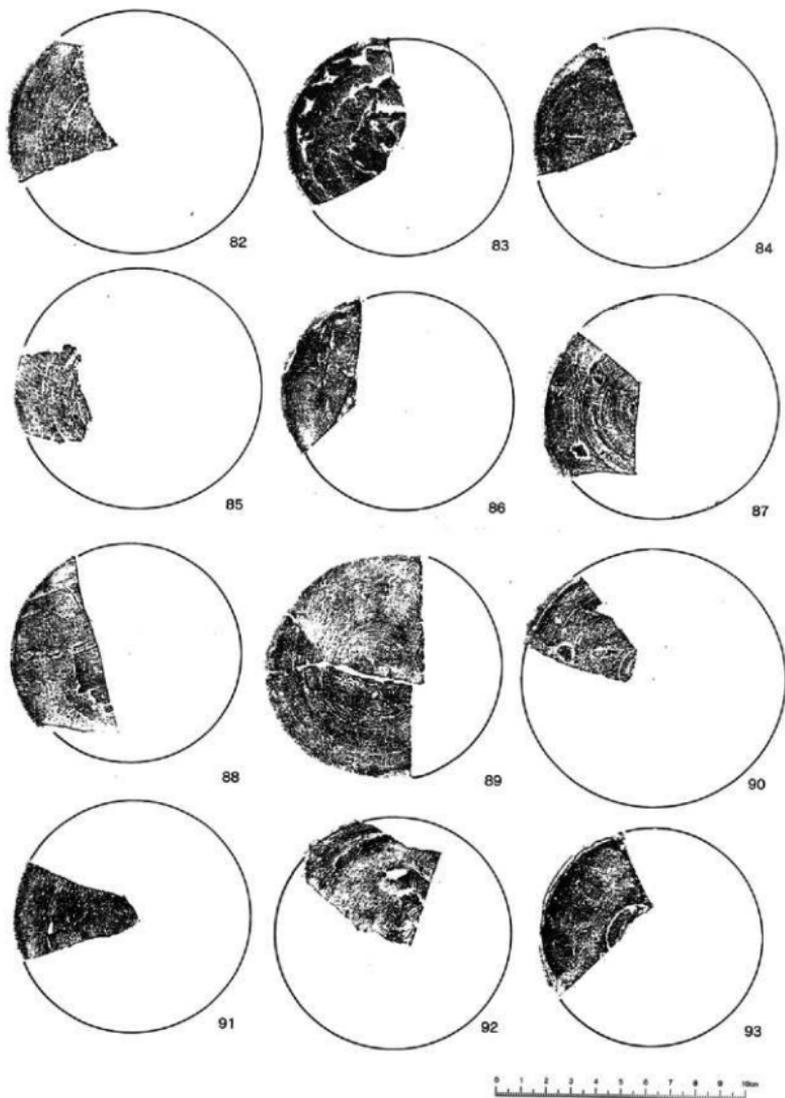
第 25 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土遺物実測図(6)



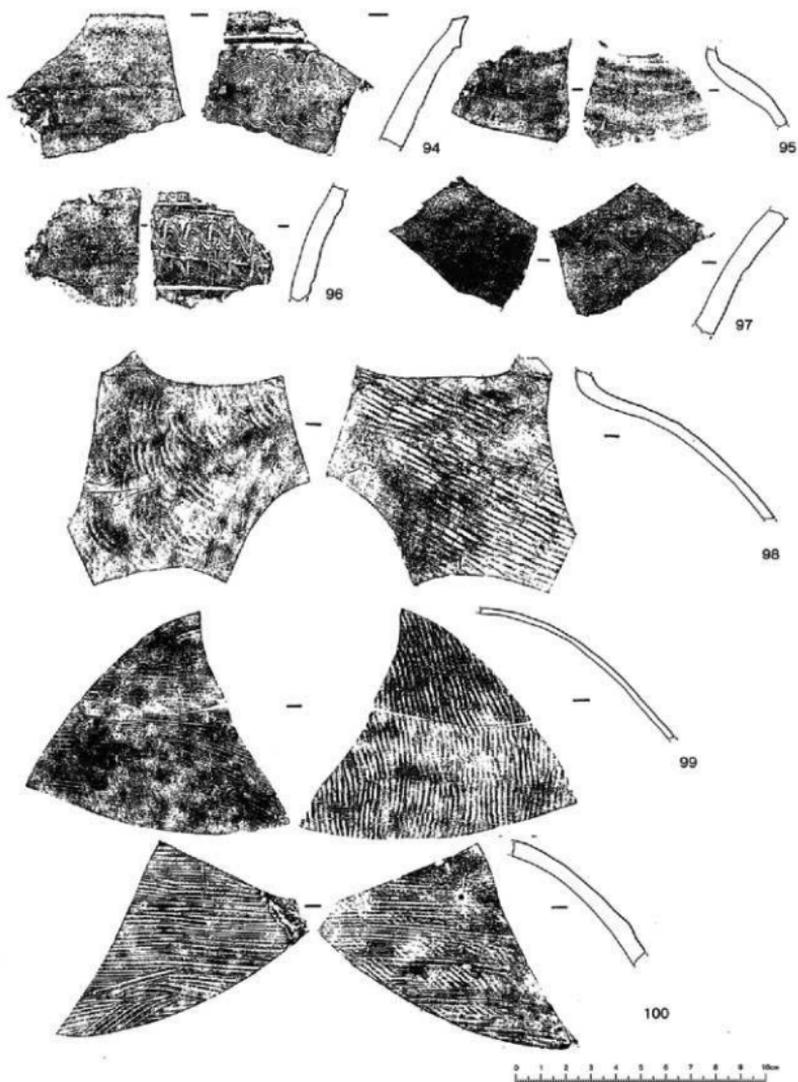
第 26 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器土師器拓影図(1)



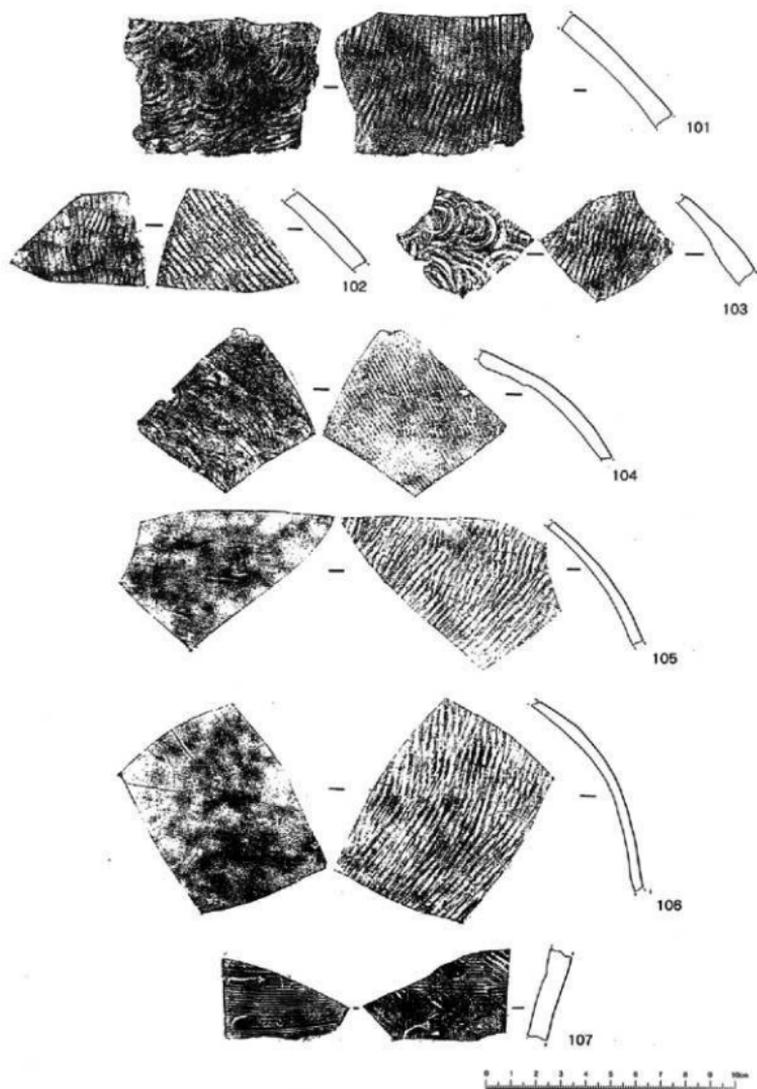
第 27 図 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図(2)



第 28 圖 大浦 B 遺跡第 VI・VII 次調査出土須恵器拓影図(3)



第29図 大浦B遺跡第VI・VII次調査出土須恵器拓影図(4)



第30圖 大浦B遺跡第VI・VII次調査出土須恵器拓影図(5)

第7表 大浦B遺跡第Ⅵ・Ⅶ次調査出土遺物計測表

遺物	出土地区	調査 年次	口径	高さ	底径	外面調整	内面調整	底部切り 直し調整	a点	b点	c点	計	計測値	器 種	押番号	遺物番号
1	DY767	6次	17.0	4.4	—	f'k	f'k							土師器焼	第18図1	
2	G118-125	6次	13.9	4.0	7.2	o'kang'i	o'kang'e'q'	C	55.38	15.94	28.89	25.10	55:16:29	土師器内黒灰	第18図2	AZ46
3	G114-125	6次				d'e'	不明							土師器焼	第18図3	AZ38
4	G114-125	6次	15.2	4.5	—	h'e'	g'e'							土師器内黒灰	第18図4	
5	G118-125	6次	16.4	6.3	—	je'	g'i							土師器内黒灰	第18図5	AZ51
6	DY771	6次	16.2	7.2	10.0	o'kang'i	o'kang'e'q'	B	48.50	21.56	29.94	33.40	48:22:30	土師器内黒灰	第18図6	
7	AN5	6次	16.3	8.1	—	o'dang'i	g'i							土師器内黒灰	第18図7	
8	DY7958	7次	15.8	7.1	9.2	o'kang'i	o'kang'e'q'	B	49.22	22.12	28.66	32.40	29:22:29	土師器内黒灰	第18図8	AZ5
9	P778	7次	17.0	7.2	—	g'e'q'	g'e'q'							土師器内黒灰	第18図9	AZ3
10	AN5	6次	15.6	4.0	9.8	o'kang'i	o'kang'e'q'	B	53.06	13.61	33.33	29.40	53:14:33	土師器内黒灰	第18図10	AZ11
11	AN5	6次	15.3	4.6	8.1	o'kang'i	o'kang'e'q'	C	54.64	16.43	28.93	28.00	55:16:29	土師器内黒灰	第18図11	
12	DY767	6次	12.6	3.6	—	g'	g'a'							土師器内黒灰	第18図12	AZ49
13	AN5	6次	16.0	—	—	o'kang'i	o'kang'e'q'	C						土師器内黒灰台	第18図13	AZ208
14	G106-101	7次	—	—	6.3	o'kang'i	o'kang'i	C						土師器高台	第18図14	AZ1
15	AN5	6次	16.1	5.9	9.2	o'kang'i	o'kang'e'q'	C	51.60	18.91	29.49	31.20	52:19:29	土師器内黒灰台	第19図15	AZ20A
16	AN5	6次	14.2	4.3	8.5	o'kang'i	o'kang'i	A	52.59	15.93	31.48	27.00	53:16:31	須志器焼	第19図16	AZ27 AZ210
17	G112-117	6次	14.0	4.2	9.7	o'kang'i	o'kang'i	A	50.18	15.05	34.77	27.90	50:15:35	須志器焼	第19図17	
18	AN5	6次	13.8	3.7	8.8	o'kang'i	o'kang'i	A	52.47	14.07	33.46	26.30	51:14:33	須志器焼	第19図8	AZ4
19	DY168	6次	14.9	4.4	8.1	o'kang'i	o'kang'i	C	54.38	16.06	29.56	27.40	54:16:30	須志器焼	第19図9	
20	AN5	6次	14.8	4.5	9.2	o'kang'i	o'kang'i	C	51.92	15.79	32.28	28.50	52:16:32	須志器焼	第19図10	
21	DY989	7次	14.4	3.4	9.0	o'kang'i	o'kang'i	A	53.73	12.69	33.58	26.80	53:13:33	須志器焼	第19図21	AZ9
22	AN5	6次	13.8	4.5	10.0	o'kang'i	o'kang'i	B	51.34	15.10	33.56	26.80	51:15:34	須志器焼	第19図22	
23	F118-113	6次	13.4	4.0	7.4	o'kang'i	o'kang'e'f'	C	54.03	16.13	29.84	24.80	54:16:30	須志器焼	第19図23	AZ7
24	DY168	6次	14.4	4.4	8.2	o'kang'i	o'kang'i	A	53.33	16.30	30.37	27.00	53:16:31	須志器焼	第19図4	AZ50
25	G102-121	7次	—	—	7.7	o'kang'i	o'kang'i	A						墨書 須志器焼	第19図25	
26	AN5	6次	15.1	4.6	7.5	o'kang'i	o'kang'i	C	55.51	16.91	27.57	27.20	55:17:28	須志器焼	第19図6	AZ8
27	AN5	6次	—	—	9.2	o'kang'i	o'kang'i	A						須志器焼	第19図7	AZ37
28	AN5	6次	—	—	9.6	o'kang'i	o'kang'i	A						須志器焼	第19図8	
29	G112-129	6次				o'kang'i	o'kang'i	B						墨書 須志器焼	第19図9	
30	AN5	6次	—	—	9.2	o'kang'i	o'kang'i	B						須志器焼	第19図10	
31	AN5	6次	—	—	7.3	o'kang'i	o'kang'i	B						須志器焼	第19図31	AZ2
32	AN5	6次	12.0	4.4	6.8	o'kang'i	o'kang'i	B	51.72	18.97	29.31	23.20	52:19:29	須志器焼	第19図32	
33	AN5	6次	11.0	4.2	6.8	o'kang'i	o'kang'i	B	50.00	19.09	30.91	22.00	50:19:31	須志器焼	第20図33	AZ14
34	AN5	6次	11.2	4.2	6.8	o'kang'i	o'kang'i	B	50.45	18.92	30.63	22.20	50:19:31	須志器焼	第20図34	
35	AN5	6次	11.2	4.0	6.9	o'kang'i	o'kang'i	B	50.68	18.10	31.22	22.10	51:18:31	須志器焼	第20図35	
36	AN5	6次	11.4	4.1	6.8	o'kang'i	o'kang'i	B	51.12	18.39	30.49	22.30	51:18:31	須志器焼	第20図36	AZ35
37	G114-117	6次				o'kang'i	o'kang'i							須志器小形口壺	第20図7	
38	KY745	6次				o'kang'i	o'kang'i							須志器小形口壺	第20図8	
39	G122-121	6次	11.8	—	—	o'kang'i	o'kang'i							須志器口壺	第20図9	
40	DY771	6次	18.5	—	—	o'kang'i	o'kang'i							須志器口壺	第20図10	
41	AN5	6次	6.0	—	—	o'kang'i	o'kang'i							須志器口壺	第20図41	
42	G118-125	6次	19.8	—	—	o'kang'i	o'kang'i							土師器	第20図42	AZ8
43	AN5	6次	24.7	—	—	f	f							土師器	第20図43	AZ5
44	AN5	6次	18.0	4.8	—	o'kang'i	g'a'							土師器内黒蓋	第20図44	AZ2
45	G118-113	6次				o'kang'i	g'a'							土師器内黒蓋	第20図45	AZ3

順No.	出土地区	調査 年次	口径	高径	底径	外面調整	内面調整	底部切り 直し調整	a点	b点	c点	計	計測値	器 種	歸国番号	遺物番号
46	AN5	6次				0700bi	a'a'							土師器内黒蓋	第21頁46	A21
47	AN5	6次				070ai	070ai							須恵器蓋	第21頁47	
48	AN5	6次	16.9	3.2	—	070ai+ig	070ai							須恵器蓋	第21頁48	A248
49	AN5	6次	17.0	—	—	070a+gi	070bi							須恵器蓋	第21頁49	
50	AN5	6次				070ai+ig	070ai							須恵器蓋	第21頁50	A215
51	AN5	6次	17.3	3.9	—	070b+gi	070bi							須恵器蓋	第21頁51	A231
52	AN5	6次	16.3	3.0	—	070ai+ig	070ai							須恵器蓋	第21頁52	A213A,B
53	G118-113	6次	18.0	4.2	—	070ai+ig	070ai							須恵器蓋	第21頁53	A25
54	AN5	6次				070ai	070ai							須恵器蓋	第22頁54	
55	AN5	6次				070a+gi	070ai							須恵器蓋	第22頁55	
56	AN5	6次				070a+gi	070bi							須恵器蓋	第22頁56	A234
57	AN5	6次	13.3	4.6	—	070ai	070bi							須恵器蓋	第22頁57	
58	AN5	6次	12.5	3.8	—	070ai+ig	070ai							須恵器蓋	第22頁58	A29
59	AN5	6次	15.4	—	—	070ai	070bi							須恵器蓋	第22頁59	
60	AN5	6次	18.2	—	—	070ai	070ai							須恵器蓋	第22頁60	
61	AN5	6次	19.3	—	—	070ai	070ai							須恵器蓋	第22頁61	
62	AN5	6次	17.2	—	—	070ai	070bi							須恵器蓋	第23頁62	
63	AN5	6次	17.1	6.3	—	070ai+ig	070ai+if+'							須恵器蓋	第23頁63	A223
64	AN5	6次	17.8	6.1	—	070a+gi	070ai+if+'							須恵器蓋	第23頁64	A216
65	AN5	6次	17.0	5.8	—	070ai+ig	070ai+if+'							須恵器蓋	第23頁65	A224 A233
66	AN5	6次	15.1	—	—	070ai	070ai+if							須恵器蓋	第23頁66	
67	TY704	6次	17.6	7.9	—	070a+gi	070ai							須恵器蓋	第23頁67	A240
68	DY756	6次	15.5	16.2	9.3	d+b'	b'							土師器蓋	第24頁68	
69	AN5	6次	—	—	12.8	B'	i							須恵器蓋	第24頁69	
70	G122-121	6次	24.5	—	—	d+b'	d'							土師器蓋	第24頁70	
71	G114-129	6次	14.7	—	—	a'	i							陶質壺	第24頁71	
72	G118-125	6次	20.4	—	—	070ai	070ai							土師器蓋	第25頁72	A22
73	AN5	6次						A						籠書き須恵器環 津紙	第25頁73	
74	AN5	6次													第25頁74	
75	TY628	6次												土製碁石	第25頁75	
76	G106-113	6次												土製碁石	第25頁76	
77	G122-121	6次												刀子	第25頁77	
78	AN5	6次												刀子	第25頁78	
79	DY752	6次												青銅製釣針	第25頁79	
80	OY3	6次												永楽通寶	第25頁80	
81	OY3	6次												永楽通寶	第25頁81	
82	AN5	6次	—	—	10.5			B						須恵器环底部	第28頁82	
83	AN5	6次	—	—	9.4			A						須恵器环底部	第28頁83	
84	G118-113	6次	—	—	10.0			B						須恵器环底部	第28頁84	
85	AN5	6次	—	—	10.2			B						須恵器环底部	第28頁85	
86	AN5	6次	—	—	9.8			A						須恵器环底部	第28頁86	
87	DY759	6次	—	—	9.8			B						須恵器环底部	第28頁87	
88	AN5	6次	—	—	9.6			A						須恵器环底部	第28頁88	
89	AN5	6次	—	—	9.5			B						須恵器环底部	第28頁89	
90	AN5	6次	—	—	10.8			B						須恵器环底部	第28頁90	

遺跡	出土地区	調査年次	口径	高さ	底径	外面調整	内面調整	底部切り 直し調整	a点	b点	c点	計	計測値	器 種	検出番号	遺物番号
91	AN5	6次	—	—	9.8			B						須恵器片	第28層91	
92	AN5	6次	—	—	10.0			A						須恵器片	第28層92	
93	AN5	6次	—	—	9.3			B						須恵器片	第28層93	
94	G122-117	6次				i	i							須恵器片	第28層94	
95	G118-117	6次				i	i							須恵器片	第29層5	
96	G114-129	6次				i	i							須恵器片	第29層96	
97	AN5	6次				i	i							須恵器片	第29層97	
98	AN5	6次				B'	A'							須恵器片	第29層98	
99	AN5	6次				B'	d'							須恵器片	第29層99	
100	AN5	6次				B'	d'+d'							須恵器片	第29層100	
101	KY741	6次				B'	A'							須恵器片	第30層101	
102	DY756	6次				B'	A'							須恵器片	第30層102	
103	G114-113	6次				B'	A'							須恵器片	第30層103	
104	DY756	6次				B'	A'							須恵器片	第30層104	
105	AN5	6次				B'	i							須恵器片	第30層105	
106	AN5	6次				B'	i							須恵器片	第30層106	
107	AN5	6次				h-B'	h							須恵器片	第30層107	

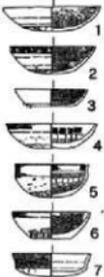
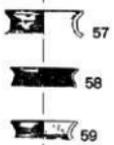
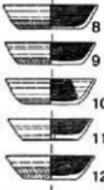
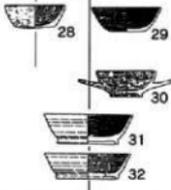
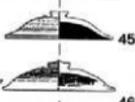
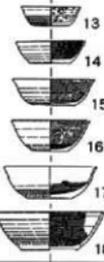
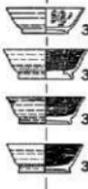
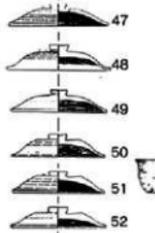
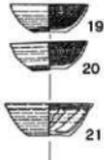
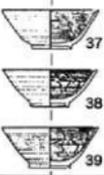
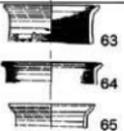
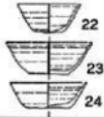
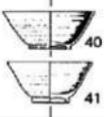
第8表 大浦B遺跡第出土土器器編年表

形式	年 代	大浦B遺跡出土土器の分類	関 連 遺 跡
I 期	8世紀中葉以前	A群1類 A群3類 A群4類 C群3類	木和田古墳・笹原・長手古墳・上浅川a・大浦C
II 期	8世紀中葉 ↓ 8世紀末葉	A群2類 A群5類 A群7類 A群8類 A群9類 A群10類 C群3類 C群1類 E群	横山b・笹原・八幡原No.30・31・道伝V下(川西)・大浦C・上浅川a
III 期	8世紀末葉 (9世紀初頭)	A群2類 A群6類 A群11類 A群12類 C群4類	上浅川a・八幡原No.30・31・道伝V上(川西)・大浦A
IV 期	9世紀初頭～中葉		道伝V上(川西)・清水北C・笹原
V 期	9世紀中葉～後半		笹原・道伝IV下(川西)

第9表 大浦B遺跡第出土須恵器器編年表

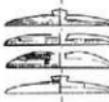
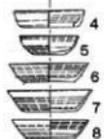
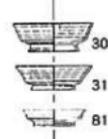
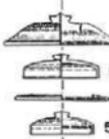
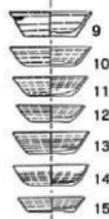
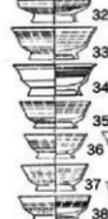
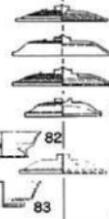
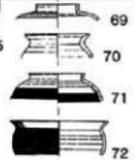
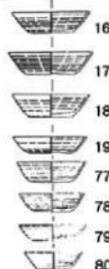
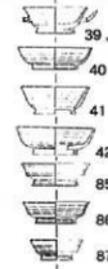
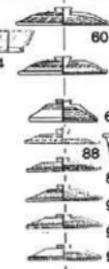
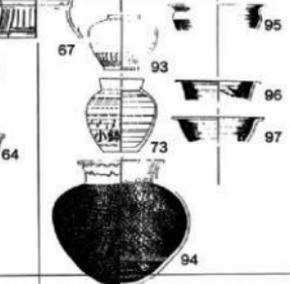
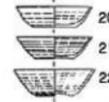
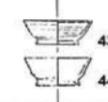
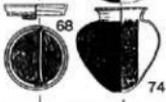
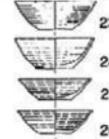
形式	年 代	大浦B遺跡出土土器の分類	関 連 遺 跡
I 期	8世紀前半～中葉		木和田古墳・長手古墳・大在家(須磨)
II期a	8世紀中葉～後半	B群1類 B群3類 B群6類 B群10a類 D群1類	上浅川a・笹原・大浦C
II期b	8世紀後半 ↓ 8世紀末葉	B群2類 B群3類 B群4類 B群5類 B群7類 B群10b類 B群12類 D群2類 D群4類	成島・笹原・上浅川a・大浦C・壇山窯跡(川西)・大明袖窯跡・道伝V下(川西)
III 期	8世紀末 (9世紀初頭)	B群5類 B群7類 B群10c類 B群11a類 B群13類 D群3類 H群	笹原・大明神窯・上浅川a・大浦C・壇山窯跡(川西)・V下(川西)
IV 期	9世紀初頭～中葉	B群8類 B群11b類 B群14類	清水C・笹原・道伝V上(川西)
V 期	9世紀中葉～後半	B群9類	笹原・道伝IV下(川西)

第10表 米沢盆地土師器編年図(8・9世紀)

時期	杯	碗 高台杯	蓋	壺・甕
I	 <p>1 2 3 4 5 6 7</p>	 <p>25 26 27</p>	 <p>42 43 高杯 44</p>	 <p>57 58 59</p>
II	 <p>8 9 10 11 12</p>	 <p>28 29 30 31 32</p>	 <p>45 46</p>	 <p>60 61</p>
III	 <p>13 14 15 16 17 18</p>	 <p>33 34 35 36</p>	 <p>47 48 49 50 51 52</p>	 <p>小鉢 62 63</p>
IV	 <p>19 20 21</p>	 <p>37 38 39</p>	 <p>54 55</p>	 <p>64 65</p>
V	 <p>22 23 24</p>	 <p>40 41</p>	 <p>56</p>	

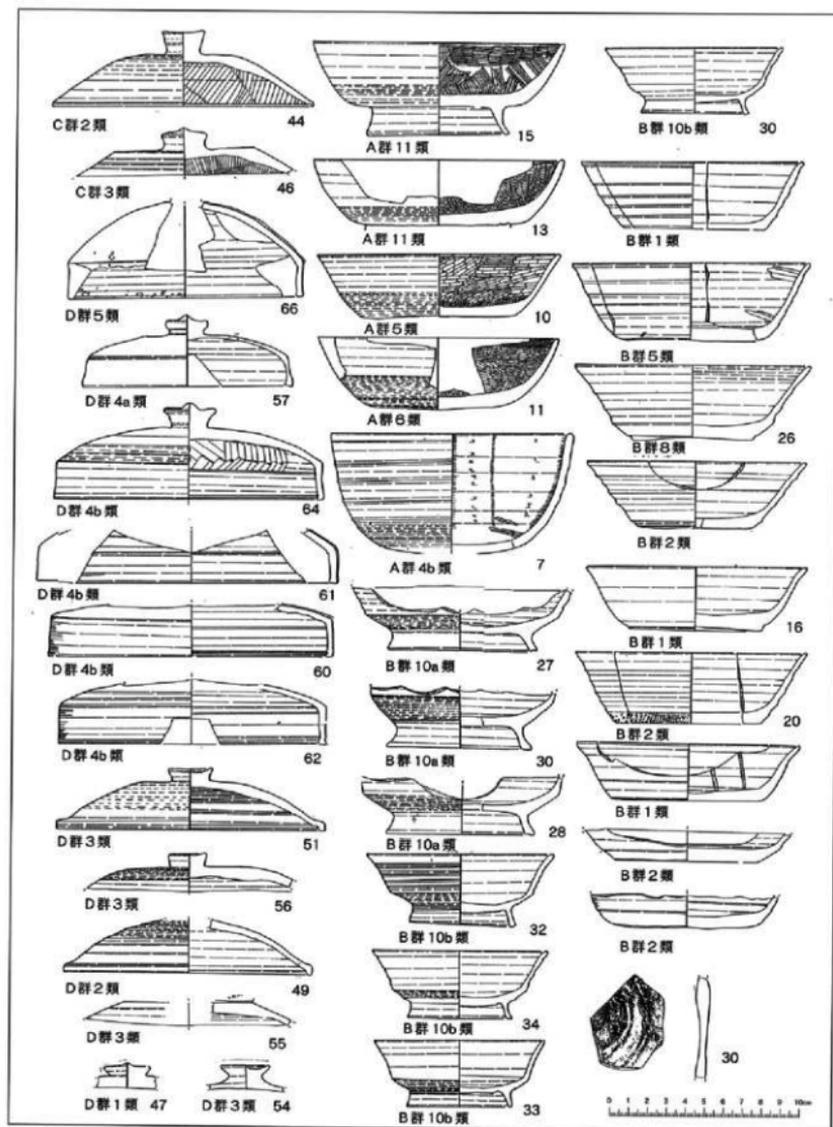
大浦C1, 上滝川a2・44, 笠原5・7・15・16・19~24・26・30・37~42・53~59・61~65
大浦b3・4・8~14・17・18・25・27・29・31~36・43・45~52・60

第11表 米沢盆地須恵器編年図(8・9世紀)

時期	杯	高台杯	蓋	壺・甕	鉢形
I					
II a					
II b					
III					
IV					
V					

木和田窯跡1~3・27~29・48~51,大浦C4・7,成島9,上浅川5,塚山窯跡38・76,道伝23・34・62・63,
 荏原24~26・44~47・59・66・73~75,大浦b6・7・10~22・30~33・35~37・39~43・52~58・67~72
 大神窯跡77~97

第12表 大浦B遺跡・AN5出土遺物一覽表



ラケズリを施している。底部切離しはBであった。Ⅱ期前半に位置する。

○A群11類 (13～15)

高台坏の仲間で、外面はロクロbで、切離しはAである。内面はa²、a³のミガキで古い特徴も残っている。Ⅲ期に位置付けたい。

B群土器 [16～36]

須恵器の坏類を一括した。器形の特徴から14類に分類する。今回の調査からは8形態が認められた。なお前述したように第Ⅰ次～第Ⅶ次出土の遺物に対して細類している。

○B群1類 (16～18)

底部の切離しがAを有する坏で、底部から斜めに立ち上がるのを特徴としている。Ⅱ期に位置すると考えられる。

○B群2類 (19～20)

器形的には先の1類と類似する。本類はわずかに底辺が丸味を帯び、口縁部が外反する形態出ること区別した。切離しはAの回転ヘラ切り無調整である。Ⅱ期後半に位置する。

○B群4類 (21)

ゆるやかに外反し、下胴部にふくらみをもつ器高の低い坏である。底部切離しはAでⅡ期に位置するものと推測したい。第Ⅰ・Ⅱ次調査区からは4点出土している。

○B群5類 (23, 24)

底部径に対して口径の比が高い器形を本類とした。底部切離しはAでⅡ期からⅢ期にかけて使用された。

○B群6類 (26)

底部が厚いのが特徴で、口縁部は外反する。Ⅰ期に近い、Ⅱ期と見られる。

○B群10類 (27～36)

大胴部に回転ヘラケズリによって成形した稜線を有するのが特徴で、一般に「稜塊」と呼ばれる高台坏を一括した。稜塊も細かな特徴から大型の10a類、小形の10b類に分けられる。本群はⅡ期の前半、もしくはⅠ期後半に出現したものと見られ、本市においては笹原遺跡に出土列がある。今回出土した10a類はⅡ期からⅢ期にかけて認められる。27～30がB群10a類に分類される。残りの31～36は小形であり、Ⅲ期に位置する。川西町道伝遺跡や同町壇山窯跡、本市の大神遺跡、笹原遺跡に出土例がある。

C群土器 [44～46]

土師器の蓋を一括したもので、4類に分けられる。内面を磨重なミガキを施した内黒を示す形態である。第Ⅰ次調査区の大建建物跡周辺から出土したC群3類は認められなかった。

○C群1類 (46)

鈕部分から肩にかけて内傾するグループで肩部が「へ」に字状に張るのを特徴とする形態である。図示した46は欠損しているが肩部の特徴から本類とした。

○C群2類 (44, 45)

肩の部分がゆるやかな丸味を帯びるのが特徴で、口辺の返しが僅かである。Ⅲ期に位置する。

D群土器 [47～67]

須恵器の蓋類を一括する。形態から宝珠型の鈕を有し、器高の高いグループをD群1類。宝珠型の鈕を有し極端に器高が低いグループをD群2類。肩が張るタイプをD群3類とした。他に肩部から直角に口縁部にかけて屈折するD群4類に分けられる。

さらにD群4類は小型のD群4 a類、大型のD群4 b類に細分される。D群5類は今回の調査で出土した新しい形態であり、従来の分類団に付け加えた。D群5類は大型でヘルメット型をしている。以上の6形態に細別した。

○D群2類 (47, 49)

鈕部だけの出土である。一連の調査によって出土したD群土器の吟味からのこの鈕部をもつ形態を想定に本群とした。49は鈕部が欠損しているが前述した理由による。Ⅱ期前半に位置する。

○D群2類 (48)

Ⅱ期後半に位置する形態と考えられ、今回図示できたものは1点だけであった。

○D群3類 (50～56)

肩が張るタイプの本群はⅢ期に位置する形態であり、今回の調査区から出土した本群土器では最も多く見られるタイプである。

○D群4 a類 (57～59)

本類土器は暗緑色を示すもので、灰軸陶器である。灰軸が当初から意図的なものか、自然軸なのかは意見が別れるところである。前述したB群10類や本類は本市の西北に所在する大神窯跡で焼成されたとの見方が強い。年代はⅡ期に位置付けられる。

○D群4 b類 (60～65)

大浦B遺跡第Ⅵ次調査区から出土した本群は新しく付け加えた形態である。前述した4 a類と同様に暗緑色を有する搬入須恵器と考えられる。65は接合してほぼ完形になった。肩部には焼成の際に生じた灰が付着している。AN5出土で占められ、Ⅱ期に位置する。AN5はⅣ期に構築された焼土遺構である。欄列に囲まれた建物で使用した土器類を一括して捨てた遺構がAN5と解釈したい。

○D群5類 (66, 67)

鈕部が大きく整形された67はPY704からの出土である。欄列内に構築されたBY42に付随するKY456西側に重複して握られたのがDY704で状況から判断して、Ⅲ期のBY21に関連した土器と推測される。仏具の敷機を模した形態であり、祭祀的な意図で埋納された土器と考えたい。66は肩が丸味を帯びることから鈕部はD群4類と考えられる。Ⅱ期に位置する土器を想定したい。

E群土器 (42,43,70,72)

土師器甕形土器を本群とした。破片としては最も多く出土しているが、復元までには至らないのが大半であり、2点を図化した。68は完形でⅠ期の土層から出土した。外面をハケメd¹で仕上げている。内面はf²・f³のナデ調整を施す。70は胴下半部が欠損した形態である。外面をハケメd¹、内面d²で仕上げている。Ⅰ期に属すると考えられる。

F群土器 [69, 40, 第29図, 第30図]

須恵器甕形土器を一括した。この類はすべて破片で占められ、調整手法で分類することも可能であるが、第6表を参照願うことにし、詳しく触れることは割愛したい。ただし69は須恵器鉢形土器の底部である。40は外反する口縁部を有する甕形土器の器形が想定される。

G群土器 [37, 38, 39, 41]

須恵器壺を一括した。すべて破片で27点検出した。37・38は短頸小型壺で内外面ともカキメ調整で仕上げている。39は大型の壺の器形が想定される。41は長頸壺である。この類は笹原遺跡と上浅川a遺跡、大浦B第Ⅰ・Ⅱ次調査で検出され、Ⅱ期からⅢ期に位置すると考えたい。

2 その他の遺物

陶質土器、鉄製品、漆紙、土製碁石、青銅釣針、筧書き土器、墨書土器、古銭、中近世陶磁器がある。列挙した順に説明を加えたい。

○陶質土器 (71)

鉢形を呈する器形で赤褐色の部分と灰褐色の色調を有する。これは2種類の粘土を使用し意図的に彩色した結果であろう。第Ⅵ次調査区からの出土であり、口縁部だけであるが復元図面を図化した。口縁部の形態から蓋がつくものと考えられる。ロクロ成形によるもので外面は鄭重にミガキ調整で仕上げている。内面は水引きのあとが残り、凹凸がある。口縁部には2箇所到有孔部が認められる。一見すれば中世期とも見られる。出土例がなく年代は不明としておく。

○鉄製品 (77, 78)

両者とも刀子である。77は刃の部分、78は柄の部分である。78はAN5出土であり、伴出土器からⅡ～Ⅲ期に位置付けられる。

○漆紙 (74)

山形県埋蔵文化財センターで赤外線テレビカメラを使用した分析の結果、文字はないと判明した。出土状況から木製容器に入れられて廃棄されたと推測される。木製容器は腐食して漆紙だけが残ったものである。

○土製碁石 (75, 76)

第Ⅵ次調査区TY628上面から75、第Ⅶ次調査区G106-113生活面から76の2点が出土している。焼成及び土が土師器類と同様なことから奈良末葉から平安初期に位置する土製碁石で山形県内では初めての発見である。灰白色を有し、直径2.2cm・厚さ0.65cm・重さ0.1gを測る。76はにぶい赤褐色を有し、直径1.8cm・厚さ0.9cm・重さ0.1gを測る。ちなみに現在使用されている碁石の計測は、直径2.18cm・厚さ0.76cm・重さ0.2g材質は蛤の貝を使用し研磨して仕上げたもので最高級品である。今回出土した2点は色調から言えば、白と赤に分けられ、現在の組合わせ白と黒があるように、白と赤の組合わせも考えられる。

古代の碁石の出土例としては、奈良県藤原宮の邸宅出土碁石(7世紀末～8世紀初頭)や同平城京出土碁石(8世紀末)に次ぐ出土例である。古代の遊戯具としては、将棋・囲碁の存在が知られるが、将棋は9世紀以降に日本に持ち込まれ、囲碁は百濟王から寄贈された碁盤と碁石

等が東大寺正倉院に存在する。このことから囲碁が将棋より前に伝播したことは明らかであり、囲碁の歴史を知る上でも本遺跡の土製碁石は貴重な発見といえる。

○青銅釣針 (79)

第Ⅵ次調査区のDY752覆土から出土している。長さ4.5cm・厚さ0.1cmで頭部がやや幅広く整形され有穴されている。穴の直径は0.15cmの精巧な作りである。形態から判断して魚類を釣る道具であろう。年代は伴出土器から判断してⅡ期～Ⅲ期に位置付けられる。

○篋書き土器 (73)

AN5出土で底部に「祈」と刻線で書いている。焼成以前に記されたもので窯場での記載が考えられる。本遺跡の須恵器は大神窯跡で焼成されたと考えられ、当然祈りをこめて記された文字であろう。ちなみに、大神窯跡でも1点篋書き土器が出土している。

○墨書土器 (25, 29)

第Ⅵ次調査で29の1点の第Ⅶ次調査で25の1点、合計2点が認められた。遺物の出土数からみれば墨書土器はきわめて少ないと言える。29は後塊の底に(停?)と書かれている。25は欠損しており不明と言わざるを得ない。Ⅱ・Ⅲ期に位置する土器群に記されている。

○古銭 (80, 81)

中世期墓塚から出土している。拓影図で2枚示した。他に5枚が接合した状況で出土している。埋葬の際に遺体と一緒に埋納した状況であった。「永樂通寶」である。

○中・近世陶磁器

中世陶磁器としては3点認められる。軸葉を使わず焼成した壺の破片であり、常滑焼と考えられる。第Ⅶ次調査区からの出土であった。遺構に伴ったものではなく、確認面からの検出であった。柱穴や土壇が数多く点在するわりには遺物は少ない。

○近世陶磁器

器種としては摺鉢・小皿・中皿・鉢・小壺等が認められる。すべて小破片であり、復元できたものはなかった。以下に概要を述べる。

○摺鉢

摺目が荒っぽいタイプと全面に摺面がある二形態に分けられる。後者は現在の摺鉢とあまり変わらない器形、焼成である。前者は長期に亘って使用したと推測され、摺面が凹凸をなくしている。福島県福島市飯坂の飯坂岸窯焼(1644～48)の成品であろう。

○茶碗

刷毛目碗や染付碗がある。現代も操業を続けている福島県相馬市中村字新町の大堀相馬焼(1624～44)～現代の製品と伊万里系の焼物であると考ええる。

○小皿・中皿

呉須で描かれた草花や風景画を有するもので伊万里系の製品と考えられる。

○鉢

釉の特徴から本市の成島焼や、前述した岸窯焼がある。切立の破片も認められた。これらは17世紀以降の陶磁器類であり、点在する柱穴群が中世から近世まで続くものと理解したい。

3 出土土器の年代

今回の調査区から出土した大半の土器は大浦B遺跡のⅣ期に位置する遺構からである。この出土状況は過去の第Ⅰ次調査から第Ⅴ次調査においての出土状況と類似する。これは官衙が機能を失った直後に一括して廃棄した土壌内部からによるものであり、従って遺物に年代幅を有することは当然であり、第Ⅰ次調査区においてAN2の一括資料を漆紙文書の延暦23年に求めることは正しい方法とは限らない。

そこで、遺物が層位的に認められた笹原遺跡SD3の資料と同じ様に溝内部の6層、7層出土遺物が顕著に出土した大浦C遺跡資料を分析し、土器群の年代を設定し、第36集米沢市埋蔵文化財報告書「大浦」で報告している。今後の調査区も隣接する地区であり、前回報告した資料を使用する。それを示したのが第7～9表で前回と同様であるが、平成5年に実施された大神窯跡の調査によってさらに吟味された。米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集「大神窯跡」の報告書93頁～94頁に詳細に述べているので引用したい。

それによると、大浦B遺跡出土の具注層に共伴していた遺物の多くは、延暦23年の9世紀初頭の遺物は含まれていない。むしろ8世紀後半から末葉の土器群が主流であった。仮に具注層の再利用から廃棄年代を推測してみると層の機能が失った時期つまり、延暦24年以降となる。和紙蓋としての使用年数は2年が限度ということであり、延暦24年に使用したとすると大同2年(807)に廃棄したことになり、延暦23年の完年代の閉きは3年になるという。

ただし、具注層の保管年代も加味しなければならない。銘記資料と共伴遺物との年代幅をどのように把握するかである。大浦編年はその点の遺跡や隣接遺跡と比較検討し、作成したものであり、大きな誤りはないと確信している。

大浦編年は第7表に土師器編年表、第8表に須恵器編年表で示した。この表も以前使用したものであり、今もこの編年は変容しないので、これに沿って説明したい。

土師器はⅠ期～Ⅴ期に、須恵器はⅠ期～Ⅴ期の中にⅡ期a・Ⅱ期bをもうけ、Ⅵ期に分別している。土師器が中心をなすⅠ期は遺構で言えば竪穴住居の時代であり、土師器埴や内黒土師器蓋が認められる。土器類で言えばA群1・3・4類、C群3類がある。関連する遺跡としては終末期古墳の長手2号・4号墳、笹原遺跡、上浅川a遺跡と隣接する大浦C遺跡があり、いずれも本市の北東部に集中する。Ⅰ期の年代は8世紀中葉以前である。須恵器は大浦B遺跡からは出土していない。須恵器が出現するのはⅡ期aとした8世紀中葉からである。遺構としては柵列で囲まれた建物群を中心に官衙として機能する時期に相当する。

Ⅱ期の土師器はA群2・5・7・8・9・10類、C群1・3類、E群があげられる。須恵器のⅡ期aはB類1・3・6・10a・D群1類がある。

Ⅲ期は建替えが行われた時期である。土師器はA群2・6・11・12、C群4類がある。須恵器はⅡ期bに区別され、B群2・3・4・5・7・10b・12類、D群2・4類と数も増えてくる。須恵器のⅢ期は8世紀末葉～9世紀初頭で官衙の最終段階である。形態としてはB群5・7・10c・11a・13類、D群3類、今回は出土しなかったがH群がある。

Ⅲ期を境に土師器は認められなくなる。Ⅳ期は9世紀初頭～中葉に位置するもので主要建物

廃絶する時期に相当する。土器の形態としてはB群8・11b・14類がある。

V期は9世紀中葉～後半に位置する土器群でB群9類がある。以上述べたように土器群を細別し、手代別に示したのが第7表(土師器)、第8表(須恵器)である。詳細についてはこれらの表を参照願いたい。

第IV節 総括

平成元年の調査開始から平成11年の長期に亘って発掘調査が続けられてきた大浦B遺跡は一部を除き、大半を調査することができたと考えている。多くの遺構・遺物が検出され、大浦遺跡が奈良時代における本市の実態を知る上で非常に重要な遺跡であることが判明した。

ここでは11年間の調査実績と過去17回に及ぶ周辺調査を吟味しながら、大浦遺跡の位置付けを考えてみる。

1 大浦遺跡の遺構

大浦遺跡は第3図で示すように東西約400m、南北約100～150mの範囲にかけて遺構が構築されていることが分かった。第36図にはⅡ・Ⅲ期の遺構全体図を示したので参照願いたい。遺構は奈良時代から平安時代にかけて構築された掘立建物跡が主要で、4時期に分けられることが判明している。他に中世の館に関する遺構、近世の墓壇等が発見された。ここでは官衙成立期から廃絶直後に亘る4時期を主に述べたい。

○Ⅰ期の遺構(8世紀前半～同中葉期) 第32図

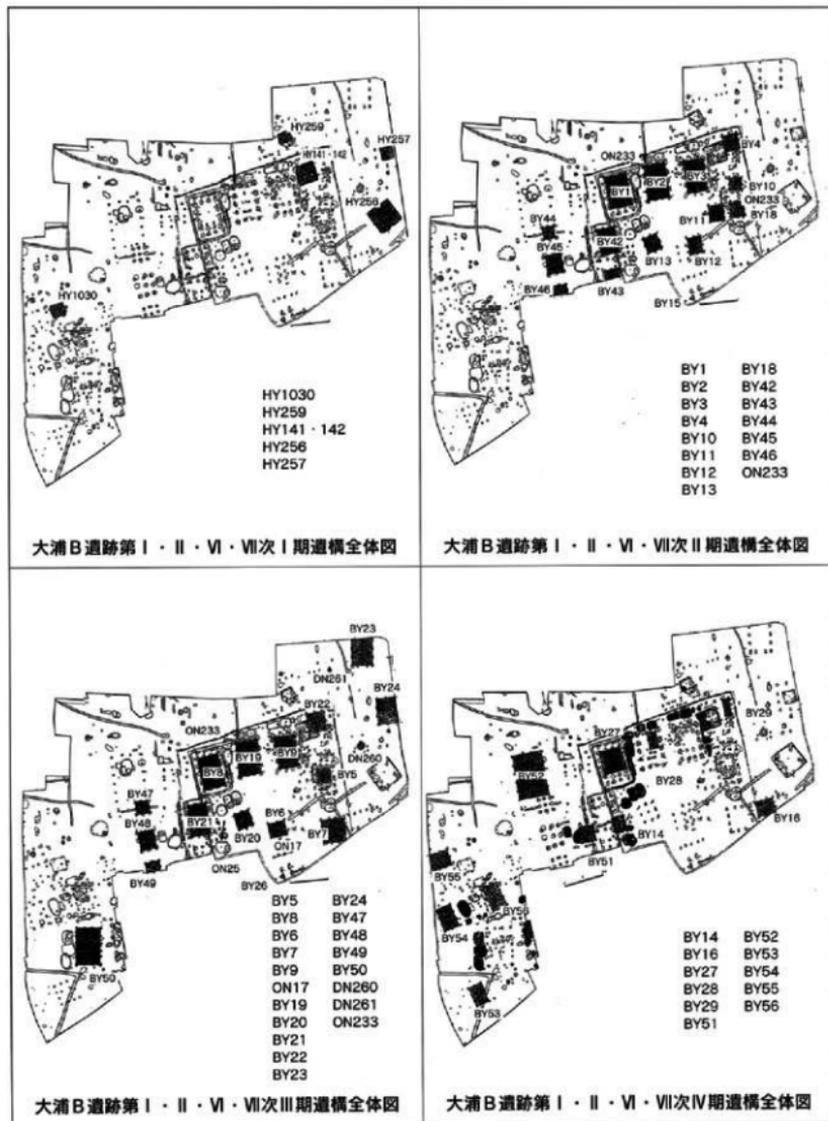
I次・II次調査区の東側から4棟、15次調査区北方から1棟の合計5棟が検出された。全ての竪穴住居跡は埋立てられ、住居跡内部に殆ど遺物は認められないのが特徴である。

従来の考え通り、Ⅱ期の官衙建設に伴って強制的に移転させられた結果であろう。大浦A遺跡からも第3次調査によって竪穴住居跡1棟を検出している。このことから南方の大浦A遺跡からの大浦B遺跡を中心とした範囲に中規模な集落が営まれていたとみられる。年代はA群I類土器の形式で8世紀前半から中葉と想定したい。

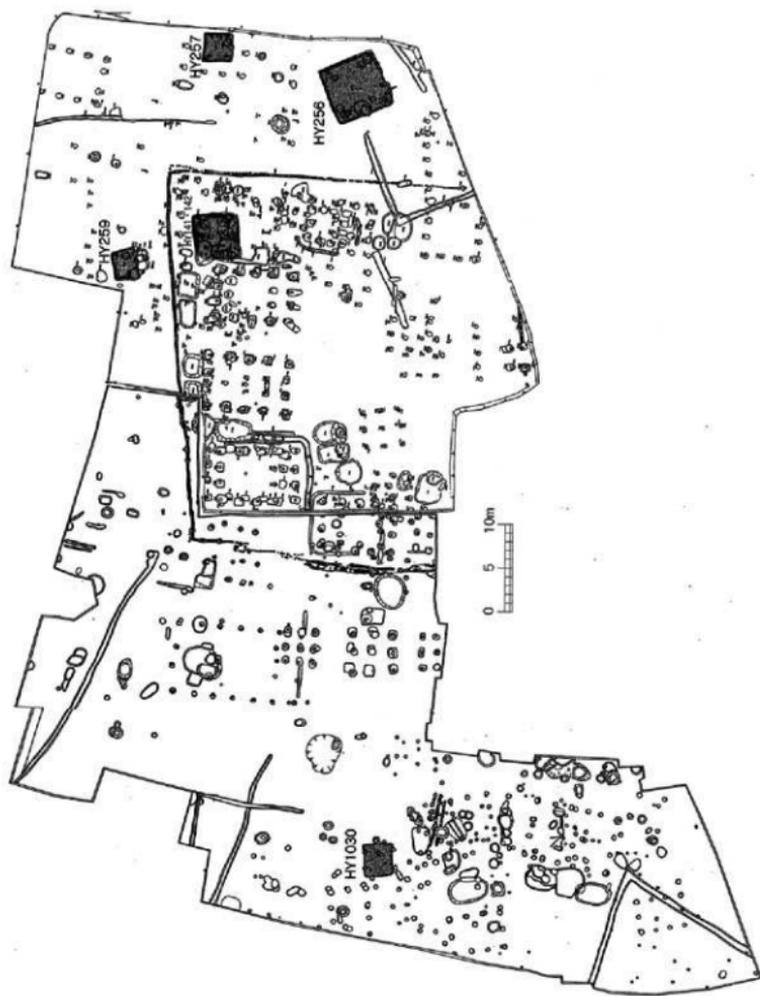
○Ⅱ期の遺構(8世紀中葉～8世紀末葉) 第31・33図

南に4脚門を配し、東西41.5m×南北38.4mの欄列で区画した範囲にBY1～BY3の3間×4間の3棟の大型建物を中心にして、2間×2間の総柱の建物を7棟、と同じく2間×2間の小規模な建物を3棟、北方を溝で区画した中規模建物3間×4間1棟の合計14棟が大浦B調査で確認された。欄列内には11棟、欄列西方に3棟の配置である。ちなみに大浦遺跡として見た場合は21棟を検出している。全体的に見た場合も欄列で区画した場所及びその周辺に建物が多く、大浦B遺跡が官衙の中心と見ることが妥当と考えられる。

これらの建物はBY13を除けばN-5°-Wを示しており、企画的に配置されている。同じ様に北東160mの大浦C遺跡からも欄列内に東西長の3間×4間の建物と、南北長の3間×4間の建物が「L」字状に配され、南側55mの大浦A遺跡に東西方向にのびる欄列、西側70mに



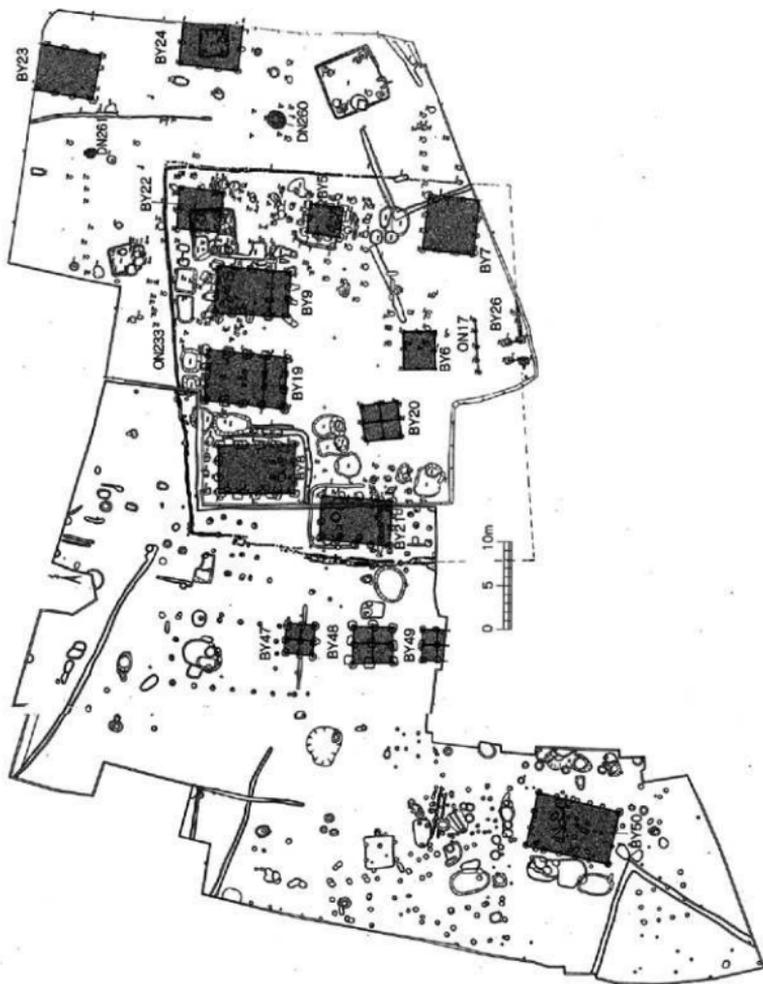
第31図 大浦B遺跡遺構変容図



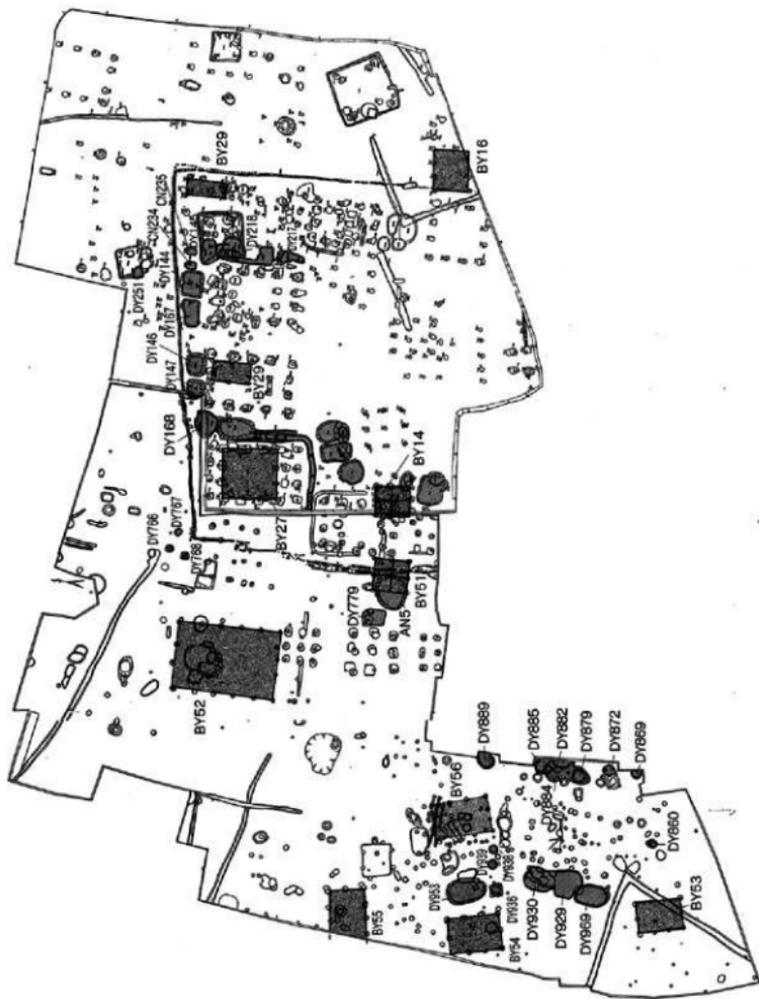
第32図 大浦B遺跡第一期遺構全体図(1)



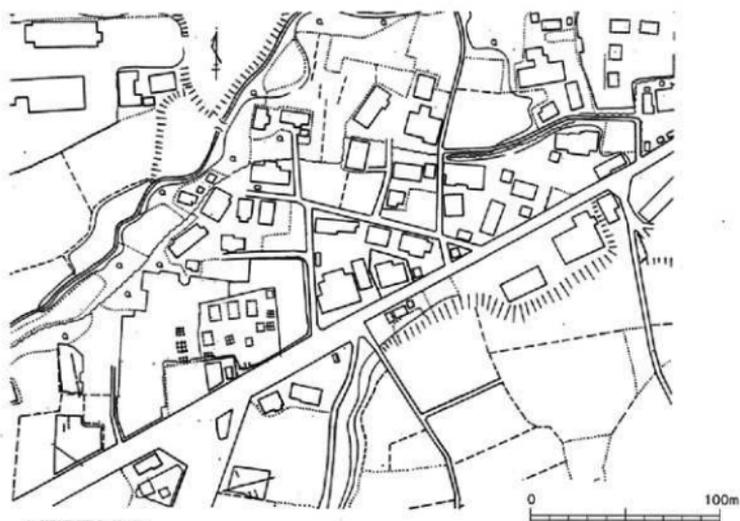
第33圖 大浦B遺跡第Ⅱ期遺構全体圖(2)



第34図 大浦B遺跡第Ⅲ期遺構全体図(3)



第 35 图 大浦 B 通跡第 IV・V 期遺構全体図(4)



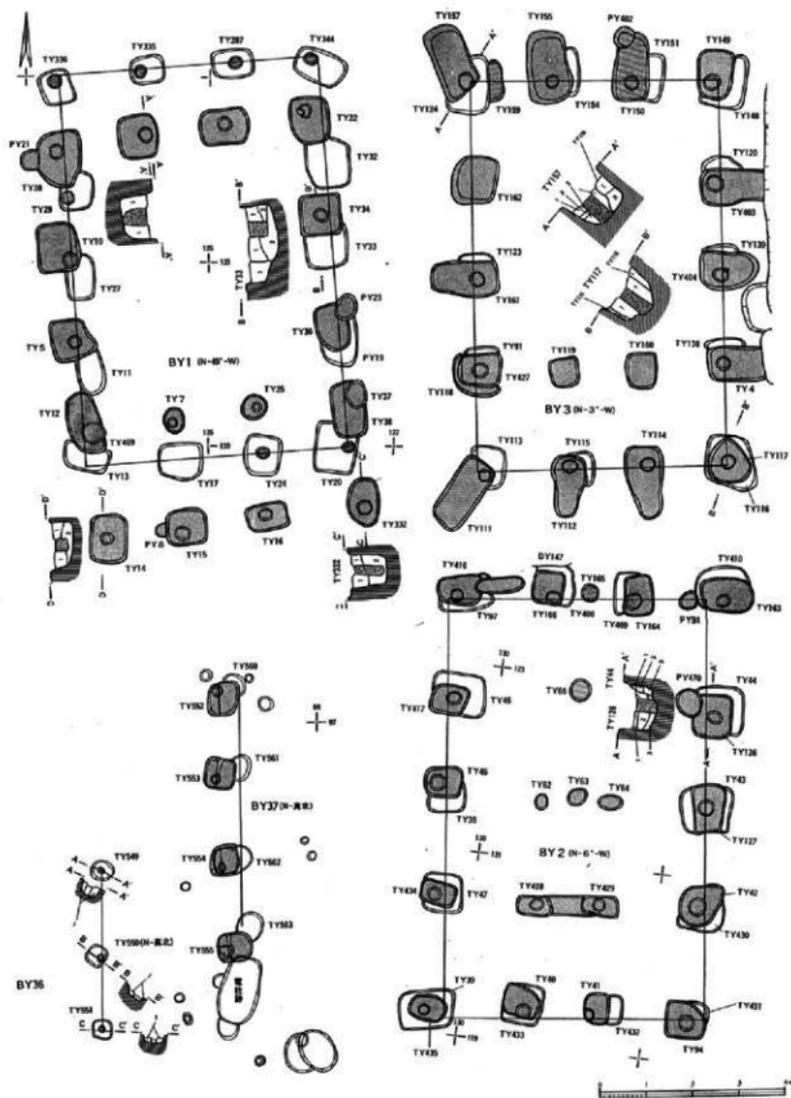
II期遺構全体図



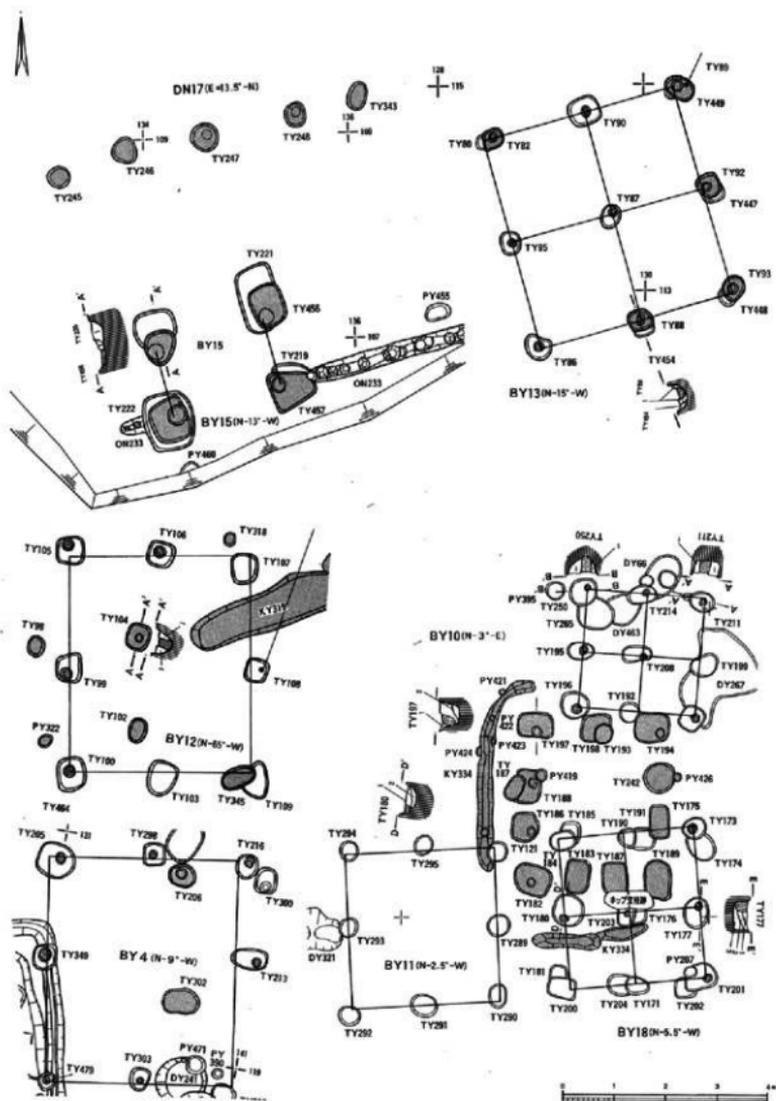
III期遺構全体図

第36図 大浦遺跡群遺構変容図(II期・III期)

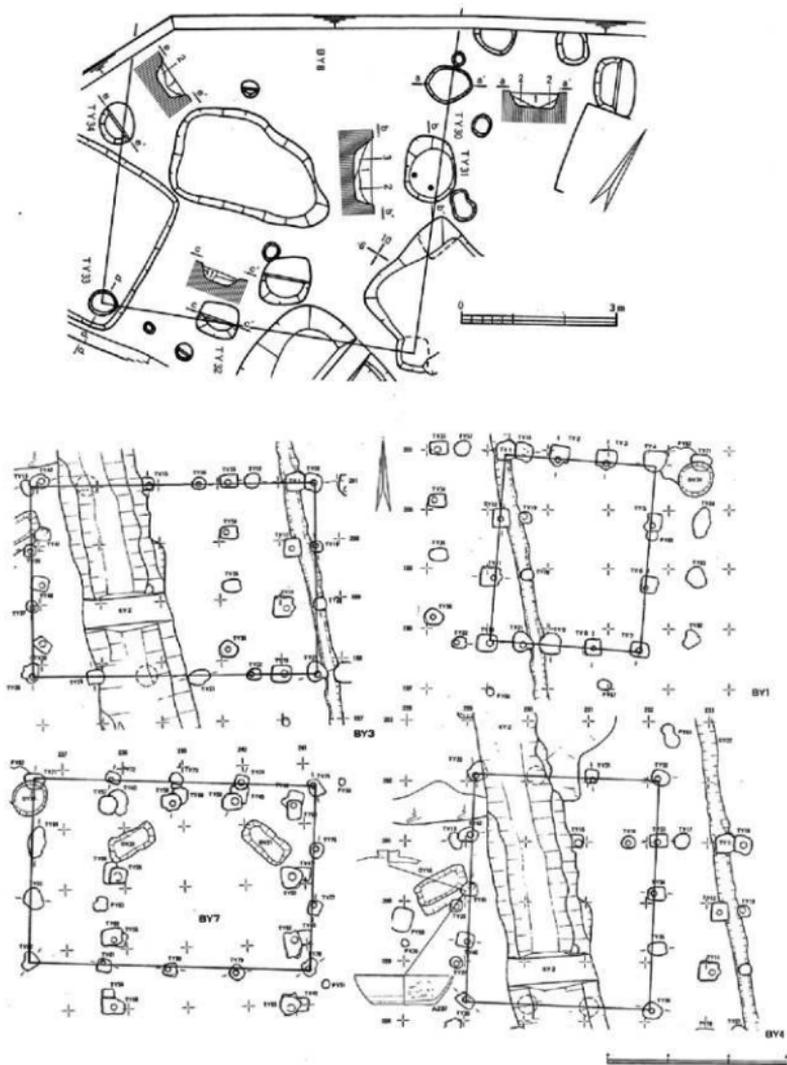
第13表 大浦遺跡Ⅱ期建物平面図(1)



第 14 表 大浦遺跡 II 期建物平面図(2)



第15表 大浦遺跡Ⅱ期建物平面図(3)



も柵列と目隠しが伴う。Ⅱ期の遺構を第12表～第15表にまとめたので参照願いたい。

○Ⅲ期の遺構（8世紀末葉～9世紀初頭） 第34図 第15～20表

今回新たに確認したBY21・47・48・49・50、従来から確認されているBY8・19・9・22・23・24・5・20・6・7・ON17、南門のBY26、柵列ON233、大浦Cの7棟、柵列2基、それに大浦A3棟、柵列2基で構成される。

基本的にはⅡ期の建物群と同じであるが、建替えを行った3棟の大型建物のうち、最も西側にあるBY8は1間分を南に移動している。中央のBY19と東のBY9に南に1間に対し間仕切りを有する様になる。東側の建物も、ある一定の間隔を保っている棟、BY22・5・7が構築される。西側にはBY21が前の建物に伴う溝を掘り込んで建替えが行われる。南門の入口には、DN17の目隠し塀が設置される。他にBY20・6がある。

柵列外の東側にはBY23・24の2棟、西側には総柱のBY47・48・49がⅡ期と同じ場所に建替えられる。さらに南方には、やや大型のBY50が新たに構築される。他に第17表に示した第9次調査区のBY33、第13次調査区のBY7が同時期と考えられる。これらを総計すると建物は26棟、そのうち総柱建物は5棟である。

大浦C遺跡（第19表）では東西長の建物が建替えした後はずべて南北長となる。井戸跡もDN260・261・936の3基が設置される。

○Ⅳ期の遺構（9世紀初頭） 第35図 第21表

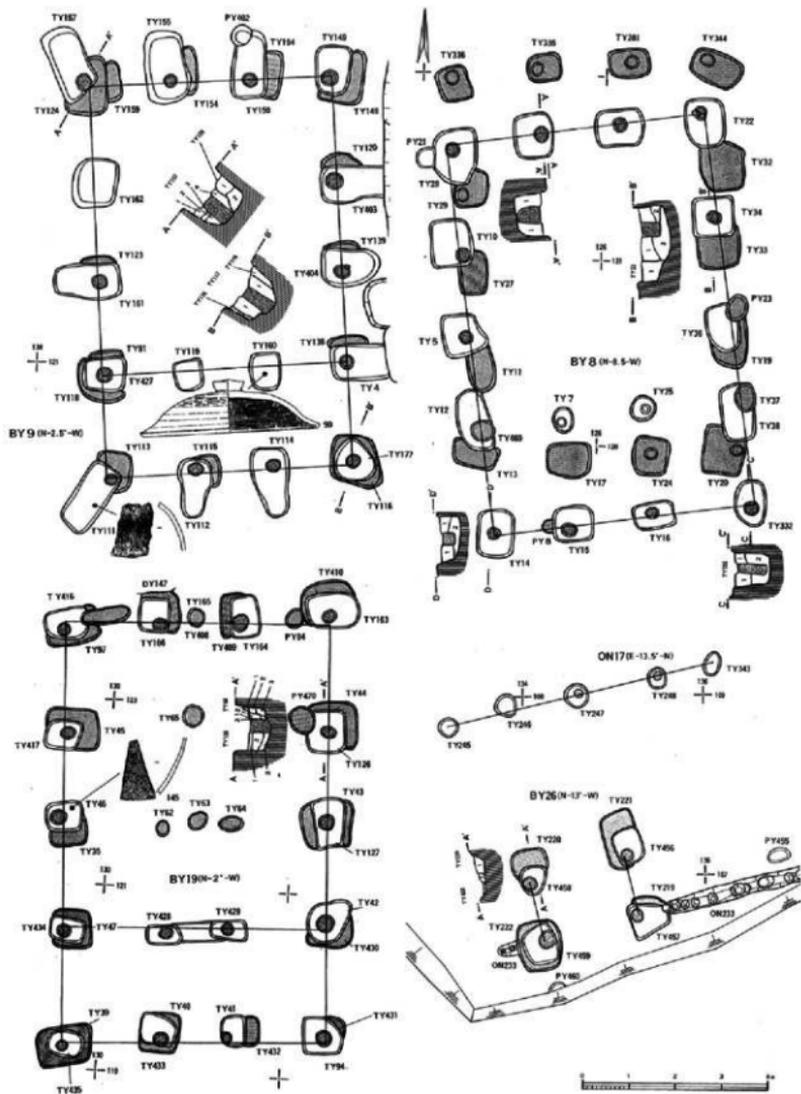
官衙の機能が失われた直後に構築された遺構群である。これまでに4棟の建物と土壌17基、溝1基、焼成竪穴遺構4基を確認している。今回の調査で新たに建物6棟と井戸1基、主要な土壌14基、焼成竪穴遺構1基を検出した。なお、柵列内のBY14はⅡ期と考えられていたが、今度の調査によってⅣ期に位置付けた。

建物の中では第Ⅵ次調査区に位置するBY52が大型建物であり、現在のところⅣ期の中心をなすと想定される。第35図で示すように柵列外及び柵列内に土壌が構築され、出土遺物の大半はⅣ期の土壌群からである。特にANと略号をつけた焼成竪穴遺構に集中し、第Ⅵ・Ⅶ次調査出土の遺物はAN5によるものであった。第11表に出土遺物実測図一覧表を作成したので参照願いたい。

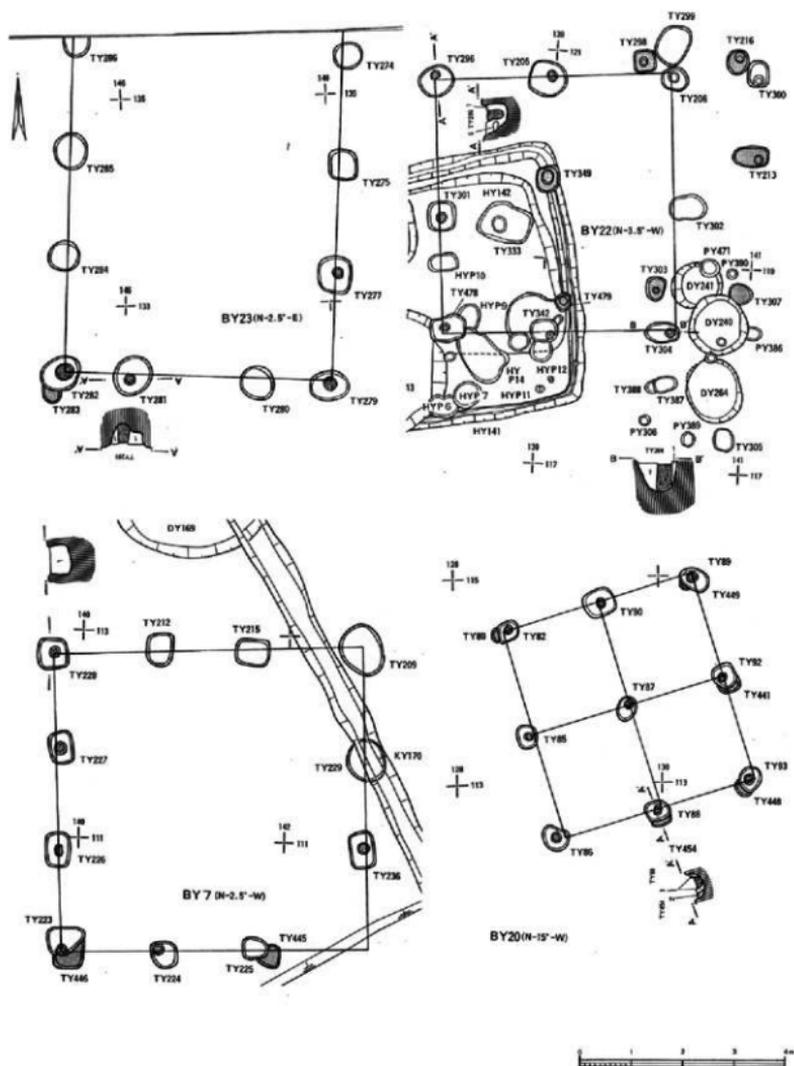
第7次調査区の建物跡は東西長のBY55を除き、ほぼ同一方向を示している。他の同時期の遺物跡と比較して、少し時間差があるのかもしれない。DN936はⅢ～Ⅳ期にかけて使用したと推測される。BY53～56の建物跡の存在は東方地区の未調査の部分についての遺構を考えた場合、同様な建物跡が容易に想定される。

Ⅳ期の建物跡を構成する柱穴掘方が30～45cm、痕跡跡も15～20cmと小規模であった。土壌は第7次調査を中心に構築されたおり、比較的浅い形態である。第Ⅰ次・Ⅱ次調査のように遺物は認められず、柵列内に遺物が集中すると言える。第Ⅵ次調査区においては、その傾向が顕著に現れ、復元し図化できたのはわずかに4点だけである。遺物の出土状況や遺構から考えて、大浦遺跡の中心はⅠ・Ⅱ次調査区であることが、ますます今日の調査によって明らかになったと言えよう。

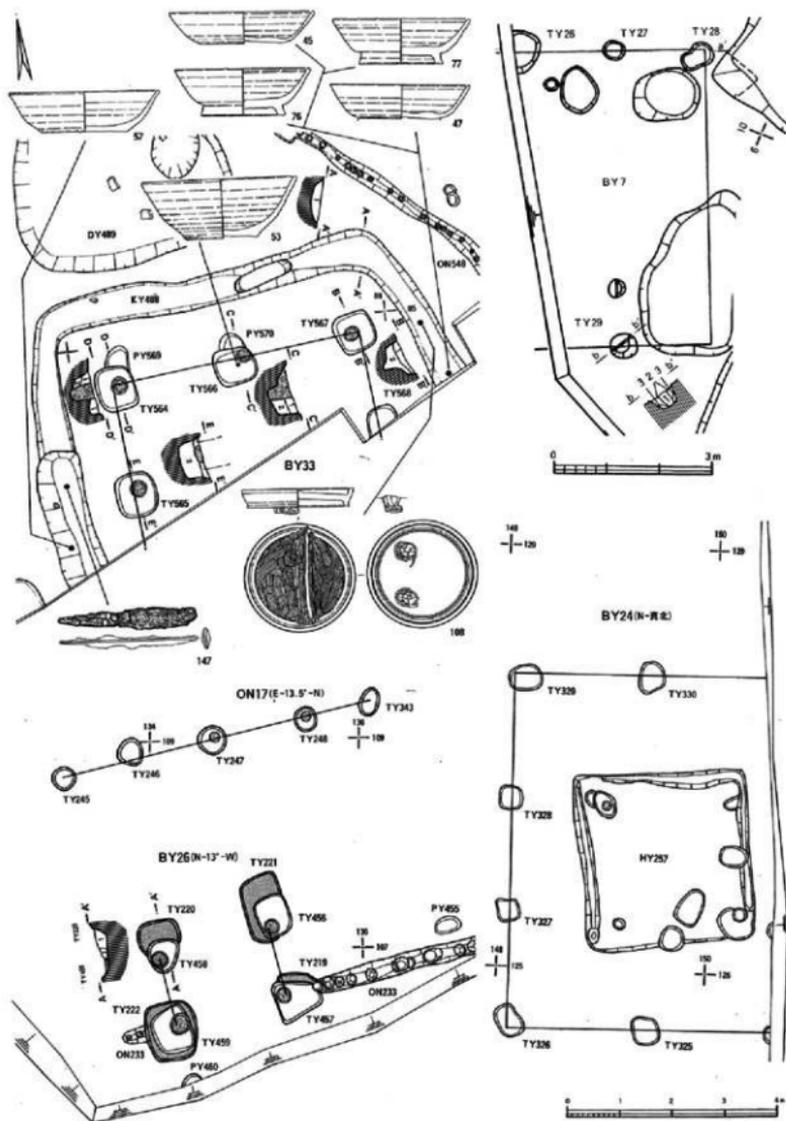
第16表 大浦遺跡Ⅲ期建物平面図(4)



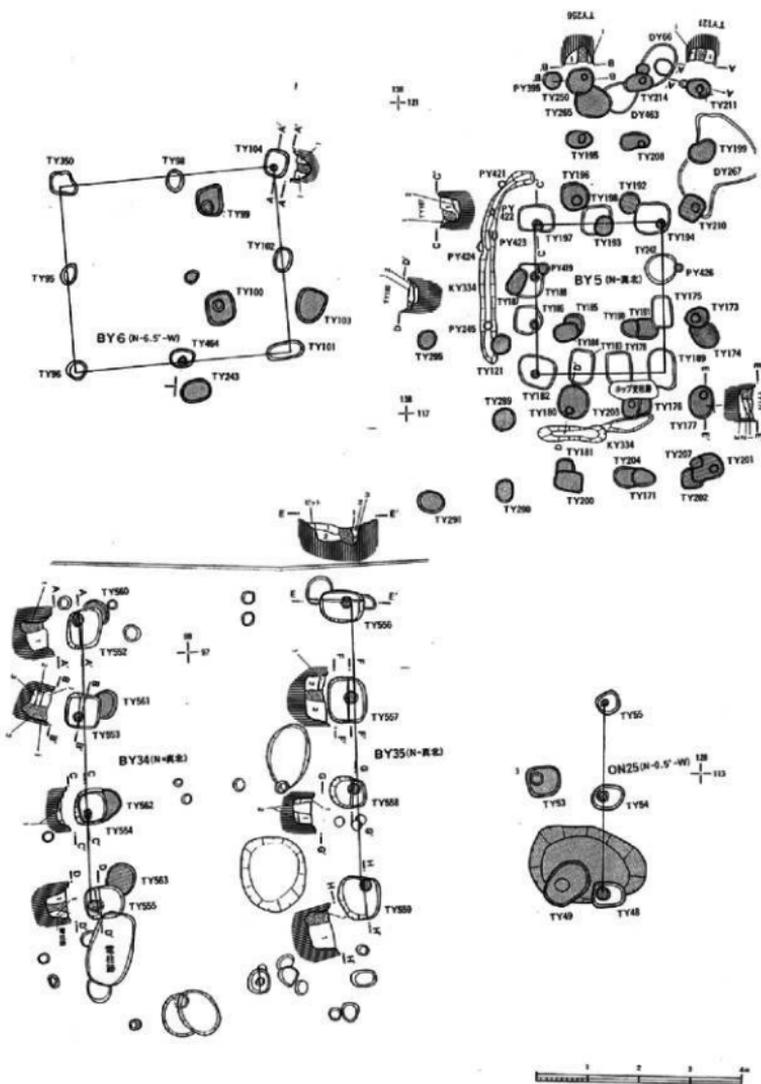
第 17 表 大浦遺跡Ⅲ期建物平面図(5)



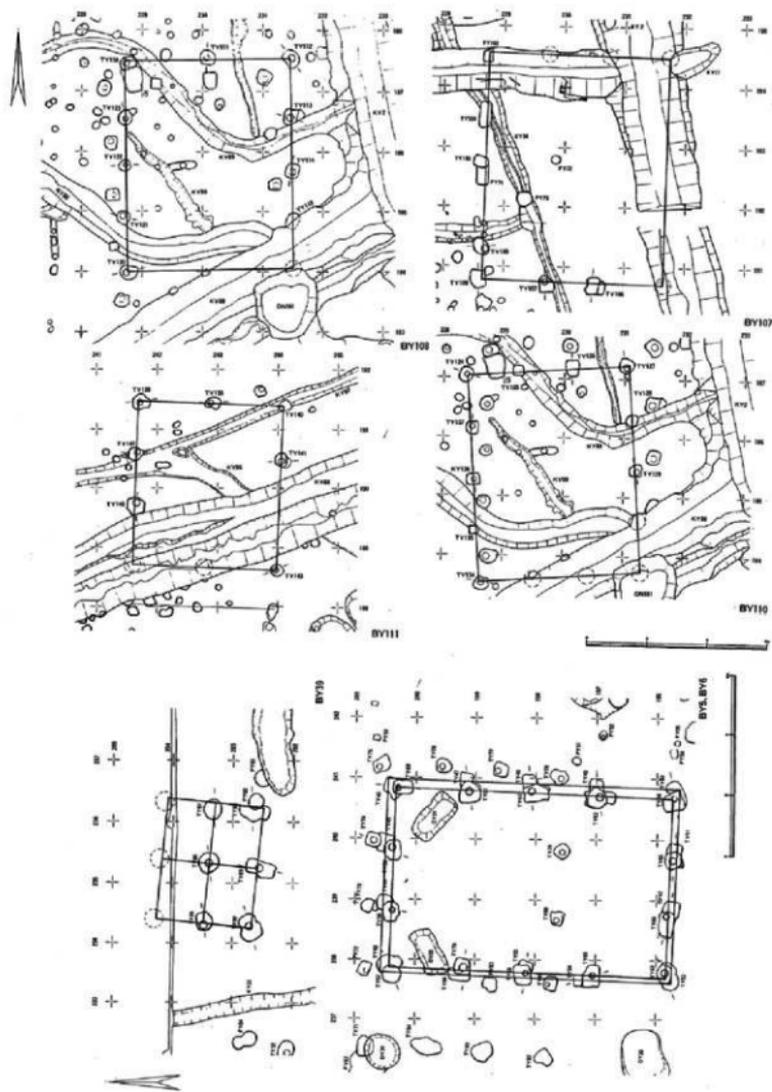
第18表 大浦遺跡Ⅲ期平面図(6)



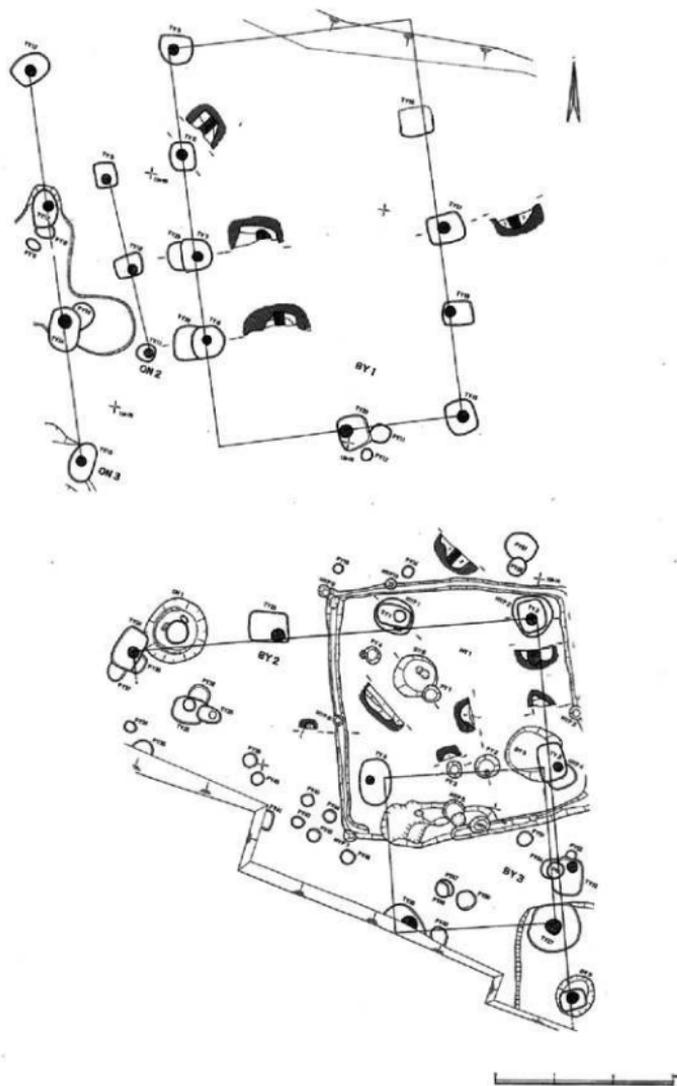
第 19 表 大浦遺跡Ⅲ期建物平面図(7)



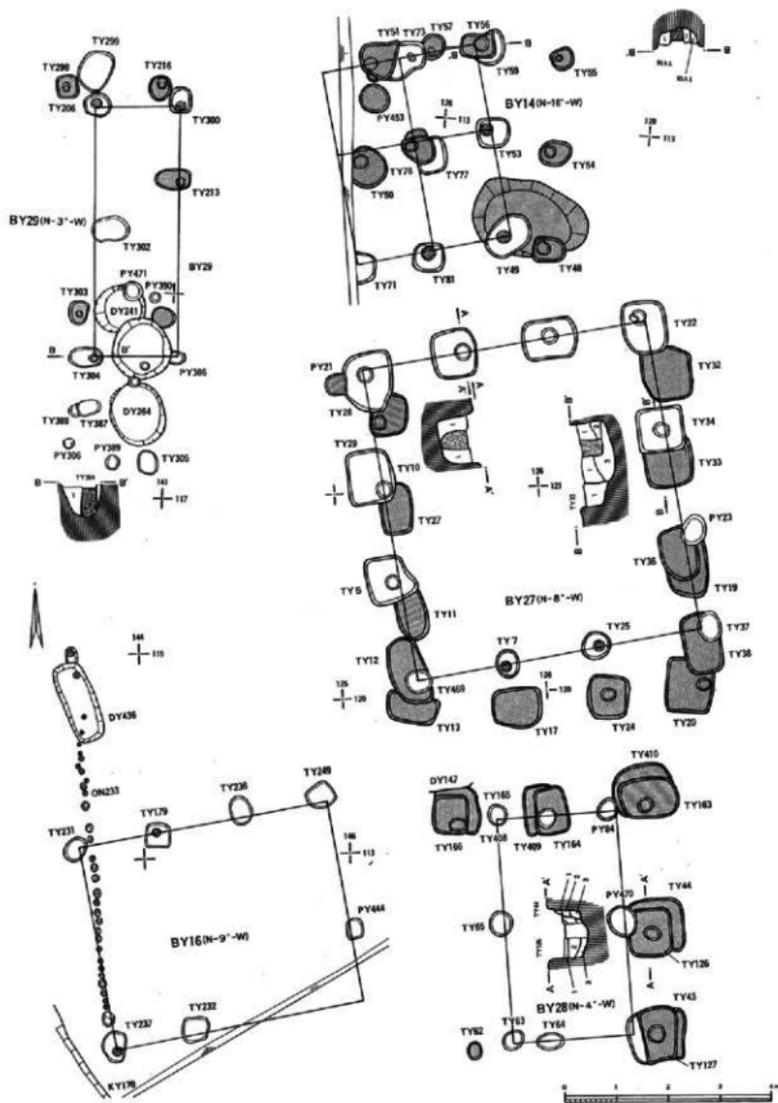
第20表 大浦遺跡V期建物平面図(8)



第 21 表 大浦遺跡Ⅲ期建物平面図(9)



第 22 表 大浦遺跡Ⅳ期建物平面図(10)



2 出土遺物

出土遺物はⅠ期及びⅣ期の土壌内部から検出されたものが大半で、土師器・須恵器の坏類と蓋類が主流である。土師器としては甕形土器に分類される破片が3,954点で、全体の60%を占めるⅠ～Ⅴ次までの出土状況と一致する。ちなみに復元した甕形土器は僅かに1点であった。注目される器種として灰釉を施した蓋類が上げられる。本市の大神窯跡BN2で焼成した須恵器と考えられ、同時代の遺跡からは初めての出土例となる。その他にA群ⅠⅠ類の土師器高台杯が含まれる。笹原遺跡のA群Ⅲ類に後続する形と推測され、Ⅲ期を代表する形態と言える。

須恵器は糸切りを主体とする底部調整は少ない。第Ⅲ次調査区から出土したⅣ期土壌のB群8・9類の須恵器坏の形態以外は認められなかったことも大浦B遺跡のⅡ・Ⅲ期の年代を決定する重要な事項となった。笹原遺跡の層位的な遺物分析によって編年した笹原編年表を大浦C遺跡第Ⅰ次調査の溝下層、上層出土の土器の対比に大浦A遺跡、上浅川a遺跡、横山遺跡、川西町壇山窯跡、同道伝遺跡、高島町大在家遺跡等及び大神窯跡BN2の資料に本遺跡出土土器を比較検討したのが第10表であり、第7・8表は大浦編年として平成5年に作成したものである。その後も、妥当性と認識しており、今回も使用した。これによれば従来通り、大浦B遺跡の主要年代はⅡ、Ⅲ期に当たり、竪穴住居跡を主体とするⅠ期は8世紀前半から8世紀中葉の編年Ⅰ期。遺構Ⅱ期は編年大浦Ⅱ期で8世紀中葉から同後半期。遺構Ⅲ期は8世紀後半から同末期の編年Ⅲ期、遺構Ⅳ期は9世紀初頭から同前半の編年Ⅳ期に位置付けられる。

3 大浦遺跡の位置付け

大浦遺跡は、大浦B遺跡のⅦ次の調査を含め計16次の調査を数え、大浦遺跡の意味する内容が解明されつつあると言つてよい。遺構は遺跡の中で最も小高い大浦B遺跡の欄列施設を中心に分布することが明確であり、柱の掘り方や建物跡から想定して、大浦B遺跡の建物群は大浦遺跡の中核であると考えたい。中核建物群の外部には別の欄列が配置され、外郭線と推測される。これらの遺構は官衙を前提に構築されたと言える。

官衙区域は約52,000㎡の範囲を有し、3分の2の未調整箇所を残す。この広大な遺跡範囲から予想される官衙は置賜郡と推測するものが妥当と言える。

V次調査の段階で、欄列に囲まれた建物群は正倉院施設と推測し、郡庁施設はⅣ次調査区で発見された南北に延びる欄列とⅠ次調査の間に存在すると考えられていたが、Ⅵ・Ⅶ次の調査によって、この地域には存在しない可能性が高くなってきた。また北方、東方、南方を残しているので明確には断言できないが、地形やこれまでの調査から欄列で区画した場所が郡庁施設と予想される。

郡衙は土器と遺構の分析から2時期にわたって存続し、従来の集落跡を撤去して官衙を構築した状況を呈する。構築時期は8世紀中葉期で8世紀後半に建替えを実施している。建替えするために掘られた柱穴には多量の焼土や炭化物が認められた。火災の原因は不明と言わざるを得ないが、襲撃を受けたとも考えられる。Ⅰ次調査からは鉄鏝が数点出土している。その後、漆紙文書が示す様に9世紀初頭で官衙の機能を失ったものと言える。

県内の郡衙に関する遺跡は川西町道伝遺跡、南陽市郡山遺跡、高畠町大在家遺跡、村山市郡山遺跡がある。大在家遺跡は大浦編年Ⅰ期を主体とした遺跡近くに小郡山の地名が存在することから、大浦の前段階の施設が存在した可能性もある。最近の発掘列として川西町太夫小屋Ⅰ遺跡があり、大規模建物群が発見されている。9世紀前半の年代であり、大浦からの移行も考えられる。高畠→南陽→米沢→川西の順で郡衙が構築された可能性もあるが、いずれの遺跡も郡衙と推測される資料が一部認められたにすぎず、従って大浦遺跡の様に明確に建物施設が確認されたことは、古代の出羽国における律令社会を研究する上で、貴重な遺跡と言える。しかしながら全容を解明するまでにはいたっておらず、欄列で区画された建物群が正倉なのか郡庁なのかは断言できない。この点を今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 1981 「笹原遺跡発掘調査報告書」 手塚 孝他 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
 1984 「道伝遺跡発掘調査報告書」 藤田有宣他 川西町埋蔵文化財調査報告書第6集
 1986 「上浅川遺跡第3次発掘調査報告書」 手塚 孝他
 米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集
 1987 「大浦A遺跡・大浦C遺跡発掘調査報告書」 手塚 孝、菊地政信 他
 米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集
 1991 「大浦B遺跡発掘調査報告書」 菊地政信他
 米沢市埋蔵文化財調査報告書第29集
 1992 「大浦C遺跡発掘調査報告書」 手塚 孝、山田 隆
 米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集
 1993 「大浦B遺跡発掘調査報告書」 手塚 孝、菊地政信
 米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集
 1998 「大浦A遺跡発掘調査報告書」 月山隆弘 米沢市埋蔵文化財調査報告書第59集

※「道伝遺跡」 川西町教育委員会発行
 「笹原」米沢市都市計画課 まんぎり会
 米沢市教育委員会発行
 その他 米沢市教育委員会発行

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおうら いせき
書名	大浦B遺跡
副書名	大浦B遺跡 第VI・VII次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第67集
編著者名	菊地 政信
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池3丁目1番55号 TEL0238-22-5111
発行年月日	西暦2000年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おお うら 大浦	やまがたけんよねびわし 山形県米沢市 なかた まちあざおおうら 中田町字大浦 395外 400外	6202	米沢市 遺跡番号 J-245	37度 56分 00秒	140度 7分 30秒	19980511 ~ 19980703 19990419 ~ 19990630	1,025 m ² 1,792 m ²	宅地開発 に伴う発 掘調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
大浦	官 衙 跡	奈良時代 平安時代	掘立建物跡 土壇群	土師器 須恵器 土製碁石	欄列で区画された東西41.5 m×南北38.4 m範囲を中 核として建物跡が検出され た。奈良時代中葉～平安初頭 の置賜群衙と想定される

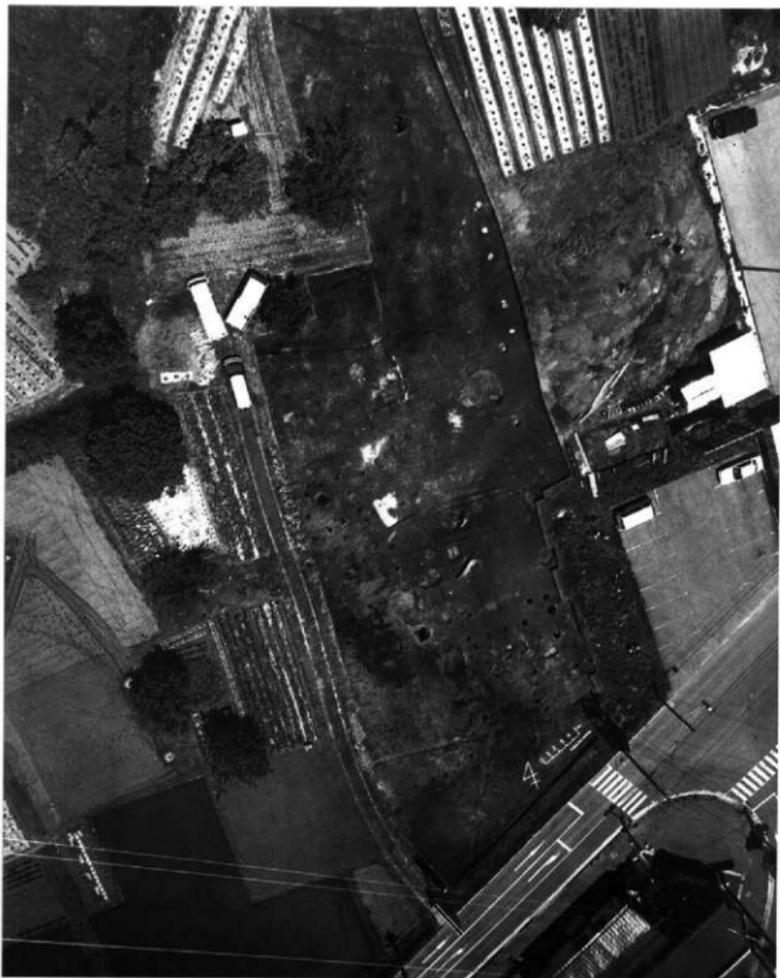
写 真 图 版

図版 1 (第VI次調査)



▲第VI次調査区遺構全景 (空中写真)

図版 2 (第VII次調査)



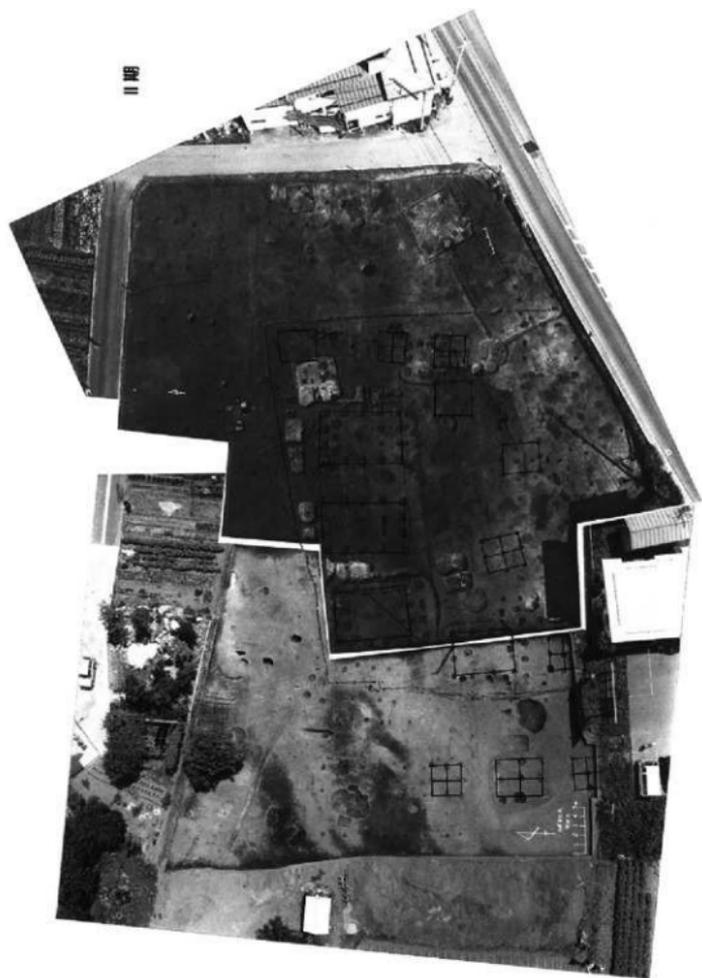
▲第VII次調査区遺構全景 (空中写真)

図版 3 (第VI・VII次調査)



▲第VI・VII次調査区遺構全景 (空中写真)

図版4 (第I・V・VI次調査)



▲第I・V・VI次調査区Ⅲ期遺構全景 (空中写真)

図版5 (第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ次調査)



▲第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ次調査区川野遺構全景(空中写真)

図版6 (第VI次調査)



▲発掘調査風景 (南方から)

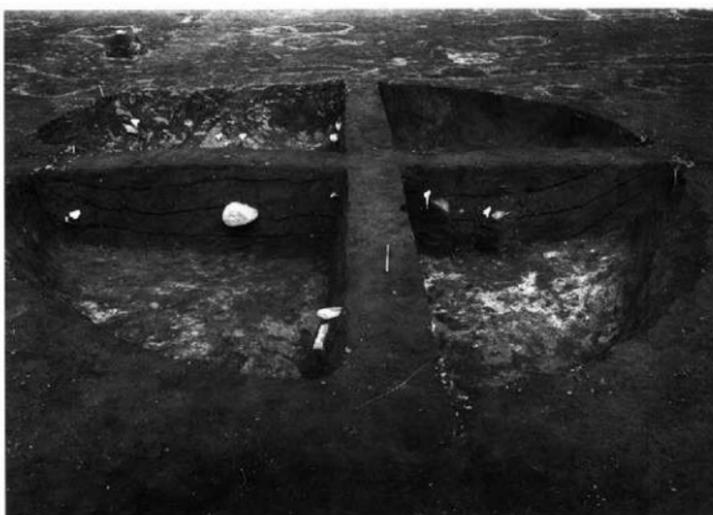


▲AN5 プラン確認状況 (西北から)

図版 7 (第VI次調査)

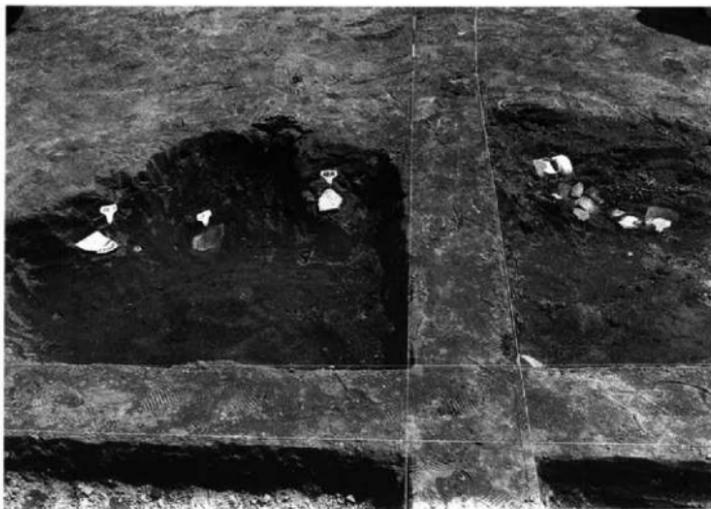


▲ AN5 セクション状況 (南方から)

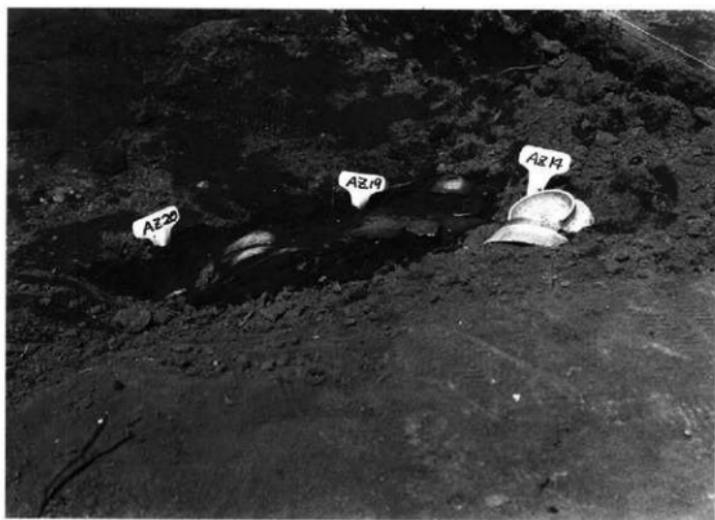


▲ AN5 プランセクション状況 (東方から)

図版 8 (第VI次調査)



▲ AN5 遺物出土状況 (東方から)

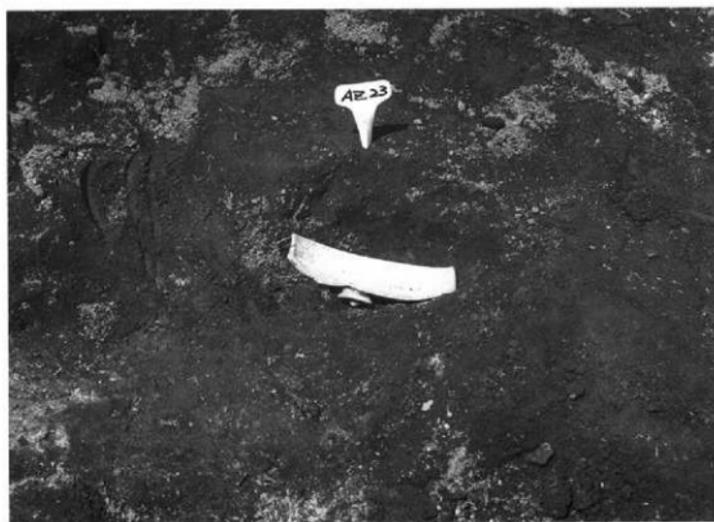


▲ AN5 遺物出土状況 (南方から)

図版 9 (第VI次調査)



▲ OZ17 刀子出土状況 (南方から)

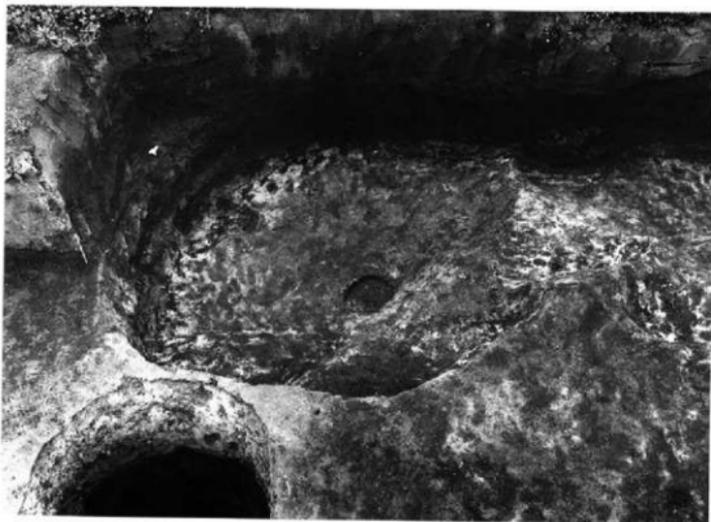


▲ AZ23 須藤患器蓋出土状況 (東方から)

図版 10 (第VI・VII次調査)

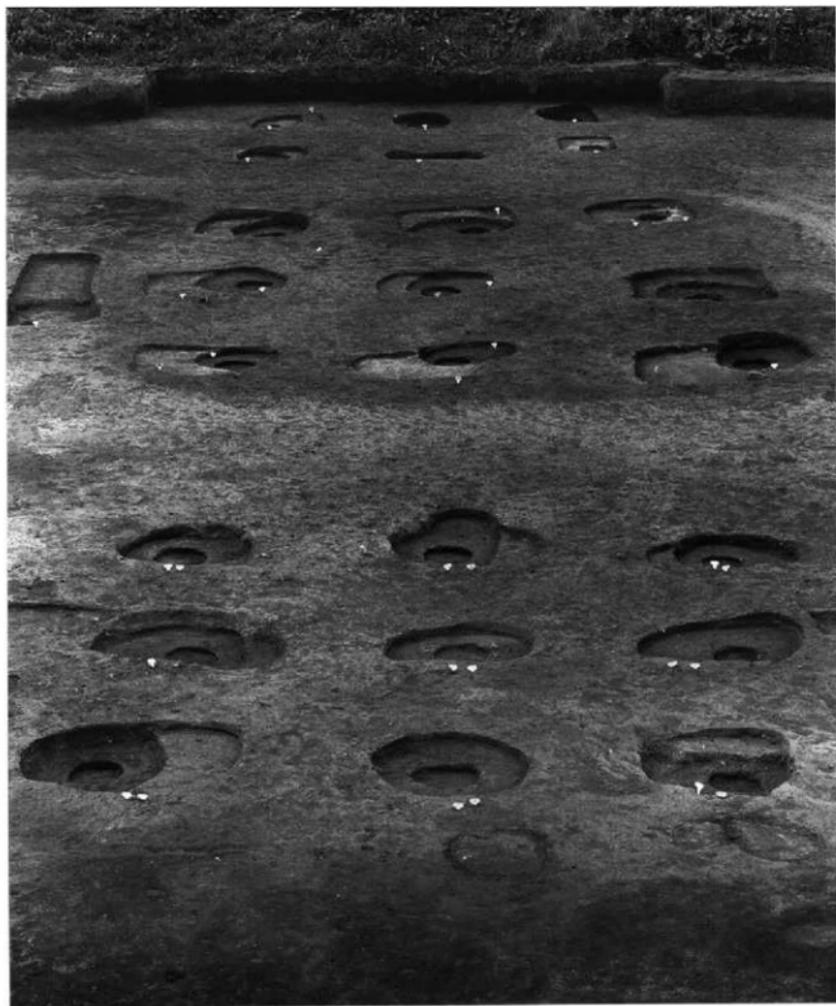


▲DY767(土器埋納土坑) 土師器出土状況 (東南から)



▲DY885 完掘状況 (南西から)

図版 11 (第VI次調査)



▲手前からBY44・45・46・47・48・49 検出状況 (北方から)

図版 12 (第VI次調査)



▲ BY42・43・21 検出状況 (北方から)



▲ BY42に伴うKY456セクション状況 (西方から)

図版 13 (第VI次調査)

643

609



▲TY643 (VI期)、TY609 (V期) 半截状況 (南方から)

TY658

TY627



▲TY658 (IV期)、TY627 (II期) 半截状況 (南東から)

図版 14 (第VI次調査)



▲ TY615 (Ⅳ期)、TY615 (Ⅴ期) が共用する柱穴平面形状 (南方から)

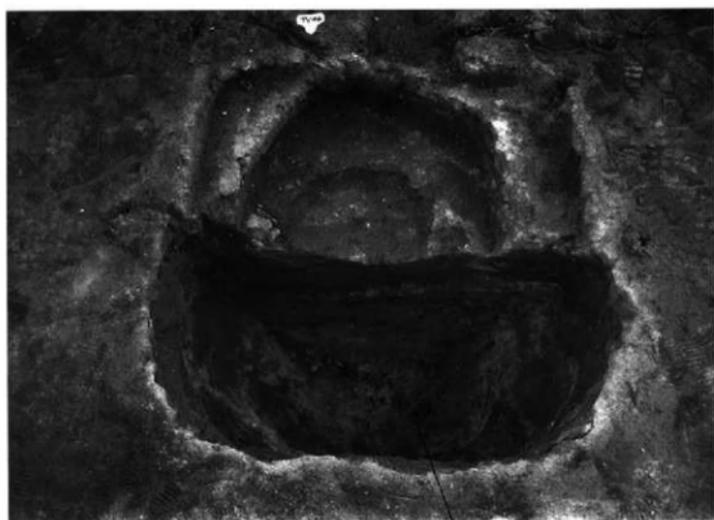


▲ TY650 (Ⅲ期)、TY617 (Ⅱ期) 重複状況 (南西から)

図版 15 (第VI次調査)



▲ TY634 掘出状況 (西方から)



▲ TY638 (II期) 半截状況

TY638

図版 16 (第VI次調査)



▲TY615A (II期)、TY615B (III期) の半裁状況 (東方から)



▲TY605 (II期)、TY641 (III期) の半裁状況 (南東から)

図版 17 (第VI次調査)



▲BY52 (IV期) 近景 (北方から)



▲BY52 (IV期) 近景 人の立っている箇所が柱穴

図版 18 (第VI次調査)



▲ ON233 (北西) コーナー部近景 (西北から)



▲ ON233 西側近景 (南方から)

図版 19 (第Ⅶ次調査)

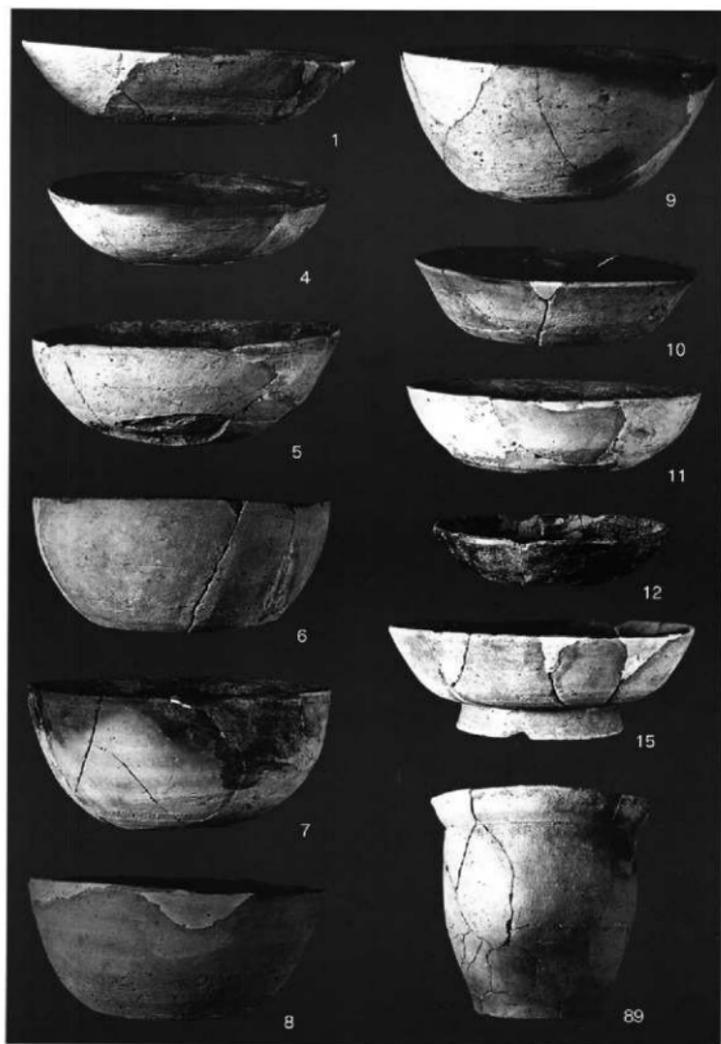


▲ BY54 近景 (南方から)



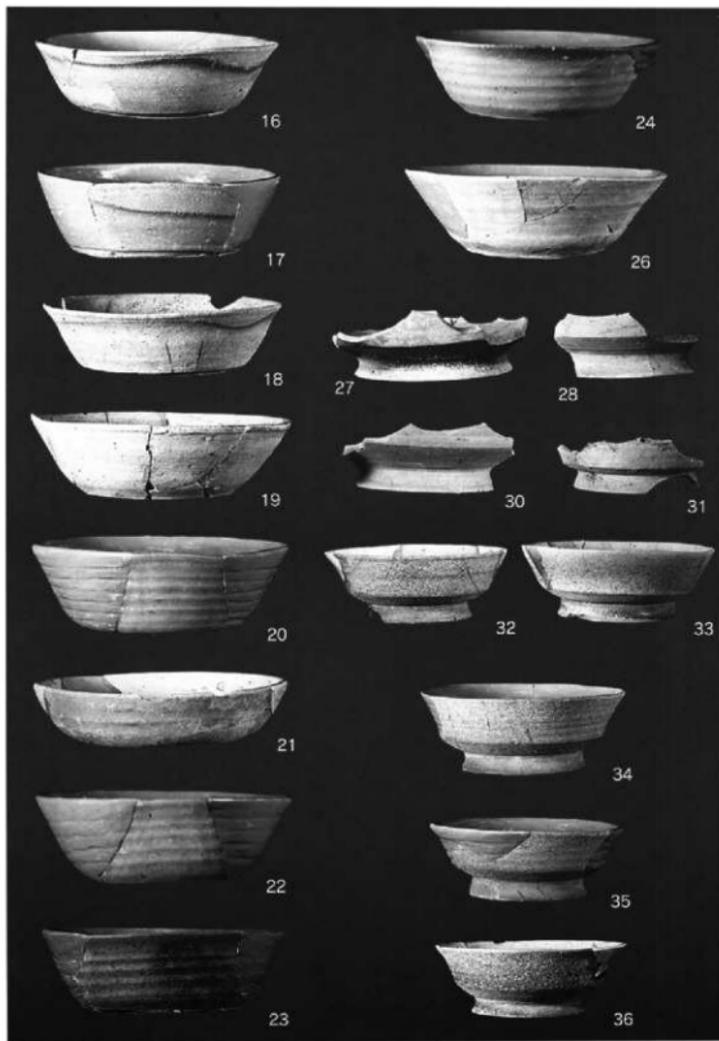
▲ BY53 近景 (南東から)

図版 20 (第VI・VII次調査)



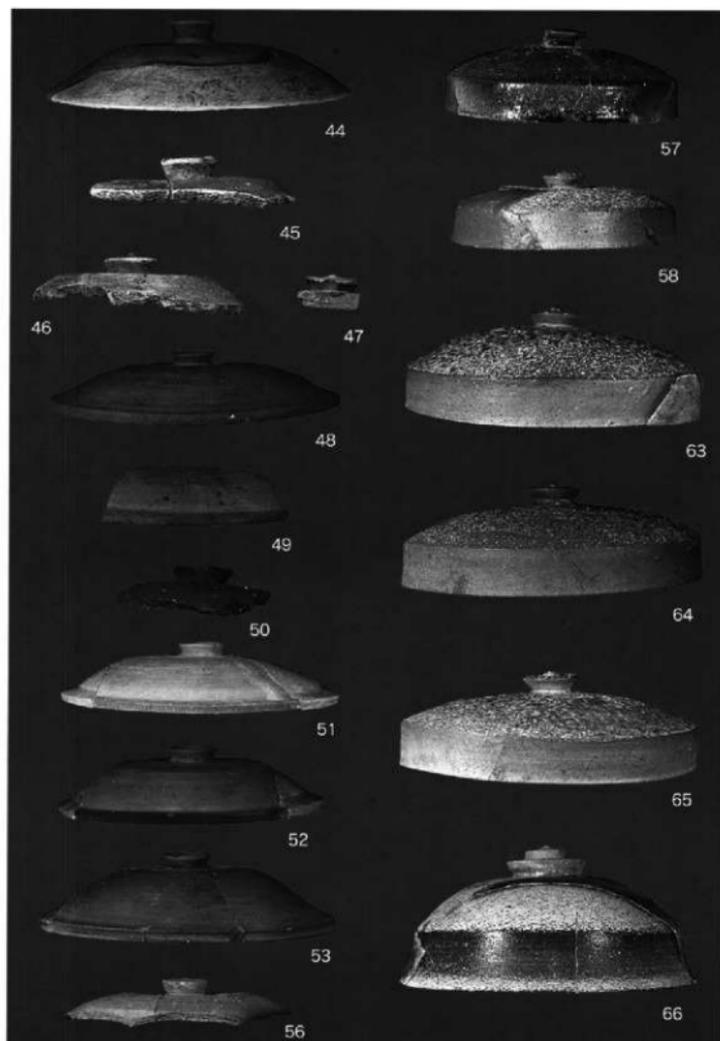
復元土器

図版 21 (第VI・VII次調査)



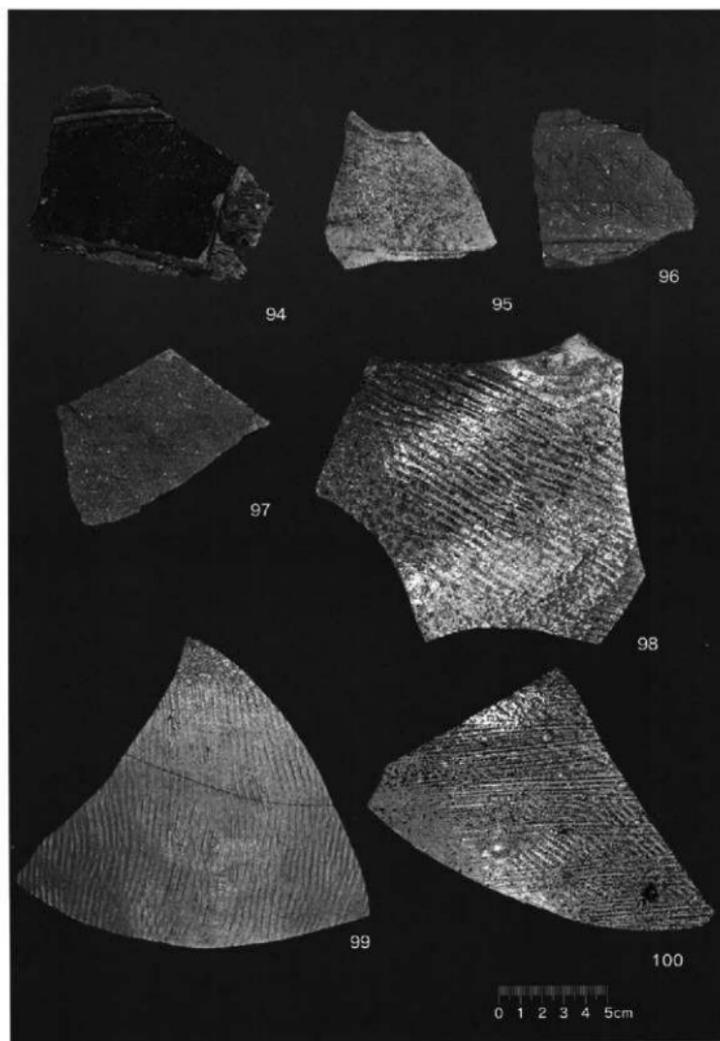
復元須惠器坏

図版 22 (第VI・VII次調査)



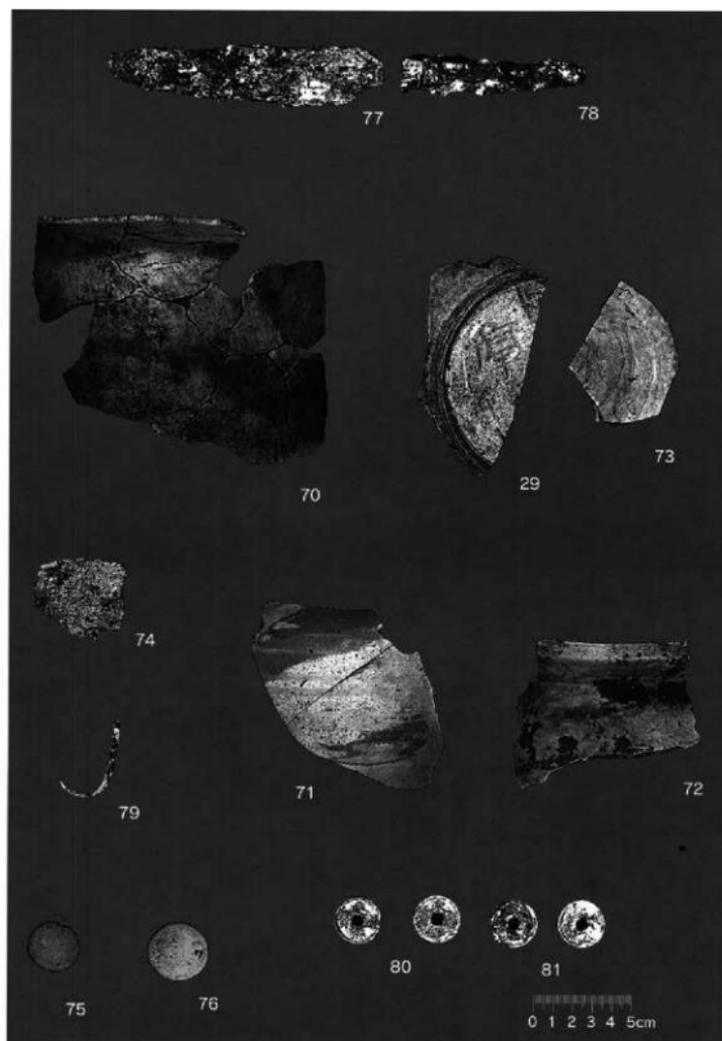
出土土師器蓋、須恵器蓋

図版 23 (第VI・VII次調査)



須恵器壺・甕類

図版 24 (第VI・VII次調査)



須恵器壺・埴類

米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集

大浦B遺跡発掘調査報告書

平成12年3月25日 印刷

平成12年3月30日 発行

発 行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-55
TEL (0238) 22-5111
(内線7504)

印 刷 タカノ印刷有限会社
米沢市泉町一丁目1-1
TEL (0238) 38-5395
FAX (0238) 38-5399